
緋弾のARIA-たった1人のニュートラル-

桜野フブキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア - たった1人のニュートラル -

【Nコード】

N3593V

【作者名】

桜野フブキ

【あらすじ】

前に進みたかった。そのためにもがいてもがいて、もがきまくって。とにかく、前に進みたかった。早く目的地に着きたかったからだけど、本当に目的地なんてあるのだろうか。この先はずっと道が続いているんじゃないだろうか。それでもいい、いまのまま変わらない日々を過ごせる。しかし、物語には必ず終着点がある。それがたとえ終わりの始まりだろうとも。

はじめにあーだこーだいうやつ

この小説はフィクションであり、実在の人物、団体、地名等とは一切関係ありません。

また、この小説は原作『緋弾のアリア』を元にした二次創作です。

今後の展開によっては、原作『緋弾のアリア』の世界を壊すような内容になるかもしれません。

それでもいいという方のみ読み進めてください。

この小説のコンセプトは「過去きのつより未来あしたを信じて……」

これから先は読まなくてもいいです

フブキ「堅苦しいコトはこの辺にして、ここからはこの小説の内容についての話をするぜ」

作者「ここにいるフブキとは原作にはでないこの小説のみのオリジナルキャラです」

フブキ「ちなみに、オリジナルキャラの主人公のコトをオリ主しゅというんだ。作者はオリ主のことを数年間ずっと、おりぬしぬしって読んでたことがある」

作者「言わなくていいよ、この変態主人公」

フブキ「あんたが書いたキャラだろうが!!」

作者「この小説の行き着く先は作者自身もわかりません」

フブキ「完全にノープランだな。あと つけんな」

神・作者「オマケに駄文だし、読みにくい文章かもしれない」

フブキ（笑）「文才無いなら書くな。そんな奴が神とか名乗るな。あと何でオレの名前の後に（笑）つけたんだ？」

作者「それでも読んでくれる人、アナタはきつとドMでしょう」

フブキ「無視かよ……あとお前なに読者にケンカ売ってんの？バカなの？死ぬの？」

作者「大丈夫だって。どうせ注意事項なんざ誰も見ないんだ」

フブキ「そういう発言やめろよ!!そんなことばっか言ってるから自宅に『死ぬよ!!』って言いにくる奴がいるんだろうが!!」

作者「大丈夫、あの人、家を間違えたみたいで後から謝りに来てくれたから」

フブキ「家間違えて謝りにくるとか、その人いろいろ大丈夫かなあ」

作者「そんなわけで、こんなノリの内容ですが、どうかこの小説をよろしく願います」

フブキ「よろしくお願いします。さっきの話、作り話だよな？」

作者「……………うん、まあ一応」

以下はこれまでのあらすじです。

序章時のあらすじ

俺はただ憧れだけでこの学校に入ったわけじゃない。ただ自分も強くなりたくて、誰かを守る男になりたくて。ただひたすら前を向いて走って走って走りまくって、あの人に追いつきたくて……。必ず追いついてみせる。たとえ俺がニュートラルであろうとも。

1章開始時のあらすじ

覚悟が足りなかった。オレは本気で武偵になりたいと思ったことがなかったのだ。人を守るためには強くなければならない。オレは弱いままだった。なぜなら、覚悟が足りなかったから。でも、今ははつきりと言える。覚悟がなくなっただけでいい、弱くたっていい、ただ仲間を信じていることができるなら、それはきつと守ることにつながっていくんだ。

ももまん消失事件（前書き）

時系列は1巻のエリアがキンジの家に泊まりだした後です

ももまん消失事件

それは、ある日のお昼頃だった。

オレはリビングのソファーに座って、今ハマっているアニメを見ているところだった。

「お前昨日もそのアニメみてなかったか」

「フッフッフ、何を言ってるんだねキンジくん。ファンというものは毎日欠かさず、たとえ昨日見たものと同じ物でも見るものなのだよ」

「まっ、別にいいけど」

そう言っただけでキンジはパソコンの画面に視線を戻してしまった。

この部屋にはオレ以外に二人の人間がいる

パソコンに向かってうんうん唸^{うな}っているのは俺のルームメイトでクラスメイトであり親友である遠山キンジ。

実は中学^{インターン}からの同級生でもある。

まあ、俺とキンジの関係は置いておくとして、もう一人説明しておかなければいけない人間がいるのだが：

「ない、ない！！」

岡村さんと矢部さんならここにはいませんよー。

「あたしのももまんがなーーーーーい!!!!!!」

さつきから台所でガサゴソなにしてんのかと思ったら、ももまん探してんのか。

近所迷惑な大声を発した人物は神崎・H・アリア。

彼女はロンドン武偵局からやってきていて、俺には全く無縁のSランク武偵である。

しかし、彼女がSランクだというのは未だに信じられないのである。なぜなら、先ほどの大きな声はホントに彼女が出したのか疑いたくなるようなちびっ子である。

人を見かけで判断しちゃいけないんだけどさ。

「キンジ!! あたしのももまん知らない!?!」

「俺が知るわけないだろ」

「じゃあ、フブキ!! あんた、あたしのももまん食べたわね!!」

「尋ねるところか、いきなり犯人扱いかよ!!」

「人のものを勝手に食べるのはあんた以外にいないわよ!!」

「人をいやしい人間みたいに言うのやめてくれません!? 少なくとも

とも俺は食ってねえよ!!」

「うるさい、うるさい!! 絶対あんたが食べた!! あんた以外に考えられない!!」

「俺が食ったって証拠はあんのかよ!？」

「べ、別にないわよ」

「ここだ!! ここで押し切る!!」

「ほら見る!! 証拠もないのに人を犯人扱いすんじゃない!!」

「…はあ。じゃあいつたい誰が食べたって言うのよ」

「…まあ、俺なんだけどね。」

「だいたい、食器棚の奥なんか隠しておくから食べられちゃうんだろ」

「べ、べつに隠してたわけじゃないわよ。後で食べようと思って置いておいただけなんだから」

「あんまり食べると太りますよ」

「う、うう、うるさい!! 黙らないと風穴空けるわよ!!」

「へいへい」

とりあえず両手を上げて降参の意を表しておいた。

黙ってアニメでも見てよーっと。

結局、アリアは下のコンビニで追加のももまんを袋いっぱい買ってきた。

喜々とした表情でそれを抱えリビングに入ってきたので、俺はニヤニヤしながら眺めているとこちらに気づいたアリアは顔を赤くしながらもフンッとそっぽを向いてしまった。

今現在、この部屋にいるのは3人。

なのに、聞こえてくる音はテレビから出るキャラクターの声とBGMやSE、キーボードを叩く音とマウスをクリックする音、そして時折聞こえる袋のガサゴソという音。

会話なんて物はなく、それぞれがそれぞれのことをしている。

この時間はなんだかとても心地よかった。

平和を感じられ、武偵なんていらねーってぐらい穏やかだった。

俺たち武偵はもっとこういった時間を大切にしなくちゃいけないと

思う。

常に気を張り詰めていたらいつかつぶれちまう。

だから、たまには立ち止まって息抜きをする事だって武偵の大事な仕事なのだと思っ。

……

……

…

「あんたさっきなんて言った？」

「は？」

「質問を変えるわ。あんたさっき、あたしのももまんの隠し場所を言ったわよね。誰にも教えていないのに」

ああ、アリアさんが死神もビックリな殺人オーラを出している！！

「悪いが、俺はあんたのももまんは奪っちゃいないぜ」

「……………（恐怖の威圧感）」

「俺が奪ったのは…あんたの心さ」

言い終わると同時にアリアさん愛用のガバメントが火を吹いた！！

「ちょっとまってアリアさん！！ 俺いま防弾制服じゃない！！」

「問答無用」

声を張らないところが逆にコワイ！！

あつ！！ キンジの野郎１人で防弾物置に隠れやがった！！

俺も入れろ！！

「悪いなフブキ。この物置、１人用なんだ」

スネちゃまーーーーー！！

結局、あのあと何度も撃たれました。

それはもう容赦なんて言葉がこの世に存在しないかのように。

ただ、ひとつ分かったことが。

スリッパが防弾で助かった。

ももまん消失事件（後書き）

はじめまして。桜野フブキと申します。初投稿で2次創作というジャンルに無謀にも挑戦してみようかと思っています。正直拙いところが多かったりするかもです。表現とかも得意じゃなかったり。じゃあやるなよとか言われそうですけれど、頑張って飽きないように続けていけたらいいなと思います。どうかよろしくお願いします。

憧れを胸に・A（前書き）

時間は前回よりも遡ります。

憧れを胸に・A

- - - 子供のころヒーローに憧れる男の子が出るのは世界の掟だ。
- - - 当然オレだってその世界の掟に従うかのように何かに憧れ
を示していた。

- - - オレの憧れはテレビの中の特撮ヒーローに対するものでは
なく、現実リアルにいるヒーローだった。

- - - オレの目に写る大きな背中。それは、人を守る盾のように
見えた。

- - - ただその盾がかつこよく見えたから、オレも誰かを守る盾
になりたい。いや、なるんだとそう誓っていたのに・・・

- - - 現実リアルはそう簡単にうまくいくもんじゃないんだ。

「留年決定だ」

「はい!？」

その一言から始まる物語って後々、面倒事に巻き込まれるフラグだつたりする。

なぜなら、留年なんて普通の男子高校生が送る学園生活のなかではほぼ無縁の言葉じゃないだろうか。

主人公がよっぽどアホの子じゃない限りは留年という字が引きこもりになるぐらい出てこないのに、こうもあっさり告げられるなんて普通じゃない。

「もう一度言つてやる、お前は留年決定だ。桜野」

うわーお！ 留年のバーゲンセールだ。ついでにオレの冷や汗もセール中だぜ！！

「2回も言わなくてもわかりますよ！！ なんでもう1度1年生やり直さなくちゃいけないんすか!？」

「心当たりが無い、とは言わせないぞ」

「まったく、ありませんね!!」

海よりもふかーいたため息をついた先生が一枚の書類をオレに見せつけてきた。

「なんすかこれ」

「お前の去年の成績表だ。ここのグラフを見る」

指し示すのは成績のグラフ。一般教科と専門科目の成績がレーダー

チャートでグラフ化されている。

少なくとも一般教科の部分には問題がない。となると残りは……。

「えーっと。先生。悪いんですけどこの専門科目の成績は天才には見えませんね」

「そうだな、お前が天才^{アホ}過ぎてここだけグラフが中に引っ込んでて見えないな」

見ると専門科目の部分だけ綺麗な谷ができていた。グラウンドキャニオンもびっくりだ。

「先生、いうじゃないですか。綺麗な谷には棘があるって」

「こんなポンコツが一般教科^{ノルマーレ}の成績がいいなんて未だに信じられないな」

「大事なかわいい教え子をポンコツ呼ばわりなんてひどくありません!？」

「かわいい教え子（笑）」

「笑うな!!」

結局意味不明なやり取りを1時間続けた後やっと本題に入ったオレたち。

ちなみに今日は1年3学期の修了式の日だった。それが終わった後にオレは呼び出しをくらい、^{マスターズ}教務科の担任の部屋まで何も知らずノ

「コノコやってきてしまったのだ。」

「関係ないですけど、教え子と数の子ってなんか似てませんか？」

「いい加減本題に入っていていいか？」

「こんな感じで1時間つぶれました。」

「お前には3つほど選択肢がある」

「先生、太っ腹。伊達に年は喰ってないですね」

「この瞬間選択肢が2つ消えて、残るは退学という選択肢のみが残ったがどうする？」

「ウソ！！先生は若くて美しい、永遠の29歳です！！」

「その中途半端な年齢で私が機嫌を直すと思ったのか！？」

「だったら何歳がいいんですか！？」

「24歳」

「ノータイムでも傲慢な要望を応えられてしまった。」

「いいかげん話を進めてくださいよ」

「あつ、24歳だとは言ってくれないんだ。ていうか、全部お前が悪いんだろうか！！」

それからさらに1時間浪費し時刻は午後5時に。

「改めて言っぞ。お前には退学するか留年するか選ぶ権利がある」

「・・・どっちもいやです。専門科目一つ落としただけでどうして留年しなければいけないんですか」

「その科目がうちにとっちゃ一番大事だということが何故気づかない」

尤もである。

「何とかありませんか！？ オレこれでも一般教科ノルマーレの成績はかなり良かったでしょ！！」

「たしかに、お前の成績は両手の指に入る成績だな。しかし、それだけでやっていける世界じゃないのはその頭で十分わかってんだろ」

「・・・・・・・・・・」

東京武偵高。オレが通っている高校は武偵を養成する学校だ。

ただ一般科目の成績がよければいいという問題わけじゃない。

当然、武偵には大事な能力がある。

事件を解決するには頭がいいだけじゃだめだ。

特にオレが通う強襲科アサルトではな。

「強襲科アサルトの学年末試験は最下位。おまけにランク試験の成績も最低レベル。どう頑張ったって上にはあげられんな」

別に怠けていたわけじゃない。しっかりと勉強したり練習はしたさ。なのにこの成績は単純に素質がないどころの話じゃない。

文字通り、「—It is absurd《話にならない》」なのである。

「いまさら、転科なんてしたくありません。オレは強襲科アサルトでやっていくつもりです」

「お前の事情なんてこちらとしては関係ないな。普通は留年して転科して何とかやっていくか、潔く退学するかだ」

「・・・でも、オレは・・・」

「だが、何とかしてやらんでもない」

!?

「ほ、本当ですか!？」

「いったろ、選択肢は3つあるって。お前がよければ、留年せずに

2年に上げれる」

「ど、どうすれば!!」

「だーっ!! 顔が近いって!! ……単純な話、補習を受けてもらう」

「補習? でも3学期は補習はないんじゃない?」

「所謂制度だよ。条件さえ合えば補習を受けられるんだ」

「条件って?」

「大したことはない。ただ、一般教科ノルマーレの成績が良ければ受けられる」

「まじですかっ!?! じゃあオレは受けられるんですね!! その制度を!!」

「まあな。だがきついぞ? 補習を受けるのは」

「やりますよ。オレはこんなところで足踏みなんてしてられませんからね。で? その制度ってのは?」

「名前は”ニュートラル制度”。お前みたいな一般中学出の奴バンチユーに対する救済措置だ。もっとも、その制度を受けたやつは今まで一人もいないがな」

「みんな・・・優秀なんですな」

「お前がアホなだけだ。どうだ? 受けるか?」

「もちのロン!! ニュートロンだか、ニュータイプだかやってやりますよ!!」

「ニュートラルな。でさっそくお前にやってもらうことがある」

「なんですか!!」

「^{マサル}強襲科^{ニユートラル}やめて無所属になってもらう」

憧れを胸に・A（後書き）

後半へ続く

憧れを胸に・B

「む、無所属う！？ 話が違っじゃないですか！！ オレは強襲科アサルト辞めるつもり無いですよ！！」

「うだうだっさいな。話は最後まで聞け」

熱くなっても仕方がないので立ち上がったオレは再び椅子に腰を下ろす。

「お前がなんと言おうと強襲科アサルト辞めてもらっ。だが別に他の科に入れとは言ってないだろうが」

「じゃあ何なんですか無所属ニュートラルって」

「ちゃんと説明してやるって」

曰わく、ニュートラル制度とは一般科目の点数がよい生徒がそれぞれ属する科の成績が著しく悪いときに特別に受けられる制度である。

三学期修了時にその制度を受けるために申請書を提出しなければならない。

「んで、全部の科の補習を受けてそれぞれレポートを提出すれば見事合格か。簡単じゃないっすか」

「しかし、簡単じゃないぞ。お前が2年に上がった時、所属科は我々が職員会議で決定する」

「な、なんだってー」

「補習終わったら強襲科アサルトに戻るんじゃないのかよ!!」

「しかも、場合によっては無所属ニートラルだな。で、どうする？ 受けるか、受けないか？」

わかつていくせに。

時は進み、2年の始業式の前日。

それまでオレは毎日休みなく補習を受け続けた。

メデイカ アンビュラス コネクト インフォルマ
衛生科や救護科では薬品をぶちまけ、通信科や情報化では機会をぶ
つ壊し、装備科アムドや車輛科ロジでは兵站任務をことごとく失敗し、諜報科レザド
や尋問科ダギュラ、鑑識科レベアでは、なるほど、わからん状態だ。

これらの科目の担当教師は皆、最終日には「君に物を教えるぐらいならノーベル賞を取るほうがずっと楽だ」というとても失礼なことを言われた。

狙撃科スナイプと探偵科インケスタは少しだけ楽だった。

なんとか、強襲科アサルトで習った知識を少しばかり生かせたからだ。

そして、現在は強襲科アサルトの補習授業でこの学科で最後なのだ。ちなみに今日は最終日。

本日の補習授業は射撃訓練場での中距離射撃訓練。

単純な話、的に書かれた人を模した黒い絵の心臓の辺りがターゲットだ。別に心臓を狙うわけじゃないが、説明がめんどくさいので省く。

射撃訓練場へ赴くとすでに二人ほど先客がいた。

手前は栗色の髪を左右両側白いリボンで縛っている、だいたい身長140cmぐらいの小さな女の子。

奥にいるのは、ピンク色の髪をツインテールにしたこれまたちっこい女の子。

どちらも力ワイイなあ。

つと、いかんいかん、オレは決してロリコンじゃないぞ。

オレも始めるか。

オレは愛用のガバメントを取り出し、いざ開始!!

バンッ!! バンッ!! バンッ!!

3発発砲し、1発だけが見事ターゲットにヒット。

「フッ、今日も絶好調だぜ」

「なに、かつこつけとんや!!」

「イタッ!!」

頭にチョップくらいました。

「何するんすか!! ちゃんと当たってるでしょう!!」

「隣の的に当てといてなに言ってるんだ!!」

ありゃー、ホントだ。

「コラッ!! 集中しろ!!」

今度はオレが怒られたんじゃない、オレから見て手前にいた栗色の女の子が怒られていた。

「まったく、お前ら2人は全く集中力がたりんな」

なんで正座させられとんねん。

オマケにさっきの女の子までいっしょに正座させられとるわ。

「お前ら、あれ見ろ」

先生が指差す先には奥にいた桃色ツインテールがガバメントを2丁銃で構える姿が。

そして、ターゲットを見るとなんと全弾ドンぴしゃ。

・・・いるもんだな、天才って奴が。ああいう何でもできそうなの

つってオレは苦手だ。

まあ、単純に嫉妬って奴なんだがな。

あの實力から察するにおそらくSランク武偵だろう。

「・・・すごいです。アリア先輩」

なんとなく、人物鑑定をしていると横からつぶやきが聞こえた。
ツイートしたいならツイッターでしなさい。

「お知り合い？」

「へ？・・・い、いいえっ！！　あたしとアリア先輩がそんな勿体無い関係じゃありません！！」

何故か顔を赤くし手をおもいつきり両手に振る謎少女。

勿体無いって関係って・・・。

「・・・そ、そりゃあアリア先輩と戦姉妹アミカになれたらいいなあとは思いますが」

ファンみたいなもんか。

うらやましいですなあ、あのアリア先輩とやらは。

二人とも正座状態でアリアと言う女の子を見ていると、当の本人は今日のノルマを終えたのかさっさと訓練場から出て行ってしまった。

その時、オレの脳に電流走る。

「ねえ。アリア先輩のこと尾行ストーキングしない？」

「へっ！？ え！？ いや、だめですよ！！ そんなこと！！」

「気になるんじゃない？ 憧れのアリア先輩の私生活」

「気になります！！ えっ？ じゃなくて・・・ええと・・・」

フッフッフ、どうやら体は正直なようですなあ（悪人顔

「よし、決まり！！ それではさっそくレッツゴー！！」

訓練場を出ようとすると、誰かに頭をつかまれた。

「どこへ行くこうというのだ？」

声のした方を向くとそこにはブーリーが・・・じゃなくて先生がいた。

やべ、忘れてた。

「そんなに行きたいなら地獄へ連れてってやるぞ・・・」

「いやー。やめてー。ここは戦場じゃなくって、訓練場よー（棒」

ブチッ！！

似た者同士

「・・・ごめんな。なんか、巻き込みまっつて。大丈夫か？」

「・・・正直ものすごく疲れました」

地獄の射撃訓練をなんとか二人で乗り越え、現在適当にぶらぶら散歩中の俺たち。

正直テンションだだ下がりなわけで。

「お詫びと言っちゃあなんだが、なんかおごるよ？」

「いいんですか？」

「もちろん。迷惑かけちゃったからね。何がいい？ ラーメンとかラーメンとかラーメンがあるけど」

「ラーメンしか選択肢ないんですか！？」

「よし。あそこの来々軒へ行こう」

「おごってもらうのにこんなこと言うのもなんですけど、他のにしませんか！？」

「ん？ じゃあ、あそこのファミレスに入るか」

ラーメン嫌いなのかな？

ファミレスに入ったオレたち。

席に着くと、オレはすぐにボタンを押して店員を呼ぶ。

「ご注文は？」

「ラーメン二つ」

「まだラーメン推してたんですか！？ 店員さん違います！！
ラーメン一つとイチゴパフェください！！」

どんだけラーメン嫌いなんだこの子。

「そういえば名前言ってなかったな。オレは桜野フブキ。2年だ」

「間宮あかりっていいいます。強襲科1年です」
アサルト

「もしよかったら、ランクを聞いても？」

「・・・Eランクです」

まあ、さっきの射撃訓練を見て想像ついてたけどね。

「Eランクかー。まあ、まだ1年だしこれからだろ」

「そういつてくれると、ありがたいです」

落ち込ませてしまった。

オレって、あんま女の子と話したことないしなあ。

こういう時どんな顔をしたらいいのかわからないの。

若干気まずい空気が流れる中、店員さんが頼んだものを運んできてくれた。

よしっ！！ これなら少しはこの空気を変えられるぞ！！

さっそくラーメンを口に運ぶ。うん、うまい。

「ラーメン好きなんですか？」

パフェを食いながら若干ふてくされた顔が聞いてきた。

「実は超がつくほど嫌いなんだ」

「まさかの嫌いな食べ物！！ そんなに嫌いなものをなんで食べてるんですか！！」

「間宮つてなにか目標とかあったりする？」

「唐突な話題転換！？ あたし、聞いてはいけないこと聞いたんですか！？」

ぜえぜえと呼吸を落ち着かせ、水を一気に飲み干す間宮。

その後一息つく。どうやら落ち着いたようだ。

「あかりでいいですよ。あたしの目標はやっぱり、アリア先輩みたいな強い武偵になりたいんです」

「なぜ強くなりたいんだ」

なんとなく、この目標は予想できた。

1 番聞きたいのはいま言った質問の答え。

「あたしは弱いからです。強くなればもう、あんな思いをしなくて済むから」

最後の方はあまりよく聞こえなかった。

が、こいつはオレとよく似ている。

過去に何かあったんだろう。

大切な何かを失うぐらいの、何かが。

「それで、あたしアリア先輩に戦姉妹申請出したんです。一歩でも早くアリア先輩に近づきたくて」

この子はこの子なりに前へ進もうとしているのだ。

だれだって、普通はもがきながらも前へ進んでいくもんだ。

だがオレは前へ進むどころか、その場所に立ち止っている。

道が見えなくなり、ただ真っ暗な空間でただずんでいる。

「でも、友達はやめた方がいいっていうんですよ。お前みたいなEランク武偵が相手にされるわけないーとか、人には分不相応というものがあるとか」

「・・・そんなこと、やってみなくちゃわからないじゃんか」

「あたしもそう思うわ」

！？

「あ、アリア先輩!？」

「チャンスはだれにでも平等であるべきだわ」

そっいつて、オレの隣に座ったアリア先輩。

いったい、なにしに・・・。

「間宮あかり。あたしと戦姉妹^{アミカ}を賭けて勝負よ!..!」

似た者同士（後書き）

フブキくんがあまり女の子と話したことがないというのはウソです。
本人に自覚がないだけです

ちっこいと会話

「間宮あかり。あたしの戦妹^{アミカ}になりたいならあたしと勝負よ！」

食事中に突如現れたちびっ子。

いきなり勝負しろとは、空気読めないんか。

「よかったじゃないかあかりちゃん。これで頑張れば戦姉妹^{アミカ}にられるかもよ？」

だがしかし、当の本人は顔を赤らめてただボーっとしているだけだった。

大丈夫かコイツ。

「ところで、誰よ、アンタ」

初対面の相手に誰よとは。

普通は自分から名乗るもんじゃねえのか？

「2年、桜野フブキ」

「聞いたことないわねえ」

でしょうね。

「所属は？」

うーん。応えるべきか、応えざるべきか。

「速くこたえなさいよ」

応えざるべきだな。

「そう簡単には教えられないなあ」

ものすごく嫌な顔を浮かべて応えてやった。

「どうして？ なにか理由があんの」

「ああ。まあな」

「まあいいわ。それよりも、間宮あかり。さっさと勝負するわよ。それでもあたしは忙しいの」

うわー。いやな奴だなあ。

自分に憧れている後輩に少しは優しくしてあげればいいのに。

「ルールはこれよ。エムブレム」

エムブレム。

対象者はエムブレムを体のどこかに貼り、追跡者はそのエムブレムを取れば勝ち。

でもコレって、対象者有利何だよな。

「時間は30分。最後まで逃げ切れればあたしの勝ち。いいわね」

「……オーイ。聞いてるかー？」

あかりちゃんの顔の前を手で上下に振ってみる。

よく見るとあかりちゃん、

「気絶してる!？」

「なんですって!？」

口を全開にして目はどこか見てるようで見ていない。

正に放心状態。

ダメだコリヤ。

「時間とかは大丈夫か？」

「少しぐらいなら大丈夫だけど、10分で起きなきゃカウント開始するわ」

「そ・れ・じゃ・あ、あかりちゃんが起きるまで僕とお話してましようか」

「あたしエスプレッソ」

「いきなりパシリ扱い!？」

「ルンゴ・ドッピオ。砂糖はカンナでよろしく」

「此処ファミレス何ですけど。砂糖はなんとかなるが」

若干抵抗を試みるも彼女は携帯を開いてなにやらカタカタと打ち始めてしまった。

「行つてきまーす…」

自分の分の空いたコップを持ってドリンクのコーナーへ。

後でドリンクバー1人追加しとかないな。

「できれば、お名前の方をお伺いしても…?」

俺が揉み手で下手になりながらもそう質問した。

さすがにアリア先輩と呼ぶわけにもいかんしな。

「神崎・H・アリア」

ヨッシャアアアアーーーー！！！！！！

答えてくれたぜ！！

「ご趣味は…?」

「……」

それから、なんとか情報を引き出そうとも、一向に口を開いてくれません。

もう、投了です。

お手上げです。

ありません。

さすがの俺もイライラが募り、悪態をつくようになってしまった。

「チツ、ちびのくせに」(ボソリ

「あんた、いまなんつつた」

気づけば俺の眉間に漆黒のガバメントが!!

「な、何もいってませんよ!!ただ、神崎さんはちっこくてカワイイなあって」

「小さい言っな!!」

「イテッ!!」

ガバメントのグリップで頭を叩かれてしまった。

「次小さいって言ったら…」

言いながら神崎はガバメントの銃口をもう一度俺の眉間に引っ付け

て、

「風穴あけるわよ!!」

思つとろ

どこまで人をバカにすれば気がすむんだ、コイツは。

人のことを散々無視しといて、ちょこーっと悪態ついただけで銃を向けてきて黙れときた。

いくら寛大（？）な俺でも今回ばかりは力チンときたぜ。

「お前にそんなこと言われる筋合いはねえーな」

「なによ。やろうつていうの」

「いいな。それもいい。Sランク武偵だかなんだか知らねーが俺が捻りつぶしてやんよ」

「後で後悔しないでね」

そう言つて俺達は立ち上がる。

未だ放心状態のお嬢さんをちょっと強引に起こし、ファミレスを出る。

向かう場所は、模擬戦用訓練場。

だがその前に、

「すみませーん!」

エプロン姿の店員さんが追いかけてきた。

「どうしました？俺達なんか忘れ物でも…？」

「お代払ってください」

ちきしょう、しまらねえなあ。

所変わって訓練場。

俺達は暇そうな奴に審判をお願いし、配置についた。

両者、相見える。

「どうせなら、何か賭けない？」

「賭けるだど？」

「大したことないわ。負けた方は勝った方の質問に何でも答える」

成る程、さっき俺が自分の所属科を答えなかったから気になってんだな。

「いいぜ、別に。その条件で」

「交渉成立。さつさと始めましょう。あたしホント忙しいの」

審判の奴がこちらに返答を求めてきた。

俺は黙ってソイツに頷く。

「それでは、開始!!」

開始の宣言と同時に2つの発砲音。

お互いのガバメントが鳴らした音だ。

しかし、アイツは

「2丁銃か!?^{ダブル}」

両手で2つのガバメントを構える神崎。

片方は先ほどの漆黑、もう一つは眩しく光る白銀。

2丁銃ってことは、当然弾が2つ飛んでくるってわけで。

「あぶねっ!!」

顔の横を1発の弾丸が通り過ぎていった。

もう1発は足を狙っていたが、それは難なく避ける。

だが、相手は2丁銃^{ダブル}。

対2丁銃^{ダブル}なんてやったことねえぞ。

オマケに俺が発砲しても、

「ちょっと、あたしの方に弾が飛んでこないんだけど、真面目にやってんの？」

「俺はいつだって大真面目だ!!」

ほ、ホントなんだから!!

ウソなんてついてないんだからね!!

「あつそ。じゃあさつさと決めちゃうわ」

そう言うのと、神崎はこちらに走ってきやがった。

もう、勝負つけるつもりかよ!?

「くっ!?!」

無造作にガバメントを発砲。

だが、当たるわけもなく、ただあさつての方へ飛んでいくだけ。

牽制にすらならないなんて。

あっさりと神崎の接近を許してしまった俺はポケットから小型のフアイティングナイフを取り出し構える。

こちらに接近し続ける神崎にナイフを突き出す。

が、だめっ……！！

俺の突き出したナイフを踊るように避けた神崎はナイフを持った俺の腕を捻り、そのまま組伏せられる。

「いてててて！！ギブツ！！ギブツ！！」

「あんた、弱すぎない？」

審判役をやってくれた少年に礼を告げた後、俺はなぜか神崎に本日2回目の正座をさせられた。

「話さないでだめ？」

「約束でしょ。負けたら必ず質問に答える」

しゃーなし、か。

約束だったので仕方なく、俺は無所属ニユートラルのことを話すことにした。

「……ていうことは、あんたは今ランク無しの武偵ってこと？」

「そうだな。まあ、実際はEランク武偵と変わらんが」

「フブキ先輩Eランクなのに、Sランクのアリア先輩にケンカふっかけたんですか？」

「ん、まあ、実力差が大きいってことはわかってた。結果がどうなるかも見えてたしね。」

「じゃあ、どうして？」

「あれだけバカにされて逃げるのもなんか嫌だったからさ。男として。それに……」

「それに？」

「結果なんて努力次第で変えられるかもしれないだろ」

「……………」

二人は黙ったまま俺の言葉を聞いてくれた。

「最初からムリだなんていつてたらできることもできなくなっちゃう。俺はそうなるのはイヤだからさ」

「……………ムリ、疲れた、面倒くさい。この3つの言葉は人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉」

黙って聞いてくれていた神崎が俺の言葉に付け足すように声を発した。

「あんたはあんたなりにもがいているのね」

「……いや、俺はなににもできちゃいないさ。もがき方を知らない子供のままだからさ」

「だから、今必死に大人になろうともがいているじゃない」

大人になろうともがいている……か。

「……俺は、うまく、もがけているだろうか」

「さあ？あんたのもがき方まではあたしも知らないわ」

「いい加減だな」

「……どうやら、アンタの見方を変えないといけないようね」

「見方って？」

「見直したってこと。さっきのアンタに対する態度は悪かったわ」

「イヤ、別にいいさ」

「改めて自己紹介するわ。神崎・H・アリア。アリアでいいわ。よろしく」

そう言っつて神崎……いいや、アリアは俺に手を差し出してきた。

なんか、よくわからんけどとりあえず俺の事を認めてくれたってことか？

そう、思つことにする。

「桜野フブキ。よろしく」

差し出された手を俺は右手で握った。

小さな手の感触が右手に伝わってきた。

とても暖かく、そして、どこか冷たさを感じさせる手だった。

「それじゃ、改めて、間宮あかり！！あたしと戦姉妹アミカをかけて勝負よ！！」

「へっ！？あつ、ハイ！！」

「頑張つてねあかりちゃん」

「はい！！ムリかもしれませんが……最後まであきらめずがんばります！！」

なんとなくだけど、うまく行くような気がした。

根拠のない推理をするのは探偵失格だよな。

どちらにせよ、俺が気にすることじゃないか。

そんなことを考えながら俺は静かに帰路についた。

思うところ（後書き）

思ったことを言葉にするって難しいですね。私は表現力に乏しく、日常生活でも苦勞しております。

この度、緋弾のアリア - たった1人のニュートラル - をご拝読くださってありがとうございます。

初めまして、この小説を書いている作者です。

ご挨拶が遅れてしまって申し訳ありません。あとがきは物語の1日が終わったら書こうと思っていたんですが思ったよりも1日が長くなってしまいました。

1、2話ぐらいで終わらせるつもりだったんですがうまくいきませんでした。

無駄に長いと飽きちゃいますよね。

正直書く方も飽き……いえ、何でもありません。

私は思ったことを人に伝える事が下手でしてわかりにくいところが多いかもしれません。

もし、そういう部分があったと感じさせてしまったのなら誤ります。ゴメンナサイ。

さて、こんな暗いことばかり書いてもつまらないので今後のことでも書きます。

作者は飽きっぽかったりします。

俗にいう三日坊主だったりします。

この小説はそれを直すために書いてたりします。

できるだけ失踪しないようがんばって書き続けるつもりです。

ですので是非とも、応援の方よろしく願います。

平穩な朝

桜野フブキの朝は早い。

朝は5時ごろに起き、日課のランニングを行ったあとは朝食作りに精を出す。

作るのは2人分。自分の分はもちろん、ルームメイトの分まで作っているのだ。

「今日の朝はトーストと目玉焼きだな」

いたってシンプルな献立を手早く作る。

時間があれば多少凝ったものを作ることできるが朝はそんなに時間がないため基本的に簡単なものばかりになってしまう。

「……ジャムがねえ」

冷蔵庫の中を覗くとなんといつも置いてあるイチゴジャムを今日に限って切らしていた。

「そういえば、昨日の晩飯イチゴジャムだけだったんだ」

昨日帰ってからいったい何があったのかはこの際省いておく。

「いいや、キンジにはイチゴジャムの代わりに豆板醤で我慢してもらおう」

ピン、ポーン。

そろそろキンジを起こしに行こうと思っていた時、慎ましいチャイムの音が室内に響いた。

この鳴らし方は星伽^{ほとぎ}さんだな。

ドアの覗き穴から外を見ると、そこには案の定、星伽さんの姿が。

確認した後ドアチェーンを外し、カギを開けてドアを開く。

「おはよう、星伽さん」

「あつ。おはよう、桜野くん。キンちゃん……いるかな？」

彼女は星伽^{ほとぎ}白雪^{しらゆき}さん。キンジの幼馴染で星伽神社の巫女さんらしい。

大和撫子のような美人である。大和撫子みたことないけど、たぶんすごい美人なんだな。

彼女は超能力^{supra}捜査研究科に所属している。

そう。字の通り彼女は超能力が使える。……らしい。

ちなみに、ニュートラルの補習授業で俺はSSRともう一つ、CVRというところでは補習は受けていない。

というか、受けられないのだけだね。

「キンジならまだ寝てるよ。もしかして、朝飯作ってきたの？」

彼女はいつも、ご飯を作ってきた時は大きな和布で包んで持ってきているのだ。

俺も、図々しくもご相伴に預かっている。

今日もその包みを持ってきていたのでなんとなく予想はできた。

「うんそうなの。もしかして、ご飯作っちゃった？」

「ごめんね、もう作っちゃったんだ」

「そっか、そうだよね……」

やべ、星伽さんしょんぼりしちゃった。

「まあ、一緒に食べればいいよ。せつかく作ってきてくれたんだしさ。星伽さんが作ってきてくれたんだからキンジも喜ぶよ、きっと」

「ほ、ホントに！？キンちゃんよろこんでくれる！？」

「イテテ！！よろこぶ！！絶対よろこぶから、放してくれ！！」

くっつかかるように俺の胸倉を掴んでくる星伽さん。

ホントキングジのになると豪快になるなあ、この子。

親友

「キンジたぶん寝てるだろうから起こしてきてくれるかな？」

玄関前で妄想に浸っていた星伽さんほしぎを部屋へあげるのに10分もかかってしまった。

その間同じ階の人がこちらをちらちらと妙な目で見てくるから少々焦ってしまい、冷静な判断ができずにいた。

男子寮に女の子がいるんだから、そりゃあ見るよな。特に美人さんだし。俺でも見る。見た後一度部屋に入ってもう一度外に出て見る。

まあ、そんなことは置いていて。

星伽さんが持つてきてくれた和布の包みを解き、中を見るとこれまた綺麗な漆塗りの重箱が。

「えっ！？私が！？で、でもそれってキンちゃんの寝顔が見えちゃうし……いやっ！！それが別にいやだってわけじゃないんだけど……でもっ！でもっ！」

星伽さんが両手を両頬に当てなにやら葛藤で悩んでいる様子。

その様子を見た俺はニヤアと顔を綻ばせる。

微笑ましい光景を見ての微笑と、面白いことを思いついた悪戯心まるだしの顔が混ざる。

「せつかくだし、寝ているキンジにキスしてきたら？」

「いいんですか!？」

うおっ!!目の前に星伽さんの顔が!!

桜野フブキに食って掛かる星伽さんの図（パート2

「ああ!!俺が許す!!」

「勝手に人の身体の一部を売ろうとするな」

星伽さんに全力のサムズアップで応えているところに対象のキンジ
さん登場。

キンジさんの説明は前したような気がするため省く。

「おはよう、キンジ。朝飯できてるよ」

「めちゃくちや清々しい顔での挨拶ありがとう。しかし、残念だが
目覚めは最悪だ」

「悪い夢でも見たのか？」

「ああ。幸いにも夢で終わったがな」

少し騒ぎすぎたせいでキンジ起きちまったか。

次回からはもう少し静かに迅速に行動に移そう。行動するのは星伽
さんだが。

「変なコト考えてるな……ったく。お前といるとおちおち寝てもいられねえ」

といいながら俺から牛乳入りのコップを受け取る。

まあ、付き合いは長いわけだからへんの気は回るようになってる俺。

なんか俺、星伽さんよりキンジの妻らしくね？

気持ち悪いので言わないが。

「ごめんねキンちゃん。起こしちゃって」

「いや、どおせ起きる時間だしな。それよりそのキンちゃんって呼び方はやめろ」

「あつ……ごつ、ごめんね。でも私……キンちゃんのこと考えてたから、キンちゃんをみたらつい、あつ、私またキンちゃんって……ごつ、ごめんね、ごめんねキンちゃん、あつ」

星伽さんが見る間に顔面蒼白にして口を手に当てあわあわしていた。

うん。やっぱり俺よりもキンジに相應しい相手だわ。

でも、キンジの前だところなっちまうんだよな。さっきまでの一人興奮していた巫女さんはどこへやら。

「それよりもさっさと飯にしようぜ、キンちゃん」

「キンちゃん言うな」

とりあえずここでうだうだやっても遅刻へのロード歩んでしまうだけなのでいい加減夫婦漫才（+いたずらっ子）を切り上げることにする。

「……やけに豪華だな」

「重箱の奴は星伽さんが作ってきてくれたんだ。ご飯も入ってるしな。一応トーストなんかも作ってるぞ」

「和と洋が入り乱れているな……どっちも食うよ。せっかく作ってくれたんしな」

「わーい。キンちゃんやさしい」

「キンちゃん言うな」

キンジとは1年の頃から同じ部屋で過ごしている。

1年の時は強襲科アサルトの寮で、だがキンジは探偵科インクスタに転科してしまい今年は寮を離れるのかなあと思っていたが、ここでニュートラル制度だ。

ニュートラルニュートラルとなってしまうた俺は強襲科の寮を追い出され、次に住む部

屋が一人で使っていたキンジの部屋になったのだ。

その時の会話

「いやぁキンジとまた同じ部屋になれてうれしいなあ」

「お前は俺をいじる道具としかおもってねえじゃねえか」

「もちろん」

この後キンジにぶん殴られたので、今後は過度にいじるのは控えている。

あのキンジが怒るなんてよっぽどきてたんだな。

さすがに反省しました。

まあ、結局はいじるんだが……。

「お前これトーストに塗ってんの豆板醤じゃねえか!!」

「あ。間違えた」

時々、素で間違えてキンジに被害がおよぶけどね。

後輩再び

俺は朝食をとった後二人より一足先に学校へ向かった。

先生にニュートラル制度について詳しく話すことがある、と言われていたため始業式開始前に集合がかけられていた。

「俺の所属科が決まってるじゃない!？」

「すまん。お前が今までに受けた補習を総合して判断した結果、お前が特定の科に所属するのは時期尚早というのが会議で決まってるな」

「じゃあ俺はいつまで無所属ニュートラルなんですか!？」

「制度の内容ではな、もし、期間内に決まらなければ1年間無所属でいてもらうことになるんだ」

なん……だと……

「そんなっ!!じゃあ俺は1年間ずっと補習を受け続けないといけないんですか!？」

「まあ落着け。どの科でも必要最低限の授業を受けてもらう。ノルマを達成すれば好きに授業をつけていいらしいぞ」

「って言われてもな。授業の内容が全部1年とほぼ一緒って。これじゃあ留年してんのと一緒にじゃねえか」

しかも、今は2年だ。これが済めば来年、俺が3年に上がった時に確実に授業についていけなくなるんじゃないだろうか。

そんな時どこかで爆発音が聞こえた。

また、強襲科^{アサルト}の連中がなんかやってんのか？

まあいいや。教室行こ。キンジももう来てるだろうし。

「あつ！！フブキさーん！！」

立ち上がって制服に付いた草なんかを払っていると遠くから聞いたことのある声がした。

誰かはもうわかっている。遠くからあかりちゃんが手を振りながらこちらに走ってきていた。

「おはよう、あかりちゃん」

「フブキさん、おはようございます！！聞いてください！！あたし、アリア先輩の戦妹^{アミカ}になりました！！」

「おお！！よかったじゃねえか！！おめでとぅ」

こうなるんじゃないかとは思っていた。

いいや、あの時はこうなればいいなって願ってただけか。

「あたしもフブキさんみたいに最後まで諦めずにがんばりました！
」

「そっか。お前もこれで立派な武偵に一步前進だな」

ご褒美になにかあげたいところだったが（子供扱い）今持っているものは携帯と財布と銃ぐらいだし。

あげるものがないのでとりあえず撫でておくことにした。

「えらいえらい」

「な、なんですか、フブキさん！？またあたしに嫌がらせですか！
？」

「嫌がらせとは失礼な、今回は素直に褒めているのだよ」

「だったらいいですけど……」

うむうむ。賞賛は素直に受け取っておくものだぞ。

「あのー、あかりちゃん。その人は？」

「あかりの彼氏か？」

あかりちゃんの友人2名登場。

一人は黒髪ロングで、もう一人は金髪ポニー？か。

説明が雑だって？原作見る。どっちも美人だから。

「か、彼氏とかそんなんじゃないよっ！！」

「こんなちっこいのが彼女とは誠に遺憾である」

「どうしてそんなに冷静なんですか！！それからその言葉、なんかヒドイです！！」

「はじめまして。2年の桜野フブキです。あかりちゃんとは一応友達です」

「ああっ！！また、スルー＆プログレス（進行）ですか！？せめてつつこみに対する返答ぐらいはしてくださいよ！！」

「あかりちゃん、昨日よりドン引きするぐらいつつこみうまくなったね……」

「その悟ったような顔やめてくださいよ！！あたしが可哀想な子みたいじゃないですか！！」

「あかりちゃん……可哀想な子……」

「言わないでください！！」

ムキヤッーと怒り出すつつこみ少女。

いい感じで壊れてくれたので今日はこの辺にしておく。

「でっ？そちらの二人は友達？」

金髪の女の子は案の定呆れ顔でこちらのやり取りを見ていた。

が、黒髪の子はなぜかこちらを恨めしそうに見ていた。

あれ？もしかして、そっち系の子？

「……まったく。こつちが火野ライカ。ライカは強襲科アサルト所属なんです」

「チーッス」

なるほど金髪の子がライカちゃんか。

「それでこつちが……」

「佐々木志乃です。インケスタ探偵科所属です」

ふむふむ佐々木さんね。

さつきからめちゃくちゃ睨んでるのはやっぱり……

「よろしく。それじゃ俺は自分の教室に行くことにするよ」

怖いので逃げるでござる。

「あっ！！フブキさん！！これっ！！」

「ん？」

そういつて手渡されたのは小さな紙だった。

「それじゃー！」

「あつー！おいあかりー！それじゃ先輩」

「……失礼します」

走り去って行ったあかりちゃんを追いかける二人。

最後まで佐々木さんは俺のことを睨んでいた。

しかも途中で感情が嫉妬 殺意に変わった時はほんとに怖かったね。

……さつさと教室行こ。

後輩再び（後書き）

A A組の二人が扱いずらかったりします。

あかりちゃんは今もつつこみキャラ確定です。本当にありがとうございました。

ちっこい再び

「先生、あたしはあいつの隣に座りたい」

現在、2年A組はピンクのツインテール女子の発言により一同絶句していた。

クラス分けで決まったクラスはキンジと同じクラスだった。

キンジとは何か縁があるようなので、たぶん同じクラスだろうなあと考えていたため驚きも喜びも少なかった。

教室へ行くとなぜか疲れ切った顔で机に突っ伏していたキンジに声をかけることもできず俺はキンジの後ろの席へ座った。

それからはキンジの隣の席のつんつん頭の身長190cm近い大男、武藤剛氣と会話をしていた。

ちなみに、武藤は車輜^{ロジ}科の優等生で乗り物なら何でも動かせるという特技を持っているらしい。

どうでもいいが。

それから、2年A組最初のHRは担任の「うふふ。じゃあまずは去年の3学期に転入してきたカワイイ女の子に自己紹介してもらいましょうか」という気の抜けたような声で始まった。

担任の前置きの後俺の死角から、だれかが席を立つ音が聞こえた。

こんとき俺はすでに現世と睡眠の狭間をいつたり来たりしており目をほとんど開いていなかった。

そして、冒頭の発言である。

俺は聞いたことのある声により目が覚め、教壇に立った女の子を見る。

そこには、つい昨日出会ったばかりの女の子の姿が。

「アリア……!？」

そう、そこに立っていたのは神崎・H・アリアだったのだ。

同じクラスなのか。気づかなかった。

だが忘れちゃならないのが彼女の発言である。

俺が教壇に立っているアリアに気づくまでの間一同は絶句していたのだ。

そして、みな一斉にキンジの方を向き……

「わーーーーー!!!!!!」

と、歓声をあげた。おまえら仲いいな。

変わらずに驚いているキンジに、俺は素直な疑問を投げかけてみる。

「キンジ、あの子、知り合いか？」

「ああ、まあ、一応な」

なんとも、まあ、歯切れが悪いことで。

再び、キンジに質問しようとしたが、隣にいた武藤が突然立ち上がって、

「よ……良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来みたいだぞ！！先生！！オレ、転入生さんと席代わりますよ！！」

と叫びながら、武藤はまるで打ち上げに成功したNASA局員のよう
にキンジの手をブンブン振りまわしていた。

そして、担任はキンジとアリアの両方を見てとても嬉しそうに武藤の提案をOKしてしまった。

もうなにがなんだかわからない俺とキンジ。

さらにキングジに追い打ちをかける人物が……！！！！

「キング、これ。さっきのベルト」

!!!!!!!!!!!!!!
 !!!!!!!!!!!!!?
 ?????.

「もう、わけがわからないよ」

「ムフフ。理子は分かったよブッキー!! 分かっちゃったよ!!」
 「……これもう、フラグばつきばきに立ってるよ!!」

俺の左隣りに座っていた峰理子が、ガタン、と音を鳴らしながら席を立った。

こいつは峰理子。探偵科一のバカ女だ。インケスタ

その証拠に、制服をスイート・ロリータというヒラヒラなフリルだらけに魔改造しているのだ。

ちなみに、ブッキーっていうのは理子が俺に付けたあだ名だ。

「何か知っているのか、雷電!？」

「キーくん、ベルトしてない!!そして、そのベルトをツインテールさんが持ってた!!つまり、キーくんは彼女の前でベルトを取るような”何らかの行為をした”!!そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた!!つまり二人は……」

「二人は……」

緊張した面持ちで理子の次の言葉を待つ。

「熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ!!」

めちやくちゃうれしそうな顔で言われた。

女の子とか恋ばな好きだからなあ。

それにしてもとうとうキンジにも春が来たのか……って、んなわけないだろ。

キンジにが”あれ”のせいで女の子苦手なのに恋愛するわけねえだろ。

だが、しかし、理子の最後の発言のせいで、教室中のテンションがヒートアップする。

野次を飛ばしだす輩も出ており、その内容は、

「キ、キンジの彼女がこんなにカワイイわけがない!!」「影の薄いやつだと思っていたのに!!」

「女子どころか他人に興味がなさそうなくせに、裏でそんなことを!?!」「フケツ!!」

といったことが。

全部失礼だろ。JK。ていうか、新学期なのにお前ら息ピッタリだな。

訓練されたニコ動視聴者かつ。

親友の俺がおこっちゃうぞ。

「ていうか、最後の「フケツ!!」はおまえだろ」

「あ、バレた?」

すでに疲れた顔をしているキンジだが、律儀にツッコんできてくれるとは、さすが親友。

すぎゅぎゅん。

「れ、恋愛なんて……くっだらない!!」

突如、2発の発砲音。

顔を真つ赤にしたアリアが、2丁のガバメントを抜きざまに撃ったのである。

手を広げた先に、左右の壁に1つずつ穴が開いていた。

「おい、アリア。いったい、どうして……」

「全員覚えておきなさい!!そういうバカなことをいうやつは……」

俺が近づき諭そうとするも、アリアは俺の言葉を無視した。

そして、右手の白銀のガバメントを俺に向けながら、叫んだ。

「風穴あけるわよ!!」

一緒に昼でも

side キンジ

昼休みになると同時に質問攻めの憂き目にあった俺は、なんとかク
ラスのアホどもをまいて理科棟の屋上へと避難した。

だいたい、アリアのことを聞かれても、俺は何も答えられないんだ。
それに、俺よりもフブキの方が知ってそうな雰囲気だったから、あ
いつに聞けばいいのに。

関係ないが、あいつ授業中俺にぎりぎり聞こえるぐらいの音量でい
びきをかいてやがった。

俺がこんな大変な時に呑気なやつだ。

溜息混じりにしょぼくれていると……屋上に、何人かの女子がしゃ
べりながらやってきた。

声に聞き覚えがある。あれはうちのクラスの女子だな。

ややこしいことにならんうちに、こそつ、と物陰に隠れた。

「さつき教務科から出てた周知メールさ、2年の男子が自転車を爆
破されたってやつ。あれ、キンジじゃない？」

「あ。あたしもそう思った。始業式に出てなかったもんね」

「うわ。今日のキンジってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリ

ア？」

金網の脇に座つ3人のた女子たちは、俺のことを話題にしているようだった。

実に不本意なことだが、飛び出してその話題をやめろと言うわけにもいかなないので、静かに身を潜める。

「なんか、朝からキンジのこと探って回ってるみたいだよ」

「あ。あたしもアリアにいきなり聞かれたあ。キンジってどんな武偵なのとか、実績とか。『昔は強襲科アサルトですごくたっただけどねえ』って、適当に答えといたけど」

「アリア、さっきは教務科の前にいたよ。きっとキンジの資料漁ってるんだよ」

「うっわー。ガチでラブなんだ」

朝から俺を……？チャリジャックの後からずっとストーキングされてたのか。

「キンジカワイソー。女嫌いなのに、よりによってアリアだもんねえ」

「アリアって、ヨーロッパ育ちかなにかしらないけど、空気読めないよね」

「でもでも、アリアって、男子の間では人気あるみたいだよ」

「あーそうそう。転入してきて、すぐファンクラブができたんだって。写真部が盗撮した写真とか、結構高レートで取引されてるらしいよ」

「それ知ってる。特に体育の写真とか万単位の値段だったさ」

だめだこの学校。早く何とかしないと。

「ていうかあの子さ、トモダチいないよねー。しょっちゅう休んでるし」

「お昼も一人で食べてなかった？隅っこの方で」

「そういえば、フブキくんが話しかけてなかった？」

「あー。あのフブキくんなら話しかけてそうだね」

「フブキくん変な人だもんね。おもしろいけど」

なにげにあいつは女子の間で少し人気だったりする。

誰にでも優しいし、よく喋る、おもしろいやつだからな。

それよりも、アリアに話しかけてたって？なにやってんだ、アイツは。

s i d e o u t

はい。やっと俺の出番だぜ!!

といつても、もうあんまりスペースないけどな。

昼休みまでずっと昼寝で過ごした俺。

購買で適当に買って教室に戻ると教室の隅で一人で飯を食ってるアリアの姿が。

キンジも武藤もないみたいで、他に親しい人間もいないのでアリアに話しかけることにした。

「よおつ。昨日ぶりだな」

「……なに？」

めっちゃ不機嫌そうなんですけどー。

昨日のファミレスにいる時ぐらい不機嫌なんだけど。

「いや、一緒に飯でもどうかと思ってさ」

「いいわよ、別に。あっちいつてなさいよ」

「キンジ見なかったか？ちゃんと飯、食ってんのかなあ？」

アリアの前の席に座る。

アリアがなんか言ってるような気がするが聞こえない。

「人の話を聞きなさいよ」

「俺の耳は聞きたくないことは聞こえないよう都合よくできてんだ」

「はあ？なによそれ」

パンを袋から取り出す。今日のパンは「たっぷり豆板醤パンー！」辛さが売りのパンらしい。

「キンジとはどこで知り合ったんだ？」

「今日の朝よ。あいつがチャリジャックにあつてたから、助けたのよ」

否定しなくなったってことはここにいていいんだな。まあ、諦めたんだろうけど。

それから、俺はアリアから、今朝あったチャリジャック事件のことを聞いた。

セグウェイやら、UZIやら、それから……体育倉庫のことまで。

「ぶっ！！あっはっはっはー！！」

さすがに噴いたわ。キンジこんなちっこいのに興奮してヒスったのかー！！

まったく、キンジは最高だぜ！！

「な、何がおかしいのよ！！」

「いや、わるい、わるい。でも、そうか。突然アリアをお姫様とか言い出したのか……くっ！！」

だ、だめだ、まだ笑うな。

「あんた、いい性格してるわね」

「あはは。楽しいことがあればすぐそっちの方に行っちゃうんだ。自分でも異常だと思うくらいにな」

その後も、アリアと楽しく(?) 食事をして昼休みの時間を潰したのであった。

女の嫉妬？ vs 佐々木志乃・A

昼休みが終わる時間に近づいてきたため、急いで強襲科アサルトの訓練棟へと向かう俺。

ニュートラル制度のおかげで複数の教科を受けないといけなくなるため、今年は忙しくなる事が決定済み。

春休み前に契約書にサインをしてしまったため、今更、イヤだなんていえない。

もうこうなったら、この状況を逆にチャンスだと考えることにする。

複数の教科を受けるということは、それだけ多くの知識を仕入れることができるのだ。

武偵は、出来ることが多いに越したことはない。

出来ることが多ければ、それだけ俺を雇ってくれるところも多いだろうし。

まあ、俺がちゃんと学べればだけど。

あーだこーだ考えながら歩いていると、気がつけば、探偵科棟インクスタの前にいた。

ここも一応、転科先候補の一つ何だよな。

でもやっぱ、一番は強襲科かな。

能力不適正って判断されないように、さっさと行って自主練でもしてよ。

そう思い、歩き出そうとしたら、探偵科棟の中から人が出てきた。

知らない奴なら無視するところだが、出てきたのは今日知ったばかりの顔だった。

「確か、佐々木さん。だったかな？」

最近お気に入りの後輩、ツッコミちゃんのご友人だった。

「先輩、今お時間大丈夫でしょうか」

「うん。10分ぐらいならオッケーだよ」

「ありがとうございます。すぐにおわりますから」

いったい、何のようだろうか？

そう思っていると、突然佐々木さんの隣に刀を持ちメイド服に身を包んだ女性が現れた。

どっから湧いて出てきたの！？

唖然としてみると、佐々木さんはそのメイドさんから刀を受け取り、鞘から抜き始めた。

「すぐに終わりますから」

鞘から完全に抜け出た刀身がキラリと光る。

その刀が上に振り上げられて、そして……

そのまま、振り下ろされてきた!!

「……って、ちょっと!?!」

後ろにステップして回避をする。

ギリギリ、刀の切っ先が鼻に掠めそうになる。

まさに間一髪。

掠めるだけでもやべえだろ。

「あつぶねえ。オイ、すぐに終わるって、情けもかけずに殺すことかよー!!」

「アナタはあかりちゃんと親しくしすぎた」

「だからって、殺そうとすんなよ!! 武偵が人を殺すと、より罪が重いんだぞー!!」

「殺しはしませんよ。暗い地下牢獄で一生を過ごしてもらっただけですから」

「余計、質^{たち}が悪いわ!?!……そうカンタンに、後輩にやられてたまるかよ」

「知ってますよ。ニュートラルのことは」

ドキッ。

まで、焦るな。ここは平常心を保て。

「そ、そそそそれがどうおおおしした？」

「アナタは、少なくとも2年の先輩方の中じゃ最も成績の悪い方です。そんな方に私が負けるわけがありません」

言ってくれるねえ。

俺は右手でガバメントを、左手でファイティングナイフを構える。

「だったら、かかってこいよ、お嬢様。その自身、俺が叩き割ってやるよ!!」

俺の言葉を聞き終わる前に、佐々木さんは突っ込んで来た。

接近戦じゃ確実に分が悪いので、右手のガハで数発撃ち、牽制する。

「あなたの命中率がとても低いことは知っています!! 那么简单に当たるわけ……!!?」

銃弾が一発、佐々木さんの方へ飛ぶ。

が、それは刀で弾かれる。

「どうして……」

接近を止め、こちらの行動を伺う、佐々木さん。

焦ってるな。まさか、命中率0%の人間の撃った弾が、自分に向かつて飛んで来たんだ。

俺のことを少し調べてみたらしいけど、多分、今はその情報が正しかったのか判断しているところか。

まあ、正しいんだけどね。

カンタンな話、狙って当たらないんなら、狙わなかったらいいんじゃない？っていう理論を作り上げた俺。

適当なところを撃ち、運が良ければ飛んで行くかなあ、っていう自分の強運頼みの作戦。

うまく行って、いや、運が良くてよかったよ。

さあ、反撃開始だぜ！！

女の嫉妬？ vs 佐々木志乃・B

ファイトイングナイフを左手で持ち、佐々木さんに接近戦を仕掛ける。

慎重になっている敵に大胆な行動を見せれば、よけい身動きが取れなくなってしまう。

刀とナイフじゃリーチの差はでかいが、懐に入り込めば断然ナイフが有利だ。

もらった！！

「！？」

ナイフを横に薙いたが、バックステップでかわされる。

惜しかったなあ。

「先ほどの射撃はまぐれですか？」

はい、その通りです。

言わないけどな。

「……なんで、俺なんか狙うんだ？」

「どこかの馬の骨かも分からないような奴が、私のあかりちゃんを奪おうとしました。そんないけないコトをする人には罰を与えない

といけませんよね」

こええ！！

めっちゃ目が据^すわってるよ！！

「今降参すれば地下牢行きは無しにしてあげますよ」

「よくわからんが、許してくれんのか？」

「そのかわり、今後一切あかりちゃんには近づかないでください」

言い終わるや、彼女は刀を鞘に納め始めた。

もう、やるべきことが終わったと言わんばかりに。

「……それはムリだよ」

「どうしてですか？」

「人が人を縛り付けることはできないよ」

「別に縛り付けているわけじゃありません！！」

「君はいつたい、あかりちゃんの何なんだ？」

「大切な友達です！！」

「大切な友達を、自分の所有物のように扱っていいのかよ！！」

「なっ！？私はそんなこと……」

「してるさ！！あの子のコトが大好きなのは分かるけど、接し方を間違えると、自分の側からいなくなっちゃうよ」

俺みたいにな。

「……う」

「う？」

「うえええええん！！あかりちゃんに嫌われちゃうよおおー！！！」

はあ！？

突然、佐々木さんがその場に座り込んで泣き始めてしまった。

何故泣く！？

「お、落ち着け！！別にまだ嫌われたわけじゃないだろうが！！！」

「そうですね」

ケロツと、すぐに泣き止んだ。

なんだよ、嘘泣きか？

「と、とりあえず移動しないか？」

とりあえず、近くにあったベンチに移動。

佐々木さんを先に座らせ、自分も隣に座ると佐々木さんが少し俺から離れた。

嫌われてるなあ。

そういえば、さっきのメイドさんどこに行ったんだろう？

「私とあかりちゃんが出会ったのは、半年前でした」

えっ！？いきなり語り出されても困るんですけど。

まあ、黙って聞いておくけど。

「近くの公園で、美味しいリーフパイが売られていました」

ああ、あの店か。

「買い食いは、はしたないと思っていたんですが、リーフパイからとてもいい香りがして、思わず足を止めてしまいました」

その香りを思い出したのか、微笑んでいる佐々木さん。

その顔はとても可愛かった。「そしたら、店員さんが私をお客さんと勘違いをしまして、しょうがないから買おうと思ったんですが、私カードしか持っていないくて、さらに、困ったことになってし

まいました」

さっきのメイドさんといい、今のカード発言といい、この子実はお金持ちの娘か？

「私が困っていると、後ろから大きな、可愛らしい声が聞こえてきました。『間に合った！リーフパイください！』って」

昔っから、アホ丸出しだったんだな。

あのちびっ子は。

「でも、私で最後のリーフパイだったみたいで、買えないと分かった時、あかりちゃん、すごく悲しそうな顔をして、私は現金を持つていなくて買えないから譲ってあげたんです。そしたら、あかりちゃん、私の手を取ってありがとうって言ってくれたんです」

このはなし、いつまで続くんだ？

「あの時のあかりちゃん、とても可愛かったなあ」

ほづけた顔で宙へ視線を飛ばす佐々木さん。

本当に大丈夫か？コイツ。

「おい、戻ってこーい」

「リーフパイを買った後は、今みたいにベンチに座っておはなしをしました。あかりちゃん、1葉しかないリーフパイを半分わけくれたんです」

.....。

「それから……もう…友達って言うてくれたんです。初対面の私に」

ここでハンカチでも持っていたら、俺の株が急上昇したのにな。

「キミにとって、あかりちゃんはとても大切な友達なんだね」

「はい。私の初めてできた大好きな友達です」

だけど、困ったなあ。

この子の気持ちは尊重させてあげたいけれど、でも、頼まれたからあかりちゃんにあわないってのはやっぱり、違う気がする。

「……だったら、俺もキミの友達にしてくれないか？」

「えっ？」

「俺にとっても、あかりちゃんは大切な……後輩だから、失いたくはない。それに、友達の友達は友達っていうだろ？」

佐々木さんは少し考えた後、黙って頷いてくれた。

女の嫉妬？ V S 佐々木志乃・B（後書き）

わかりにくい文章で本当にすみません。

マイホームに使徒(?)襲来

放課後

外はすっかり暗くなっていた。

午後の訓練で強襲科ではニュートラル専用地獄の特訓が用意されており、遅くまでビシバシ鍛えさせられた。

誠に遺憾である。

くたくたで、体が悲鳴をあげながらも、なんとか男子寮までたどり着いた。

長い1日だった……。

朝にアリアが現れて一波乱起き、午後は後輩に殺されかけるというシユールな状況に合うという。

これも俺が主人公だからか。

主人公は大変だぜ!!

……。

なんて、「冗談言ってねえとやってられねえよ。

これも、全部作者のせいだ。

1日が終わるまで8話もかかるって、小説の才能ねえんじゃないの？

なんて、よくわからないコトを考えながら歩いていると、男子寮から星伽さんほしあきが出てきた。

驚いたことに、星伽さんは巫女さんの格好をしていた。

1日でマニアックな衣装を2度も見られるのなら、8話と言わず10話でも20話でも続けてもいいかもしれない。

……また、よくわからないことを考えてるな。

疲れてるようだ。

「星伽さん」

「あつ、桜野くん。こんばんは」

俺みたいな人間にも、きちんと挨拶してくれるなんて、喜ばしいことだ。

「どうしたの、その格好？」

「キンちゃんに、お夕飯作ってあげようと思ったんだけど、授業が遅くなっちゃって、だから、着替えないで来ちゃったの」

ほー。

キンジよ。ここまで献身的な女の子は、そうはいないぞ。

ここまでしてくれるのは、キンジの場合、『幼なじみだから』の一言ですましそうだが。

「そっかそっか。星伽さんはいいお嫁さんになれるよー」

「え！？そ、そうかな……？」

えへへ、と星伽さんが照れ笑いをしていた。

その笑みを見て、俺はふと、1人の女の子の顔を思い出してしまった。

……。

「い、今から帰るんでしょ？送っていいこうか？」

「ううん、大丈夫だよ。このあたりじゃ怖い人は出ないだろうし」

それもそうか。

このあたりじゃ、銃を持った人間がごまんといえるんだ。

たとえ強盗でも近寄りたくはないよな。

それから、星伽さんが明日から恐山へ行くためしばらく会えないらしい。

その後、星伽さんと別れ、さっさと部屋へと帰宅した。

「あら、お帰り」

「どうしてこういうコトになってるんだ」

部屋へ帰ると、何故かちっこいがいた。

「何しに来たんだ？」

「キンジをあたしのドレイにしに来たのよ」

そんな満面の笑みでドレイなんて言葉を聞いてもなあ。

「……あー、納得した」

「納得したのかよ」

すかさず、キンジのツッコミ。

最近テンポいいーよー。

「よくねえよ。コイツが何しに来たのか分かってんのか？」

「ああ。あつたりまえじゃん！ー！」

ビシッと、親指を立てる。

「じゃあ言ってみろよ」

「あれだろ。……同棲」

すまん。もっと他にあったらどうなんて言われてそうだが、他に思いつかなかった。

アリアがネグリジェ姿でいたから、泊まる気まんまんってコトはわかった。

後は、アリアとキンジがなにかしら噂が立ってたみたいだから。

それらの事柄をヒントに推理したわけだ。

あれ？よく考えたら、俺ってすごくない？

こりゃあ、探偵科でSランク武偵になる日も近いかもしれないなあ
インクスタ
！！

「ど、どどどと同棲い！？どう考えたらそういつ思考にたどり着くのよー！！」

「いやー、俺の頭も捨てたもんじゃないなあ」

「今すぐ捨てなさい！！頭に風穴開けてあげるから、その穴から脳みそ取り出さないよー！！」

「まあまあ、落ち着いて。冗談だから。お茶飲む？」

「もう、寝るー！！」

そう言って、さつさと寝室に入ってしまった。

なんで怒ってたんだ？

「……飯食ったか？」

「いんや、まだ。もう、お腹ぺっこぺこ」

「コンビニの弁当と白雪の作った晩飯あるぞ」

「頂戴いたします」

今日はさつさと食って寝ようかな。

愉快なトリオ

そういえば、あかりちゃんになにか小さな紙を買っていたな。

朝から色々ありすぎて忘れてたよ。

どれどれ。

『激ウマ!! ラーメン・来来軒割引クーポン』

また、ラーメンかよ!!

翌日

「バカキンジ!! エロフブキ!! 早く起きる!!」

ドンッ!!

顔面にフライパンを喰らった。

「誰がエロだ!!」

「いっつつ、つつこむとこそこかよ」

「朝ごはん!! 出さないよ!!」

「よくも俺の顔面をフライパンで叩いてくれたな!!」

「それ、つつこむのおせーよ!!」

「そんなことより朝ごはん!!」

「えー、晩ごはんじゃだめー?」

「なんでよ!?!」

「落ち着けアリア。そんな返しじゃダメだ」

「ツツコミの指示はいらないわよ!!今欲しいのは食事よ!!」

「Ok。1500秒で準備を終わらせる」

「おい、それじゃあ俺達の出席が終わっちゃうぞ」

「あんたはなんでそんな冷静に冗談言ってるのよ!!」

「キンジ、ネクタイ取ってくれ」

「おら」

「ムダに連携とれてるわね。あんたら、いつも朝はこんな感じなの?」

「まあな。アリアもそのうち慣れるよ」

「慣れたくないわよ!！」

そうなのだ。毎朝、俺とキンジは慌ただしく冗談を言い合いながら、身支度を終える。

いつも慌ただしいのは、時間ギリギリまで寝ているからだ。

早く起きればいいというつつこみは無しの方向で。

朝食を取った後、支度を終え、玄関まで来た3人。

が、ここでも一悶着あったりする。

「アリア。登校時間をずらすぞ。お前、先に出ろ」

さあ、出ようとなったときにキンジが何かに気づいたような素振りをして、そんなことを言い出した。

「なんで」

「ただでさえ、俺とお前は変な噂が立ってんだ。この寮から並んで出るところを見られたら、面倒なことになる」

「別に俺がいるんだしいんじゃないね?」

「お前は絶対どつかでいなくなって、俺達を2人つきりにしようとするだろ」

もう、流石さすがとしか言いようがなかった。

「もしかして、あんたあたしから逃げるつもりね!!」

「逃げるって……。隣の席なんだから、逃げようがないだろ」

そう、言い終わった時、キンジは悲しそうな顔をしていた。

自分の不幸を呪ってるんだな。

ちなみに、アリアの方は、むううううう、とむくれていた。

「あはは、風船アリアだ。でも、膨らんでいるのは頬だけかあ?」

「なんですって!?!」

頬をつつきながら、少しイジワルしてみた。

アリアがめちゃくちゃ怒ったので、靴を履いて逃げるように部屋を出た。

「待ちなさいよ!! エロフブキ!! 絶対、風穴空けてやるんだから!!」

女の子にあんなこと言うのは、失礼過ぎたか。

しょうがない、フォローしとくか。

「大丈夫だよ。アリア」

「何がよっ!!」

「今のアリアは膨らんでなんかいないよ。もちろん、これからもね」

「へっ?」

顔を真っ赤にして追いかけて来ていたが、顔は真っ赤のまま今度はその場で立ちどまってしまった。

うまく、フォロー出来たみたいだ。

良かった良かった。

「バス来るから、早く行くよ」

「え、ええ」

あたしだけが知るあの人

いつも乗る、7時58分発のバスを待っている。

待っている間、アリアはずーっと黙ったままだったので、なんとなく俺も黙っていた。

バスに乗って、キンジと合流。

合流してすぐ、キンジが小声で「サンキュな」と言ってきたので、同じく小声で「さて、何のことかな？」と返しておいた。

学校では、昼休みまではほとんど寝ているので、あっという間に午後の授業に移行した。

強襲科^{アサルト}特別棟に到着。

今日は5時間目はニュートラル用の訓練ではなく、強襲科^{アサルト}の通常訓練だった。

強襲科でのトレーニングは、最低限のノルマをこなした後は自由になっている。

自分で考えてしっかり行動せよ、ってことなんだろうな。

しかし、俺はニュートラルだ。

一般生徒よりもノルマがキツイのだ。

その内容は……。

「だーっ！！重過ぎだろ！！なんで20キロもあるベスト着て、走らにゃなんのだ！！」

「うるさいですよ、先輩。黙って走ってください」

20キロもあるベストを着て、ルームランナーで走れだなんて……。

オマケに隣で走ってる、ちびっ子後輩はさっきから機嫌が悪いし。

俺が何したってんだ。

フーッ、アチチ。

なんとかノルマ達成！！

ベンチに座り汗を拭いていると、隣にあかりちゃんが座った。

「先輩、どうぞ」

そう言って差し出してきたのはスポーツドリンク。

機嫌直ったのかな？と、思い顔を見るも、さつきと変わらず仏頂面。

……なんとか会話をしなきゃ。

「そういえば、昨日貰ったあれ。どいう嫌がらせだ」

「えっ？フブキさん、あれ見てくれたんですか？」

「うん。ラーメン屋のクーポンだなんてヒドいよ。オレ、ラーメン
キライなのに」

「もちろん、ただの嫌がらせですよ……。それだけですか？」

それだけ？

他に何かあるって言うんだ？

あ、すみません、ありましたわ。

「クーポンの裏に書いてあったアドレスって、もしかして、あかり
ちゃんの携帯のメアド？」

a k a r i ならうって、メアドが書いてあった。

「そうですけど、気づいてたんですか！？」

「うん。家に帰ってから気づいたんだ。でも、色々あって疲れて寝
ちゃったんだ。メール出来なくてゴメンね」

「だったら、後で必ずメールください!!」

「う、うん。するする」

すごい剣幕で言われちゃ、断れませんよ。

それ抜きにしても、別に断わったりしないけど。

「……やった」

あかりちゃんが、聞こえるか聞こえないかの声でつぶやいた。

はい、また出ましたー、つぶやき。

あれほど、つぶやきはツイッターでしろと、何度も何度も（ry

「何が、やった、なの？」

「い、いえ!!何でもないです!!何でも」

もしかすると、クラスの友達とかと、何か賭けでもやってるんじゃないだろうか？

例えば、男の先輩からメール貰えれば1万円、みたいな。

「何か顔についてますか？」

こんなアホな子がそんなコトするわけないか。

てか、出来ない。

ついにきました、6時間目。

地獄のトレーニングのお時間です。

実況は私、^{わたくし}強襲科2年Dランク武偵、スズキと、

解説、同じくDランク武偵ヤマダがお送り致します。

さて、今回のトレーニング内容は先生と1時間耐久組み手です。

昨日、^{さくじつ}フブキ選手は10キロのベストを着たまま、なんと、2時間ぶっ続けで取り組んでおります。

さあ、解説のヤマダさん。昨日のフブキ選手はどうでしたか？

いやあ、もうヒドイの一言につきますな。

まず、構えから悪かったですからねえ。

あれじゃあ、勝てる相手も勝てませんよ。

そうですね。今日は、昨日の教訓を生かしていいトレーニングをしてほしい所ですね。

さあ、両者お互いに配置に付きました。

まもなく、^{トレーニング}死合、開始です。

「逃げずによく来たなあ、桜野」

「どんなノリで、トレーニングしなくちゃいけないんだよ！ーそれから、その放送席！ー色々ツツコミたい所があるが、もう、いや！ー後でぶつ殺すかな！ー」

カンッ！ー

両者名乗りを上げたところで試合開始です。

「だあー、ちくしょう！ーもう、ヤケクソだあー！ーって、ぐはっ！ー」

決まった！ー！ー見事な一本背負いだあー！ー！

「……もう、死ぬ」

「ふええ、痛そう……」

現在、あたし、間宮あかりは1階のホールで、友人の火野ライカに

近接戦技（CQC）を習っていた。

しかし、ホールの中心が騒がしかったのでそっちの方へ目をやると、ヘンテコ先輩が先生と近接戦闘を行っていた。

だが、それは、あきらかに一方的なものだった。

先輩が何度も突っ込んで、返り討ちにあっているのだ。

端から見ると、無謀としか思えない、行動。

学習能力なんてない人間の悪あがきのようだった。

「ああ、あの先輩、昨日も2時間ずっとやられっぱなしだったんだよな」

「2時間も!？」

「知らねえのか？そっか、あかりは昨日は射撃訓練してたのか」

「うん」

「すごかったぜ。あの先輩、文句いいながらも、休みなしで訓練してんだからな。それ見て、周りはもう、大盛り上がりだもんな」

「もしかして、ずっと、ああやって突っ込んでる？」

「ああ。もうちょっと別の方法だってあるだろうにな」

違う。

先輩はただ、無闇やたらに突っ込んでるんじゃないと思う。

なんとなくだけど、あたしは、そう思った。

隠し味にはあのお菓子（前書き）

一部編集しました。

隠し味にはあのお菓子

もの凄い疲労を感じながら、帰宅。

もう人生終わってもいいぐらいの気分だ。

ああ、このまま天国のじいちゃんの所へ行つて、のんびり暮らしたいなあ。

「そうだ、死のう」

「なにバカ言つてんのよ」

また、フライパンでガツンとやられた。

「いてて。アホになったらどうすんだよ」

「大丈夫。あんたは十分アホだから」

たぶん、これ見てる全員がその言葉を予想できたと思う。

ちなみに、オレは予想出来なくてショックを受けていた。

「なん……だと……」

「バカやってないで晩ごはん作りなさいよね」

「じゃあ手伝つてくれよ。暇だろ」

「うつ。あ、あたしは忙しいの。Sランク武偵だからね。だから頼んだわよ」

コイツ、さては。

「もしかして、料理ニガテなのか」

リビングから、そそくさと出ていこうとするアリアに、そう言つと突然アリアはビクリと跳ね上がった。

「そ、そそそそそ……」

「そうなんだ」

「……そそ、そうなのよ!!じゃなくて、違うわ!!」

どっちなんだ。

「あ、あたしにできないコトなんてないの。常に万能なのよ、あたし」

うつそくせえー！。

見るからに家事ダメそうじゃないか。

「じゃあ、今日はアリアがメインで作って貰おうかなあー」

「うめんなさい」

速攻で頭を下げられた!!

そんなにプレッシャーに耐えられないなんて、よぼつど作るのヘタなんだな。

「謝るんならウソなんてつくなよ……。オレが時々教えてやるよ。だから、手伝ってくれ」

「べ、別に教えてくれなくてもいいわよ。……料理なんてうちの使用人に作ってもらうし」

使用人？

よく、わからんが、

「覚えておいて損はないと思うぞ。これから先、俺が毎日、晩飯作ってやれるかわからないし、毎晩ももまんばつか食うつもりか？」

「うつ！！そ、それは……」

ここだ！！この隙につけこみ、奴をこっちの世界（料理）に引きずりこんでやる！！

「イメージしろ！！毎晩もまん。栄養が偏りすぎて、毎日毎日、ちよつとずつ太っていき、そしていずれは……」

「い、いやあああー！！！！！！！！」

ここまで来ればこっちのもんだ。

「それがいやなら少しでも料理を覚えるコトだな」

「ハイ先生!!」

ミッションコンプリート。

アリアを無事、こつちの世界（料理）へと引きずりこむことに成功。それと同時に、別の世界へと引きずりこんでしまった気がするが、気にしないでおこう。

「キンジ、飯ができたぞ」

「おう」

部屋に籠もって、何やらコソコソやってるキンジに、「ごはんができたコトを伝える。」

「……アリアのこと、探^{さぐ}ってんのか？」

「ああ。理子に調べてくれるよう、頼んだんだ。一応、俺も調べたりしてみたんだが、サッパリだ」

「オレもアリアに探り入れてみようか？」

「……いや、今はいい。明日、理子の報告を聞いてから考えてみる」

「そっか。さっさと飯食っちまおうぜ。冷めたら味が落ちる」

「ああ、今行く」

キンジを伴いリビングに入ると、アリアは既にテーブルに着いていたが、まだ食べてはいなかった。

待っていてくれたようだ。

「「いただきます」」

3人で晩ごはんを食べるコトは結構あるが、この面子で食うのは初めてだな。

いつもは星伽ほしあきさんがごはんを（キンジに）作ってきてくれるからな。

「この味噌汁、いつもと味が違うな」

「おっ！！気づいたかキンジ」

右を横目でチラリと見ると、少し顔を赤くしながら味噌汁をすすっているちみっこの姿が。

かわいい。

「ああ。何入れたんだ？ヘンな味すんぞ」

「天国で自分の言葉に悔いてなさい！！」

「落ち着け、アリア！！」

キンジの言葉に即座に反応し、ガバツと、ガバメントを引き抜くリア。

すいません、ダジャレ言ってる場合じゃないですね。

「うおっ！！なんだよ、急に！！」

「そ、その味噌汁、アリアが初めて作ったんだ！！アリア、だれだって最初はうまく作れねえよ！！お世辞言われるより、正直な意見言ってもらって良かったじゃないか！！それを、次の糧^{かて}としてだな……」

「……………」

静かに2丁のガバメントを収めてくれた。

それからイスに腰をおろしてくれた。

「次は……………」

「「？」」

「見てなさいよ！！次はうーんと、美味しいのを作って、あんたの度肝に風穴空けてやるんだから！！」

ビシッ！！と、キンジに人差し指を突き出した。

良かった。落胆したんじゃないか心配だったが、杞憂だったようだ。

最後の言葉はよくわかんないけど。

「フブキ、携帯なってるぞ」

「あらほらさっさと」

現在、皿を洗ってる最中。

タオルで手を拭き、携帯を見ると、電話だった。

「ハイハイ、もしもし」

電話に出ながらリビングを出て、自室に入った。

一応、聞かれない電話だったので。

「先輩ですか？志乃です」

電話の相手は後輩ちびっ子に絶賛、片思い中の佐々木志乃だ。

「ああ、志乃か。そっちはどうだ？大丈夫か？」

画面に相手の名前出てるから知ってたが、つつこまないことにする。

「ハイ。今の所問題ありません」

「そつか。よきかなよきかな」

「それにしても、よく気づきましたね。『スリーデイズキャンセル
三日内解除規則』だなんて」

「いんやあ、オレもたまたま聞いたただだよ」

三日内解除規則。

通称、スリーデイズキャンセルとは、戦姉妹契約から72時間以内に戦妹が私闘で負けたら、契約が解消となる規則のことだ。

もちろん、契約が解消されたら、再契約は無い。

もし、あのちびっ子が狙われたらたぶん、いや、絶対勝ち目はないだろう。

ちなみに、オレが何故、スリーデイズキャンセルに気づいたかと言うと、ホントにたまたま、知らない1年生が話していたのだ。

その会話の内容は、アリアとあかりちゃんの戦姉妹契約のことで、その中でスリーデイズキャンセルが出てきたのだ。

「アリアと戦姉妹になりたい人間は大勢いる。そいつらがあかりちゃんをねらう可能性がないわけじゃないからね」

「用心するコトに越したことはないですからね」

「気にし過ぎかもしれないけどね」

「いえ、そんなことはないですよ。それにあなたには感謝していますよ」

「なんで？」

「だって、それを口実にあかりちゃんの側にいられるんですから！」

お巡りさん！！

「あかりちゃんを家に泊めてあげる日が、こんなにも早く来るなんて！！カメラ用意しておいて良かったー」

一番彼女がキケンかもしれない。

「えーっと、今は何してるの？」

「あかりちゃんは今お風呂に入ってます。一緒に入りたかったんですが、先輩に連絡するチャンスは今しかなかったので」

「それは悪いことしましたね！！……お、お風呂か」

「今、先輩変なこと考えませんでしたあ？」

コワイ！！

電話越しに伝わってくるのが、声じゃなくどす黒いオーラに変わった！！

「と、とにかく後は頼んだよ。もうすぐ時間だしね」

「ハイ！！寝顔までバツチり撮っておきます！！」

もう、彼女にボディガードやらせるコトをキャンセルしたい……。

契約

「……リアは『H』家の人と……」

女子寮前の温室

朝に教室で理子に放課後に来るように、呼び出されたため行ってみると、理子が誰かと話していた。

物陰からこっそり覗くと、そこにいたのはキンジだった。

そういえば昨日、アリアのことを調べてもらおうよう理子に頼んだって言ってたな。

しょうがない、どっかに隠れておこ。

一応、一人で来いって指示だったからね。

キンジが何故か慌てて、温室をそそくさと出ていったのは、オレが隠れてから数分もしなかった。

出ていくのを確認すると、オレもその場から出て、理子に会うことにする。

「おい、りこおー!!」

「ブッキー!!」

両手を掲げてブンブンと振っていたので、こちらも片手だけ振り返す。

峰 理子

アリアと同じくらいの身長だが誰もが認める美少女だ。

ふたえの目はキラキラと大きく、緩いウェーブのかかった髪はツィサイドアップ。

ふんわり背中に垂らした長い髪に加えて、ツインテールを増設した欲張りな髪型だ。

b y 原作キンジ

「キンジと何話してたんだ？」

「ありやりや？聞こえなかった？アリアのことだよ」

やっぱり、オレがいること気づいてたか。

「アリアのコト、ねえ。キンジに他言無用でって言われなかったのか？」

「ブッキーなら大丈夫でしょ！！それよりブッキー、ゲームたあくさん手に入ったから、おすそ分けしてあげる！！」

それ、キンジが買ってきた奴じゃん。

まあ、オレはどっちでもいいけど。

「で？何か頼みたいんだろ？」

「ん？いえいえ、ギャルゲー仲間のブッキー氏には、ただ、一緒にゲームを攻略して欲しいだけですよ」

何を隠そう、オレと理子はギャルゲー仲間なのだ！！

少し前に、理子に勧められて始めたものだが、不覚にもハマってしまったのだ！！

「あ、これもあげる。理子知らないもん」

そう言っ手渡されたのは『妹^{マイ}ゴス』と呼ばれるギャルゲーの続編、2と3だった。

「んー、オレも知らないなあ。続編ってあんま面白いのってないし。無印の世界観が傷つけられる気がするし」

と、オレが持つギャルゲーへのポリシーみたいなものを語ると、理子が目をキラキラさせてこちらを見ていた。

「だよねだよね！！やっぱり、2とか3って個々の作品に対する侮辱だと理子も思います」

「うん。そうだそうだ」

なんて、互いにギャルゲーに対する情熱を語り合っていると、いつの間にか外が暗くなってきた。

「じゃあ、オレそろ帰るわ。キンジ達に飯作ってやんないと」

「ふーん、キンジ“達”ってことはやっぱアリアってキンジの部屋に泊まってるんだ」

しまったあああ！！

しょうもないミスしてもうた！！

「……他言無用でたのむ」（必死で冷静を取り繕いながら

「あはは、いいよ。その代わりに、理子の頼み聞いてくれる？」

「む、しょうがない。なんだ？」

「確認するけど、アリアとキンジって、付き合ってはいないんでしょ」

「ああ、そうだ」

「だったら、ブッキーの力で二人をくっつけてよ！！」

「まじかよ」

この提案はなんとも……

オモシロそうだ！！

「わかった。やってよう」

「やったー！！じゃあ、お願い！！」

「オッケー。その前に一つ聞きたいことがあるんだが……」

二人をくつつける、かぁ。

ノリであんなコト言っちゃったけど、改めて考えると気が進まないなあ。

でも、協力するって言っちゃったしやるしかないか……。

「ま、なるようになれ、だ！！」

と、勢い込んで扉を開けると、

「なんでもしてあげるから！！教えて……教えなさいよ、キンジ！！」

あ、ムリだ。

だって、いっつもケンカしてんだもん。

超仲悪いじゃん。

この状況からどうすればいいんだよ。

リビングに入ると、部屋は薄暗く、その部屋の中央で二つの影が並んで見えた。

電気を付けると、二人が急接近していた。

「……………なにしてんの？」

「よ、よお、フブキ」

片方は何故か安堵した顔をしている。

「あつ、フブキ……あんたもしかして知ってんじゃないの!？」

「な、何をだよ」

もう片方は鬼の形相でこちらに詰め寄ってきた。

「キンジの本当の実力よ!!入学試験ではSランクだった!!その時の実力は何か条件が必要なもの!!それを教えなさい!!」

「ッテイワレテモナア。オレモヨクシラナイシナア」

はい。もちろん知ってます。

「ウソを付くな!!」

ついに胸ぐらを掴まれ、前後に揺さぶりだした!!

「あばばばば」

「やめろ、アリア！！もう、わかったから！！」

「わかった！？なにをよ！？」

「1回だけお前と組んでやる」

「！？」

アリアが少し笑顔になった。

「だが、お前と組んで最初に起きた事件、1件だけ、お前と一緒に解決してやる。それが条件だ」

「……いいわ。あたしにも時間がないし、その1件であんたの実力を見極めることにする」

「言っとくけど、どんな小さな事件でも、1件だぞ」

「OKよ。そのかわりどんな大きな事件でも1件よ」

それから二人は少しの間、お互いに黙って見合っていた。

あら、オレ何もなくても二人、くっついたじゃん。

……くっつくってこういう意味だよな？

「ふーん、ナルホドね」

晩飯を食った後、アリアが風呂に入ったのを見計らって、キンジに理子の報告書を見せてもらった。

「Sランクだったのは知ってた。あと徒手格闘バリツの使い手ってコトも」

「なんでだ？」

「実は始業式前にアリアと戦ったことがあるんだ」

「マジかよ」

「マジ。あっさり負けたけどな。そんな時の構えがバリツだった。ビデオで見ただけだったからあんま自信なかったが」

「そんな時にSランクだって聞いたのか？」

「んー、まあそんなとこ。……拳銃とナイフは天才の領域、か。うらやましいねそういの」

「どっちも二刀流らしいぜ」

「それも知ってる」

ペラッ、と次のページをめくるとそこに気になる項目を見つけた。

「2つ名は、『双剣カドラ双銃』？」

「二丁拳銃ないし二刀流のことを、ダブルっていうだろ」

「たしか、英語のダブルから来てるんだっけ？ああ、ナルホド、4つの武器はたしかカトロって言ったか？」

双剣双銃って、カトロから来てるわけね。

「かつくいいじゃん。ネクラとか昼行灯とか言われてるキンジとは大違いだな」

「それは2つ名じゃねえよ」

なんて冗談を言いながら読み進めていくと、またまた、気になる項目を発見。

「父親がイギリス人とのハーフ、じゃああいつクォーターか」

「それだけじゃない。なんかイギリスの方の家がすごい高名な一族らしい。祖母がD a m e^{デーム}の称号をもってるらしい」

「なんだよ。でいむって」

「イギリスの王家が授与する称号だそうだ」

「ってことは、あいつ貴族なの！？」

そういえば、前に使用人がどうのって言ってたな。

金持ちかと思えば貴族かよ。

うらやましいなあ。

「『H』家のことはそれぐらいだ。……アリアはその『H』家とはうまくいつてないらしいが」

「ふうん。で、その『H』家っていったい何なの？」

「さあな、名前までは教えてくれなかったな」

理子はなんで教えようとしないんだ？

知られるとマズイことでもあるのか？

「なんか適当にイギリスのサイトでも検索すれば当たりにはつくんじゃないか、って言ってたな」

「あー、キンジ英語だめだもんね」

「うっせ」

「ヤフー知恵袋で聞いてみたら？誰か教えてくれるかもよ」

「どうだろうな？」

その気じゃないらしい。

それにしても、イギリスのサイトかあ。

後で調べてみるか。

「……理子がヒントだけ教えてくれたんだ」

温室で別れる前に聞いたこと。

「……理子に会ったのか」

「呼び出されたんだよ。ゲームくれた」

「それって、俺がやったやつじゃ……まあいい。で、なんて言ってたんだ？」

「オルメス」

ただ、その一言だけ。

人気者はツライよ

「オルメスって、『H』なのにオルメスなのか？」

「さあ？そつから先は教えてくれなかったよ。もしかしたら、何かの隠語とか？アナグラムとか？」

「……さっぱりだな。まあその辺は保留でいいだろう。アリアのこといろいろわかったしな」

「あたしがなんだって？」

聞き覚えのあるアニメ声。

さっきまでシャワーを浴びていたアリアさんがリビングに入ってきていた。

「アリアはかわいいねって、キンジと話してたんだ」

「か、かわっ!？」

シャワーを浴びた後なので赤くなっていた顔がさらに濃くなっていた。

ドギョーン!!

「うわああああ!!あぶねえっ!!」

「か、風穴!!」

「落ち着けアリア！！いつものフブキの冗談だ！！」

「冗談ですって！？それじゃあたしはかわいくないってこと！？」

（めんどくせええええ！！）

キンジと心がシンクロした。

「ほ、ほらアリア、ももまんあるぞ……」

「そんなもんであたしがつられるわけ！！……まあしょうがないわね」

つられた！！

めちゃくちゃ早くつられたよこの人！！

ソファにドカツと座ったアリア。

テーブルの上に置いてあった報告書はキンジが隠したようだ。

まあ、隠す必要ないんだけどさ。

はむはむとももまんを食べるアリア。

どう見ても子供だよな……。

「ところでキンジ。^{アサルト}強襲科には戻ってくんの？」

「ああそつだな。自由履修って形になると思う。でも、事件を1件解決したらすぐやめるぞ」

「わかってるって」

「もったいないわよねえ。はむはむ。絶対実力はあるのに。はむはむ」

「食つか喋るかどっちかにしろよ」

「そつだぞアリア。あんまりはむはむしてると、ほっぺたはむはむするぞ」

「この変態!!」

グーで殴られた。

「強襲科よ、私はかえってきたああああ!!!!!!!!!!」 ￥(^ o ^) /

「恥ずかしいからヤメロ」

キンジが強襲科で自由履修登録やら装備の確認やらに付き添って

るとかなりがかかってしまった。
強襲科アサルトの訓練場にやってきた俺たちは開口1番、つい叫んでしまった。

「何言つてんだキンジ。これは正に日本の様式美。やっとかないとだめだろう」

「勝手に日本に変な様式を増やすな」

おいおい、アニメは日本の文化だぜ。

なんてやり取りをしていると、強襲科アサルトの連中に見つかってしまった。

「おーうキンジい！！ お前は早く帰つてくると信じてたぞ！！
さあここで1秒でも早く死んでくれ！！」

「……ありやりや見つかった。さっさと射撃訓練場行けばよかったな」

「お前が叫ぶからだろ、ったく。……まだ死んでなかったか夏海。
お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死ね」

「キンジいー！！ やつと死にに帰ってきたか！！ お前みたいな
マヌケは早く死ねるぞ！！ 武偵つてのはマヌケから死んでいくも
んなんだからな」

「じゃあなんでお前が生き残ってるんだよ三上」

「キンジの死ぬ姿早く見たーい」

「フブキ、お前は黙ってる」

郷に入り手は郷に従え。

死ね死ね言うのがここ、アサルト強襲科の挨拶だ。

キンジはここアサルト強襲科では今見たように結構人気者だったりする。

その理由はおそらく、入学試験で見事に教官を倒しちゃったから。

キンジはやっちまったって嘆いていたが。

なんて考えているとキンジの周りにはあっさり人だかりができてしまふ。

そりゃもう、男女問わずわらわらと集まってきてしまった。

キンジは律儀に一人一人に挨拶を返している。

こりゃあ今日は射撃訓練はできそうにないなあ。

そこでふと視線を感じた。

振り返って上の階を見上げると、そこには見知ったちびっこの姿があった。

「うおーーーーーい！！ あかりちゃーーーーーん！！」

大声で叫びながら手を振ってあげた。

そしたら、さっきまで上の階にいたあかりちゃんがいつのまにか俺の目の前まで来ていた。

この間^{かん}わずか3秒である。

「恥ずかしいから大声で名前を言わないでください!!」

「あれ、だめだった? 間宮の方がよかった?」

「苗字もだめです!! ……まったく、フブキさんに会つとろくなことがないんだもん」

「大変だね」

「フブキさんのせいでしょ!!」

ずいぶんと怒ってらっしゃる。俺なんかしたか?

「それよりフブキさん」

「なに? 愛の告白?」

「遠山先輩とはお知り合いなんですか?」

無視された……シクシク

「クラスメイトで友人だ。おまけにルームメイトでもある」

「そうですか。入学試験で教官を倒したって本当ですか?」

「うん、本当だよ。なにになに、あかりちゃんもしかして上勝ちねらってる?」

上勝ちとは私闘で上級生に勝つことである。

「いえ、そんなんじゃない。ただ、聞いた話で想像していた人とイメージが違ったので」

……… いったいどんなイメージだったのだろう。

「……… あんた人気者なんだね。ちょっとびっくりしたよ」

キンジとやつと火薬くさい所を脱出し歩いていると、門のところに背中について立っているちみっこがいた。

俺たちに気づくと小走りにこちらへやってきてそんなことを言っていた。

「あんな奴らに好かれたくない」

「ムフフ、うれしくせに」

「うっせ」

久しぶりの強襲科ではキンジの来訪を歓迎している人間があんなにもたくさんいた。

それは人づきあいの悪いネクラなキンジでもうれしかったようだ。

「あんたが少しうらやましいな」

地面に視線を落として小声で話しだすアリア。

「うらやましい？」

「あたしになんか、強襲科では誰も近寄ってこないからさ。実力差がありすぎて、誰も、合わせられないのよ」

オレは、「そんなことはない」と言いかけたが、口が開かなかった。その実力はオレが身を以て知っていたから。

「まあ、あたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど」

「『アリア』？」

普段とは違うイントネーションだったので、オレたちは首を傾げる。

「『アリア』って、オペラの『独唱曲』って意味もあるんだよ。1人で歌うパートなの。1人ぼっち……あたしはこの武偵高でもそう。ロンドンでも、ローマでもそうだった」

「で、ここで俺をトレイにして『デュエット』にでもなるつもりか？」

その言葉を聞き、アリアはくすくすと笑い始めた。

本当におかしそうに笑っている。

「あんたも面白いこと言えるじゃない」

「キンジ、たまに面白いこと言うからなあ」

「面白くないだろ」

オレとアリアは顔を見合わせて、

「「面白いよ?」「」

「二人そろっていうな。お前らのツボはわからん」

「いいねえ、『デュエット』。じゃあ、オレも入れて『トリオ』でも結成しようか」

「あんたを入れたら、せっかくの曲が台無しになっちゃいそう」

「言えてる。適当に場を乱^{みだ}して、適当に帰るんだろ」

「ひどくありません!?!」

今度はキンジとアリアが笑い始めた。オレもまた、笑いだす。

オレたちはいいいトリオだと思っただがな。

話が一段落着いたのでここで別行動を取らせてもらっ

「んじゃ、オレは夕飯の買い物に行ってくっから」

「手伝おうか？荷物持ちぐらいするぞ」

「いいえ、お断りします。途中で本屋寄って帰るから。時間かかるからゲーセンにでも行って適当に時間つぶして来いよ。じゃあな」

さて、後ろからついてきているちびっこを救出しないかね。

警察！！ 忍者！！ ストーキング！！

どうも皆さん、お久しぶりです。

間宮です。

現在、あたしはアリア先輩と遠山先輩を尾行ストーキングしています。

理由は、アリア先輩と遠山先輩の関係を探るため！！

さっき、フブキさんに会ったときに聞きました。

「アリアとキンジがつながっている」

コレを聞いたとき、初めはフブキさんのいつもの悪ふざけと思っていました。

ですが、

「ウソだと思うなら、キンジの後を追ってみるといいよ」

と、いつもとは違った雰囲気ですんなことを言うフブキさんに、あたしはただならぬ空気を感じました。

言われた通り、後を追ってみると、なんと、アリア先輩が遠山先輩と肩を並べて歩いているではないですか！！

なんか、2人の隣にもう1人いた気がします。が気にしません。

アリア先輩のことが気になって気づきませんでした。

ポンポン。

と、誰かに肩を叩かれました。

どうせ、いつもみたいにフブキさんが後ろからおどかさうとしているに決まっています。

ですので、ここはムシです。

「ちょっと、キミ、署まで来てくれる？」

その手にはのりませんよ。

ココはスルーでいきます。

ポンポン、ポンポン、ポンポン。

さすがにしつこいです。

しつこい人は嫌われますよ。

「もー、フブキさんさっきからいったいなんなん……………」

「……………」

なんだ、本物のお巡りさんでした。

「……………」

お巡りさーーん!?

「ちょっと来てくれるかい」

ヤバいです!!

まさか、本物のお巡りさんだとは思いませんでした!!

だ、だれか助けてえええ!!

「すみません、お巡りさん。オレ達こついつもので」

後ろから声がしたので振り向くと、そこには、武偵手帳を掲げたフ
ブキさんがいました。

「まったく、お巡りさんに職質を受ける武偵がドコにいるんだよ」

「じ、ごめんなさい」

あかりちゃんに合流しようとしたら、既にお巡りさんがあかりちゃん
の肩をポンポンしているところだった。

オモシロそうだったので少し黙ってみていたら、案の定、あかりちゃん
がわたわたしだしたのでようやく、オレは助けに入った。

「それより、キンジ達はどうなった?」

「ゲームセンターの軒先に置いてあるクレーンゲームで遊んでいます」

「ふむふむ、ナルホド」

「何が、ナルホドなんですか？」

「2人はゲーセンで遊ぶほどの仲だったってことだよ」

それを聞いたあかりちゃんの顔が、ムンクの『叫び』という作品以上の顔になった。

「おもしろいから写真撮っていい？」

パシャ。

「どどどどどういうことですか!？」

「につぶいなあ、2人は付き合ってるってことだよ」

~~~~~!!!!!! 声にならない叫び

「2人の関係がわかったから帰ろっか」

「いいえ、まだです!!!」

「まだって？」

「まだ恋人同士だと決まったわけではありません!!!」

往生際が悪いなあ。

その通りなんだけどね。

「きつと、遠山先輩はアリア先輩に近づく、悪い虫ってやつなんです！ー」

悪い虫って……。

「アリア先輩に近づく悪い虫は排除しなければ。フッフッフ」

さすがのオレもドン引きだった。

ていうか、激しくデジャヴを感じていた。

「待っていてください、アリア先輩。今助けに行きますから」

ダメだコイツ、早くなんとかしないと……。

ゲーセンの前でアリアとキンジが別れたのを見て、オレ達はキンジの後を追うことに。

尾行中、隣でえらく鼻息をふんふんさせている少女がうるさかった。

だいぶ、興奮してるな。

今すぐにも飛び出していかんばかりに殺気立っている。

何とかそれを宥めながら、尾行をしているが、これ、絶対キンジにバレてるよな。

だが、現在相棒がこんな状態のため、ほっとくわけにもいかない。

今は、キンジに早く帰宅してくれること願うのみだった。

キンジの尾行を続けていると、いつの間にか住宅街に入り込んでいた。

キンジが角を曲がって行っただけでオレ達も走って角まで行こうとしたら、

「待たれよ」

声をかけられそこで立ち止まった。

「お初にお目にかかる間宮殿。フブキ殿は一度お会いしましたな」

「おお、久し振りだな。風魔」

そこにいたのは電柱から逆さ吊りになっている、1年の風魔という奴だ。

「フブキさん………！！」

あかりちゃんが小声で尋ねてくる。

「……………なんだ？」

「どうして、あの子のスカート落ちてこないんですか？」

「そういう緊張感ないこと言つのやめてくれる？あかりちゃん、空  
気読めないの？」

「フブキさんにいわれたくないですよ！？」

「こわいわー。最近の子、すぐ怒るからこわいわー」

「フブキさんが変なこというからでしょ！ー！」

緊張感のかけらもなかった。

「とりあえずお二方、某を無視するのはやめてもらいたいのだが」  
それがし

「ああ悪い、風魔。存在感ないからわかんなかった」

ガンー！！

って擬音がハッキリと聞こえそうなくらい落ち込んだ、忍者少女。

この子、どこか抜けてるトコあるんだよなあ。

この子が回復するのを待ってたら日が暮れそうなので先を急ぐことにする。

「じゃあな、風魔。先急ぐから」

そう言って走り去ろうとしたが、

「某は存在感がない。某は存在感がない。某は存在感がない………」

激しい落ち込みようだったので、最後にフォローしておこう。

「安心しろ、風魔。存在感がないってことは隠密に向いてるってことだ。胸張っていいぞ」

「ほ、本当でござるか……！」

と、オレに詰め寄った後、すぐさまトリップしてしまった。

「……………先を急ごう」

「……………ハイ」

## マイベストフレンド

「んー、いないなあ」

キンジを探して三千里。

とまでは当然ながら行かないがなかなか見つからず、右往左往。

そして、辿り着いた先は公園だった。

「ハアハア、もしかしたら、草葉の、影とかに、隠れてる、かもね」

ここまで、走りながら探していたため息も途切れ途切れだった。

「遠山キンジ！どこだあああ！！」

もう、あかりちゃんが視聴者にお見せできない顔になってしまっている。

これ小説でよかった。

「つたく、風魔の奴まけてねえじゃねえか」

「あつ、キンジ」

木の陰から出てきたのはマイベストフレンドだった。

「で、フブキ、誰だソイツ」

「強襲科<sup>アサルト</sup>1年、間宮あかりちゃん。現在恋する女子高生だよ」

「余計なこと付け足さないで下さい!!」

相変わらずのツツコミの速さである。

「で、何で俺なんかの後をつける。フブキの仕業か」

キンジがオレを睨んできた。

鋭い目つきだったので少し萎縮してしまった。

「ご、ごめん。ちょっとおもしろそうになって思って、あかりちゃんに提案したんだ」

「で、でも最終的には自分で決めたのでフブキさんのせいではないです!!」

「……………まあ、この際誰のせいだとかは置いておく。話を戻すが、その1年はなんで俺の後をつけた」

「だって…………」

少しの間が開く。

色々と考えているんだろう。

「だってズルいです!!あたしは戦ってようやくお近づきになれたのに、アリア先輩が自分から追っかけるなんて!!!!どういう関係なんですか!?!」



「？」

話が見えないとばかりにオレのほうを見てくるキンジ。

キヤー、そんな目で見ないで！。

オレは手で話してやれば？、といったジェスチャーを送った。

「ハア、話がまったく見えんが、俺はな、アリアに追われて迷惑してるんだ」

「迷惑ですって！？この、無礼者！！」

あかりちゃんの何かが切れた。

なんだよコレ。予想通りオモシロすぎだろ！！

まだだ、まだ笑うなwww

「まったく、あんまりうるさいとシメるぞ、1年」

またあの目だ。

キンジが苛<sup>いら</sup>ついていると、あの全てを射殺さんとするような鋭い目をするのだ。

あの目を見たのは中三以来だっけ。

「今はEランク武偵だが、お前みたいなアホ丸出しなやつには負け

る自信なんて持ち合わせてねえぞ」

「えっ、Eランク!? そんな、おかしいですよ!!! 入試の時はSランクだったのに……遠山先輩はなにか隠してるんでしょう!!!」

「……………度胸があるのと無鉄砲は違うぞ、1年!!!」

そしてキンジは懷から銃を抜き構えた。

まずいな、この空気。

「待つてくれ、キンジ!!!」

なんとか待つてくれるようキンジに促す。

構えを解いたキンジ。

とりあえず待つてくれるていう意思表示だろう。

オレはあかりちゃんに聞かれないよう両手で両耳を塞ぐ。

「ふえっ!!!」

「キンジ、大丈夫だ!!! この子はキンジのことはなんにも知らない!!! ただ、自分の勘を確証もないまま述べただけだって!!!」

「……………」

キンジは中学時代あの体質が女子にバレたせいで散々な目に遭っている。

オレも勿論、それをバラしたりしない。

「それに、仮にこの子にバレても大丈夫だよ！！この子は、あかりちゃんは人が秘密にしていることを言いふらしたりしないよ！！」

わずか数日しか話したことないけど、友達だから、信じている。

「……ずいぶんとその1年のことをかってるんだな」

「かってるとか、そんなんじゃない。友達だから信じているんだ」

「………先、帰ってるぞ」

そう言って、キンジは銃を収めて帰っていった。

「ふう。大丈夫？あかりちゃん」

あかりちゃんの顔を見ると口をパクパク開閉するだけでまるで金魚みたいだ。

それにしても、なんだかあかりちゃんの顔が熱いな。

「もしかして、熱でもあるんじゃない」

「い、いえっ！！大丈夫です！！ホントに大丈夫ですから！！」

「そう、それならいいけど。もう遅いし、家で良かったらごはん食べていく？こっから家近いし」

「いいんですか!?!?.....あつ、でもあたしの家妹が一人にいるし……」

「よしっ!!..その子も呼ぼう!!..」

「えっ!?!?ちよつとフブキさん!?!?どうしてそう.....ああ、勝手に電話取らないでください!!..」

「もしもし、あかりちゃんの妹?あかりちゃんの愛しの先輩、桜野フブキです」

「やめてえええ!!..」

突然、場がカオスになるのはフブキクオリティ。

## 命運を握る者達

……………おかしい。

朝起きると、なぜか玄関だった。

なんでオレこんなところで寝てんだ？

オレは立ち上がって、寝ぼけた頭を無理やり動かす。

確か昨日は……………思い出せない。

リビングに向かって歩こうとすると足に何かが引っ掛かった。

「……………オレの……………携帯……………」

自分の携帯を拾い上げ、開いて時間を見ると時刻は午前5時だった。  
いつも起きる時間だ。

このあとはランニングして、帰ってきたらシャワー浴びて、朝めし  
の下ごしらえして、それが終わるとだいたい6時半ぐらいだから2  
度寝するんだ。

でも、そんな気分ではない。

今気づいたが体の節々が痛い。

頭は痛くないから二日酔いじゃない。つまり、昨日は酒は飲んでい

ないと思う。たぶん……。

「……シャワー浴びよ……」

「ゲッ！！なんだこれ！？」

シャワーを浴びて、リビングに入ると中は散らかり放題だった。

「そうだ、昨日はあかりちゃんとののかちゃんを家に招いてパーティーしたんだっけ」

ののかちゃんとはあかりちゃんの妹である。

パーティーと言っても、オレがちよっと豪勢な料理をふるまって、適当に騒いだけだったか。

「……そうだ、昨日なぜか家にアリア宛に荷物が届いて、中身がチョコレートだったんだっけ？ たちが悪いことに中身が酒入りで、それを食べた約2名が酔っぱらって大騒ぎ、だったよな」

ちなみに、酔っぱらった2名はアリアとあかりちゃんである。

菓子に入っただ量のアルコールで酔っぱらうなんてな……チョコに入っただアルコールって度数が強いのか？

オレは甘いものがあまり好きじゃないため食べなかった。

キンジは食べていなかったし、ののかちゃんは食べてはいたが平気そうだった。

お気楽な姉と、しっかりものの妹、か。

酔っぱらい二人はソファアの上でぐっすり眠っている。

突然眠ったんだよな。

そのあとののかちゃんを家まで送ってあげたんだっけ。

……………それでなんで玄関で寝てんだ？

どついうわけか、ののかちゃんを家まで送り届けた後の記憶が全くない。

「……………考えてもしょうがないか。かたづけよ」

一人で静かにかたづけを開始するオレだった。

「「「「「……………」」」」」

この部屋には4人の人間がいる。

みな高校生で、現在は朝めしを食っているところだ。

学生が4人もいるのに会話がないとはどういうことか。

話は数分前に遡る。

朝めしの準備ができたので少し早いがみんなを起こすことに。

女子二名は昨日は制服のまま眠ってしまったので、シャワーも浴びたいだろうと思い早めに起こすことにしたのだ。

まずはソファアーの上でだらしない恰好で眠るあかりちゃんを起こすことに。

「あかりちゃん、起きて、朝だよ」

肩を揺らしながらそう問いかけると、何とか起きてくれた。

「ふわ。あれ？ここ、どこ？」

起きたばかりなので寝ぼけているのも仕方がない。

状況を説明することにした俺はあかりちゃんの前に座った。

「あかりちゃん、起きたか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へんたい」



「へ？」

「きゃああああああ！！！！！！寝込みを襲う変態がいるうううう！！！！」

「はああああああ！？」

どうしてこうなった。

叫んだと思いきや突如マイクロUZIを取り出すあかりちゃん。

そして、銃を取り出したということは……

「こないでええええええ！！！！」

「ぎゃああああああ！！！！！！」

有無を言わせぬ発砲。

無数の弾丸がオレを襲う。

「ひいつ、クッションバリア！！」

オレはクッション（防弾仕様）を突き出して身を守ることには

しばらくして発砲が収まったのでクッションを脇に寄せると、

ずがががががががが！！

リロードしてるだけでした。

再び発砲してくるあかりちゃん、もう一度クッションで防ぐオレ。

もう、誰か助けて……。

「うるさああああああい！！！！！」

するともう一つのソファで寝ていた、『カドラ双剣双銃』ことアリアさん。

ああ！！あなたは私の女神たるお方だ！！

なんて思っていると、女神が叫んで立ち上がった後あることに気づく。

それは、自分の衣服が着崩れていることに。

「~~~~~！！！！！！！！」 声にならない叫び

これは所謂死亡フラグって奴でしょうか？

「フブキ！！あんた、あんた……！！！」

どうやら誤解していらっしゃるアリアさん。

顔を真っ赤にしているところを見ると、もうあらぬことを想像してしまったようだ。

こうなったアリアさんはだれにも止められない。所謂、暴走って奴ですか。

それからしばらく2人が落ち着くまでずっと撃たれ続けました。

クッションは犠牲になったのだ。

ちなみに、キンジは寢室からこちらの様子をつかがっていたことを記しておく。

ていうか、みてたなら助けるよ。

そして現在に至る。

「「「「「.....」」」」」

だれもしやべらない、発さない、語らない、口を開こうとしない。

なぜなら、みんなが気まずい空気を感じているからだ。

「「「「「.....」」」」」

全員、緊張した面持ちで朝食をとっている。

なぜ、オレを含めた全員が黙っているのかというと。

女性陣は誤って発砲してしまったという悔恨の念から。

男性陣は少しでも隙を見せると撃たれるんじゃないかという警戒心から。

みながみな、それぞれの思想で至った結果が沈黙だった。

誤って言葉を発そうものなら大変な目にあう。

たとえば、

「あ……お醤油……」

あかりちゃんからは遠くに置いてあったお醤油。

だが今みたいに声を発してしまうと、全員からにらまれることになり、

「す、すいません……何もかけずに食べます」

誰かがとってあげれば済むものを誰も取ろうとはしなかった。

「」「」「……」「」「」「」「」

もう1度言つがここにいるのは4人の高校生。

そしてこの4人が今後の物語の中心人物なのだ。

そのメンバー全員が初めて会した場面がこんな状況なんて、これから先も最悪のシナリオに決まっている。

この先やっていけるのだろうか？

## 命運を握る者達（後書き）

と、いうわけで序章終了です！！

見事にレギュラー陣を揃えることができました。

いやぁ、良かった良かった。

次回から第1章突入です！！

これからも緋弾のアリアーたったひとりのNーをよろしく願います。

それではまたどこかのあとがきで！！

男には、やらねばならぬ時がある！

「あ、あたしお金持っていないので歩いていきます！！」

なんて言い出したあかりちゃん。

バスに乗る前に言い出したのだが、今から歩いていけば当然遅刻する。

オレは「バス代ぐらいオレが払ってやる！！」と、キンジが言ったことにし、あかりちゃんを無理やりバスに乗せた。

ちなみにバス代はキンジが払いました。

オレはお金あまり持っていないから。

「で、どうしてこういうことになるんだ」

今日は身体測定の日。

午前は女子の1年から順に測定するそうだ。

ちなみに男子は一応、自習ということになっている。

現在はおそらく全学年の女子が着替えている頃だろう。

それでオレ達は今何をしているのかということ……

「なんでロッカーの中に男が3人もいるんだ」

「おい、キンジにフブキ、覗きたかったんなら一言声をかけてくれればいいのによ」

「うるさい無糖。オレ達はお前みたいに覗きたくてここにきたわけじゃない」

「じゃあ何しに来たんだよ。あと、俺は武藤だ。無糖じゃない。微妙にイントネーション違うだろうが」

「俺は理子に呼び出されたんだ」

「ごめん武藤。キンジはすぐバレるようなウソをつく、ムッツリ覗き魔だった」

「ちげえよ!!このメール見てみる!!」

そう言っで携帯を見せてきた。

「だが断る」

「断るな!!ちゃんと見てみる!!」

「たしかに……」

そこにはちゃんと理子からのメールが。

キンジはどうやら、理子にはめられたらしい。

もうすでにみなさんにはここがどこだか予想がついているだろう。

そう、ここは女子更衣室。

武藤のような男にはまさに桃源郷だろう。

だがオレとキンジはそんな理由でここにいるわけじゃない。

だって、キンジはあのことがあるためわざわざ覗こうとは思わないはずだ。

オレだって、そりゃあ女の子に全く興味がないわけじゃないが、しかし、覗きという趣味は残念ながら持ち合わせちゃいないんだ。

ちなみに、ロッカー内にいるオレ達3人の会話は全て小声である。

そう思っていてくれ。

「ところで、フブキはどうしてここにいるんだ？」

「気づいたら、この場所にルーラしてた」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」



「すぐばれるようなウソをつくのはおまえの方だろ!!」

「待ってくれキンジ!! ルーラは冗談だが、気づいたらここにいたってというのは本当なんだ!!」

「信じられるか!!」

「お前ら少し静かにしろ!! バレないか心配で落ち着いて覗きもできないだろうが!!」

覗こうとしている奴にそんなこといわれたくないのだが、外にいる女子にバレたくはないのでここは素直に黙っておくことに。

しばらく黙って待っていると、キンジの携帯にメールが届いたようだ。

差出人は理子だった。

内容は、

ハァーイ!! キーくんちゃんと覗いてる?

覗いてるかどうか、確認!! 「10秒以内に理子の下着の色を返信せよ!!」 答えられなかったり、間違った回答をした場合はロツカ―を開放しちゃうまーす。

「.....」

オレ達がやるべきことは、たったひとつ。

「武藤そこをどけ!!」

オレが人生で一番速く動いた瞬間だったと思う。

武藤を押しつけ（音はしないように細心の注意を払いながら）キンジに早く覗くように促す。

覗きを促すなんて人生で最低の行為をしていると思う。

しかも、その理由が自身の保身のためだなんて……。

あれ、なんか目から水分垂れてきたぞ？

だが、ここまで来たら、もうやり遂げるしかない!!

「キンジどうだ!？」

「ちょっと待ってろ……見えた!!」

すかさず、メールを打ち送信する。

「これでなんとかしのいだか」

キンジがまるで100メートルを全力で走った後みたいな疲れかたをしていた。

「死ぬかと思っただけ」

「なんなんだお前らは？それより、フブキ、見てないのはお前だけだぞ」

「は？いいよオレは」

「なにいつてんだ。ここまで来て見ないなんて、ありえないだろ！」

「はあ、わかったよ」

疲れすぎて断る気力が無かったので、しびしび覗くコトに。

しびしび覗くつて、どうかしてると思うがな。

「しつれいしまーす」

隙間から覗いて、最初に見た光景は

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前に制服姿のレキさんがいました。

その距離僅か数センチ。

「何してるんですか？」

彼女は狙撃科<sup>スナイプ</sup>所属、2年の天才少女、レキ。

ランクは天才と呼ばれている彼女は当然Sランク。

オレが1年の頃よく任務<sup>クエスト</sup>で組んだことがあり、オレが非力なため何度も助けられたことがあり、レキにはホントに頭が上がない。

土下座よりも頭を低くしないといけないぐらいに。

身長はアリアより頭半分大きい程度。

外見もショートカットの美少女だ

だが、無感情なためか、ついたあだ名は『ロボット・レキ』。

だれだそんなあだ名付けたやつ。

オレがぶっ飛ばしてやる。

そういえば、そのあだ名を知ったのはレキと初めて組んだ時か。

クエスト  
任務終わった後に本人の前で「そんなあだ名付けた奴はオレがみつ  
けしだいぶっ飛ばしてやる」って宣言したんだっけ。

結局見つからなかったが。

とまあ、レキさんの説明は置いといて、現在はレキさんとの距離は  
ロッカーの扉1枚挟んだだけ。

当然オレのいやな汗が滝のように流れ落ちているわけだが。

落ちて着けオレ、とりあえず平常心を保ちつつ、ここを切り抜けられ  
る言い訳をするんだ。

「聞いてくれレキ。オレ、この場所が好きただけなんだ」

しっばいしたああああ！！

今の発言じゃ、オレがこの場所を御用達にしてるみたいじゃないか！！

フォローしないと！！

「ち、違っんだ！！決して覗こうなんて思っではないぞ！！ただ、ここから見える光景は男にとっては桃源郷だけで……」

ああ！！レキさんがロッカーの扉に手をかけている！！

もうだめだ！！

この扉の向こうは確かに桃源郷だ！！

だが、開いてしまうとその先にあるのは死刑台！！

ごめんよセツナ、お兄ちゃん、先に逝ってくるわ。

そして、とうとうレキによって扉が開かれる。

みなさんサヨウナラ。

来世で会いましょう。

完

男には、やらねばならぬ時がある！（後書き）

もちろん、続きます。

**襲来する獣（前書き）**

新キャラ登場回。

## 襲来する獣

開きかけた扉を見て、オレは自分の死を確信してしまった。

もう終わり、いつもみたいに冗談ですませるような状況じゃない。

確信はしたが、往生際が悪いのがオレ。

といっても最後は目をつぶって、神に祈ることしかできないが。

だが、いくら待っても扉が開くことはなかった。

ゆっくりと目を開き、扉のスリットから外の様子を覗くと、

窓ががっしやあああん！！

と、割れて何かが中に入ってきた！！

それから、その何かはまっすぐ、こちらのロッカーまで突進してきた。

「！？」

ドオンっ！！という衝撃がロッカーを襲う。

流石は武偵校のロッカー！。

今の物凄い衝撃にも軽々と耐えた。



だが、今の衝撃の反動か、ロッカーの扉は開いてしまった。

開かれた扉から部屋の中を見回すと、ロッカーの中に男子がいたことよりも、ロッカーに突進した何かに驚き、啞然としているようだった。

いや、啞然という状態の奴もいるが、それ以外の奴はオレの足下にいる存在に目を奪われているような感じだった。

それらの視線を追って足下を見ると、

「グルルルル」

とても大きい動物がいました。

目を奪われても仕方がないほどキレイな銀色で、大きいというより巨大な動物だった。

沈黙の中、真っ先に声を発したのはその側にいたオレだった。

「わ、わんわんお!!」

部屋の中にいたレキ以外の全員がずっこけた。

「あ、あれ？」

「フブキさん、ふざけていないで捕まえてください」

1人冷静だったレキさんがオレに指示をだした。

「あ、ああ。わかったよ」

常にオレを威嚇していたわんわんお（犬？）は意外にもあっさりと捕まえられた。

と、思っていた瞬間、わんわんおはオレの腕を振りほどき、ずっつけていた武藤の足にかぶりついた。

「む、武藤が食われたああああ！！」

「落ち着け、フブキ！！」

キンジのかけ声で冷静さを取り戻したオレ。

武藤を見ると、足にかぶりついたわんわんおを振りほどいていた。

それから、武藤はすぐさま腰のホルスターから銃を抜いた。

コルト・パイソン。

コルト社製の命中精度の悪い回転式弾倉だ。リボルバー

だが、使用する弾は・357マグナム弾、威力は絶大だ。

そんな高威力のリボルバー銃を、武藤は天井に向かって発砲、威嚇射撃をした。

ドオンッ！！と、大きな音が鳴る。

動物は、普通、大きな音に弱いから、コイツもすぐに逃げ出すと思

っていた。

だが、コイツは全く怯む様子を見せず、別の標的を探っているように見えた。

その隙にオレは、わんわんおの後ろから飛びついた。

「よっしゃ！！おとなしく……！？」

飛びついた後すぐに暴れられ、近くのロッカーに叩きつけられる。

その後、わんわんおは自分で破った窓から出て行った。

「大丈夫かお前ら！？」

「俺は大丈夫だ。それよりキンジ！！外の茂みにバイクが止めてある！！それで追いかける！！」

そういつて、武藤がポケットから取り出したバイクのキーをキンジに投げ渡す。

「キーくん行って！！武藤くんとブッキーは理子達が手当するから！！」

キンジは小さく頷いたあと、窓から飛び出していった。

ヒスッてないキンジが行って大丈夫だろうか。

「待てキンジ！！オレも行く！！」

そう言つて、走つて勢いをつけて窓のふちに手をかけた瞬間。

「フブキさん、邪魔です」

声が聞こえたと思つたら、襟首を後ろに引つ張られ、そのまま床に叩きつけられた。

床に叩きつけられる前に見えたのは、大きな狙撃銃を肩にかけたレキさんの姿が。

その後、オレの意識は遠のいた。

「知らない天井だ……」

目が覚めて最初に見えたものは、見たことのない天井だった。

「実は今まで見ていたのは全部夢で、いつものように2段ベッドの上段で寝ていれば良かったのに」

「もしくは、今までののが全て冗談だったら良かったのに、か？」

起き上がつて声がした方を向くと、そこには白衣を着た女性がいた。

とてもキレイな人で長く美しい黒髪を、ポニーテールに結んでいる。

ポニーテール……………最高……

見たところオレと年齢が変わらないぐらいだろう。

ということは、たぶん武偵校の生徒で、3年生じゃないだろうか。

「初めまして、アンビュラス救護科3年、すぎた やよい杉田弥生よ」

白衣の胸ポケットにつけてある名札を強調しながら、自己紹介してくれた。

「ああ、オレは……………」

「ニュートラル無所属2年の桜野フブキくん。患者の個人情報はいたい知ってるわ」

そりゃそうか。

「あなたは頭に強い衝撃を受けて、のうしんとつ脳震盪を起こしたの」

あゝ、レキさんに邪魔呼ばわりされて床に叩きつけられたんだよな。

「それ以外には特に外傷は見られなかったからもう少し休んだ後かえってもらっていいわ」

あれ？

「頭を打ったのに、検査とかはしなくてもいいんですか？」

「あなたに使う機材はねえ」

「たんめんはねえ、みたいに言わないでくださいよ！！一応オレ患者なのに、何かあったらどうするんですか！！」

「患者（笑）」

「あれ？オレもしかして患者扱いされてません？」

「起きたのなら早く出て行って頂戴。たいしたケガがないのにないつまでもベッドを占有してほしくないの」

「もう少し休めって言ったのは弥生さんでしょ！！急に冷たくなりましたね！！」

「フフ、冗談よ。噂通り面白い人ね。体温計つてくれる？」

「そう言つて、体温計を手渡してきた。」

「どうやら、遊ばれたようだ。」

「ちくせう。」

「それより、アイツどうなりました？えーっと……犬」

「あれは犬じゃなくて狼だったわよ」

「胸ポケットからボールペンを取り出し、手に持っていた紙に、なにやら書き込んでいる。」

それにしても、あれは犬……わんわんおじゃなくて狼だったとは。

珍しいこともあるもんだなあ。

「フブキくん、ここにサインくれるかしら」

「ハイ、いいですよ」

治療に関する手続きだろう。

保険おりるかなあ。

「それから、この薬を飲んでね」

そう言って、渡してきたものは、カプセルが一錠。

オレはそのままそれを飲み込んだ。

ふと、弥生さんの方を向くと、一瞬、彼女の口元が歪んでいるように見えた気がした。

## リザルト・A

前回と変わらず病室

しばらくの間オレは弥生さんのおもちゃにされていた。

オレで遊んで満足したのか、弥生さんがある資料をオレに渡してきた。

「これがさっき言ってた狼の資料。インフォルマ情報科が作ってくれたの」

弥生さんの言った通り、1枚目は狼の資料だった。

えーっと、なにに。

コーカサスハクギンオオカミ。絶滅危惧種。

情報終わり。

「情報少なっ！！」

「狼自体が日本じゃめずらしいからね、そういった絶滅危惧種は資料が少ないらしいの」

これはどう見ても、資料が少ないどころじゃないだろ。

まあ別に、体長とかいろいろ言われてもわかんないからオレにとってはこれぐらいがちょうどいいか。



「それで、2枚目を見て」

ページをめくると、そこには捜査報告書と書かれていた。

「えっ！？もしかしてオレが事件の後処理しないといけないんすか！？」

「そうみたいね。まあその狼を診<sup>み</sup>てくれている人と話し合って処置したほうがいいでしょうね」

だったら早い方がいいと思ったのだが、今日はまだ狼が処置中ということもあって事件の後処理は明日にした方がいいということになった。

「それから、3枚目」

「まだ、なんかあるんすか？」

さらにめくるとそこには……、

「覗きについての反省文を書くこと」

あ、忘れてた。

その後は簡単な検査を行い別に異常も見られなかったためオレは無事退院することになった。

だが脳検査の時、診断書に「頭が残念」と書かれていたのだが、あえて気にしないことにした。

それを見ていたとき弥生さんが妙にニヤニヤしていたが、同様に気にしないことにした。

気怠さ<sup>けだる</sup>を抱えたまま部屋へ到着。

「ただいまーつと」

「フブキさん！！大丈夫ですか！？巨大なわんちゃんに襲われたって聞きましたけど！？」

ここに勘違いしている人が1名。

オレも同じ間違いをしてたから人のこといえんが。

「うん、襲われた襲われたー」

「軽いですね！！ケガとかしてないんですか！？」

「大丈夫だよ。……頭が残念って診断されたけど……」

「……大丈夫そうですね」

「おい」

失礼な後輩だ。

何故あかりちゃんが部屋にいるのかというと、今朝登校中にいつでも来ていいと言っておいたのだ。

アリアはしばらくは部屋を出ないみたいで、それじゃあ戦妹いもうとがかわいそうだろう？

ていうか、戦妹いもうとほっとくなよ。戦姉妹アミカ契約したんだろうが。

「ところでキンジ達は？」

するとなぜか急に表情を曇らせるあかりちゃん。

「……もしかして、キンジ達になにかあったのか！？」

「いえ……アリア先輩も遠山先輩もいるにはいるんですが」

妙に歯切れの悪いことを言う。そして、ちらちらとなぜかキンジの部屋を見ているあかりちゃん。

ま、まさかっ！！

「あかりちゃん……オレたちは外で何か食べてこようか」

「な、なんですか急に！？突然フブキさんがキメ顔になってます！

「！」

「オレはさ、友人としてあいつらに気を使ってやらないといけないからね」

「えっ？ いったいなんなんですか？」

「いいからいいから、さっ、行こう行こう」

あかりちゃんの肩を押し無理やりだが外へ連れて行くことに。

「どこへ行こうというの？」

ダラダラダラダラダラダラ。 冷や汗

「フブキい、聞いたわよ、あんた女子更衣室にいたんですってねえ」

振り向くとそこには鬼がいた。

全身はなぜか赤い血で染まって……って、まさか……！

「アリアさん……キンジの部屋でいったい何を……」

「気にしないでいいわあ。アンタもすぐ後を追えるから」

「ダレを！？ どこに！？」

「太陽はなぜ昇る？ 月はなぜ輝く？ アンタは質問ばかりの子供みたい。武偵なら自分で考えるなり調べるなりすればあ」

「ま、まさか……オレたちが女子更衣室を覗いたせいでキンジは…  
…」

「正解、風穴」

「うわあああああ……！……！あかりちゃんバリアー……！……！  
いい！？」

追い詰められたオレになすすべはなく。

そのまま、やられました。

「弥生さん……ですか……至急……救急車を……2台……ガクッ」

本日2度目の救護科行きが決定しました。  
アンビュラス

## リザルト・B

「知らない天井だ……」

目が覚めて最初に見えたものは、見たことのない天井だった。

「実は今まで見ていたのは全部夢で、いつものように2段ベッドの上段で寝ていれば良かったのに」

「もしくは、今までののが全て冗談だったら良かったのに、か？」

起き上がって声がした方を向くと、そこには弥生さんがいた。

「今の会話にデジャブを感じるんですが」

「気のせいじゃないかしら？」

まあ、どうでもいいが。

「それにしても、ところどころに打撲、擦り傷、刺し傷、やけど、その他もろもろの傷を負ってたけどいったい何があったの？」

「それはなんとも、形容しがたいコトがありました」

「？」

覗きをしたから鬼が怒って、お仕置きを受けました、なんて、かつこ悪くて言えない。

「それより、体調は悪くない？頭痛、吐き気、眩暈なんかおこしてない？」

「別にないですよ？」

急によそよしく聞いてくる先輩。いったいどうしたんだろう？

「そ、そう。ないのなら別にいいわ。治療は終わったからもう帰っていいわよ」

疑問を残したままだがオレは弥生さんに別れを告げて、病室を後にした。

携帯の時計を見ると、時刻は午後8時。

さすがに晩飯を作る気にはなれないな。

それより、部屋に入れるかが問題だが。

そうだ、このままあの狼の様子でも見に行ってみようかな？

マスターズ  
教務科からは担当の獣医に話はいってるはずなので直接行っても大丈夫だろう。

事前に聞いておいた部屋まで行き、ネームプレートを確認すると、  
「宗宮つぐみ」と書かれていた。

おお、ここだここだ。

たしか、武偵校には獣医が3人ぐらいしかいないんだっけか？

なかでも、今年1年で入ってきた彼女、宗宮つぐみはなかなか優秀な人らしい。

1年でありながら個室を与えられるほどにな。

ちなみに、短所はキンジと同じネクラなせいであまり人と交流を持たないらしい。

たぶん、会話なんて成り立たなそうなので、こうして、事前に調べておいたのだ。

相手のことを少しは知っておくと話しやすいからな。

コンコンっ。

ノックの後、少し低い声で「どうぞ」と短い応答があった。

「失礼しまーす」

と、いいながらドアを押して開けようとするがなかなか開かない。

ア、アレ？なんで開かないんだ。



四苦八苦していると、ドアがガラガラとスライドして開いた。

あ、横にスライドさせるやつなのね。

ドアが開いてまず初めに見えたのは、

「レ、レキ！？……さん」

そこには、オレの信仰神レキサマがいらっしやられた。

しかし、レキはオレのことを見ると何も言わず部屋の隅に備え付けられているイスに座った。

とりあえず、レキとは後でかまってあげるとして、今は実務に取り掛かるとしますか。

「マスターズ教務科から連絡がいったと思うけど、オレは桜野フブキ、この事件を担当することになった」

「宗宮つぐみ」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ハイっ！！終わったー！！帰る帰る。

お、落ち着けオレ、まだ自己紹介しただけじゃないか。

「えーっと、それでさ、そのサーカスハクイオオカミだけど……」

「コーカサスハクギンオオカミです」

……やべ、普通に間違えた。

「そうそう、コーカサスオオカブト」

「わざとやってません？」

むむむ、やはりキンジ並みのツツコみは襲ってこないか。

「ごめんごめん、まじめにやるよ」

で、狼についていろいろ聞きました。

「ふーん。で、この狼の処遇なんだが……」

「それでしたら、私が飼います」

いままで、全く言葉を発しなかったレキがなにを血迷ったかコイツを飼うなんて言い出した。

「しょ、正気かよ？つうか、寮ってペット禁止なんじゃ……」

「でしたら、武偵犬ということにします」

「結局犬扱いかよ」

『人に犬扱いされるとは何とも言い難いものだな』

「お前も大変だな」

『お前みたいな変態に同情されたくはないがな』

「だれが変態だー!」

「……桜野さん、誰と話しているんですか？」

「は？」

そういえば、今聞こえた声って妙にハスキーな声で聞こえたような。

この部屋の中でそんな声でしゃべるような奴はいないよな。

……………。

「レキさん、武偵犬についてはわたしがマスターズ教務科に申請しておきます」

レキは黙って小さくうなずいた。

「それから、桜野さん」

「えっ、あ、はい、なんでしょう」

妙に焦っていたため気のない返事をしてしまった。

「知り合いに腕のいい精神科医がいます。紹介状を出しますから後日訪ねてください」

「別に精神は病やんでねえよ!」

「ですが、幻聴が聞こえるとなるとやはり疲れているか、病気だと思います」

「そ、そう！！疲れてるんだよ！！朝からいろいろあったからね！！」

『覗きがなに言っただけだ』

「うるせえよ！！オレは覗きたくてあそこにいたわけじゃねえ！！」

「やはり、精神科と整形外科に行くことをお勧めします」

「大丈夫だから！！別に狂ったわけじゃないよ！！それとさりげなくに増やしてやがる！！オレの顔が気持ち悪いのか！？」

「フブキさん、私は失礼します」

「あ、うん、また今度。……って、このタイミングで退室！？せめて、オレが正常であることを証明してからにしようよ！！」

だが、聞く耳を持たず、さっさと出て行ってしまった。

「変な誤解されたまま帰られたああああ！！」

「早く帰って、残り数か月の人生を楽しんだ方がいいんじゃないですか？」

「えっ！？オレもう死ぬの？現代医療じゃ処置できないような病気なの？」

「来世ではわたしの前には現れないくださいね」

「無駄にカワイイ笑顔でさらっとひどいと言いますね!!」

「……そういつて、数々の女の子を墜としてきたんですね」

「へっ？落とす？どこに？」

「なんでもないです」

『ものすごい鈍感男なんだな』

こいつらがなにを言ってるのか全くわからなかった。

「ていうか、聞いてくれ!!コイツ!!この狼から声がするんだ!!」

『人を指さして、コイツ呼ばわりするな』

なになが「人」だ。

「はつきり言っただけ信じられません。動物の言語を理解できるなど」

「でも現にコイツがなにをいってるかわかるんだよ!!」

『さつきかウルサイぞ。変態覗き魔』

「誰が変態覗き魔だ!!」

「あなたの言うことは信じてもいいかもしれませんが」

「え！？今ので信じちゃうの？」

「どっちにしろ、また明日来てください。この子のこともありますから」

と、いうことで今日はお開きになった。

それにしても、つぐみちゃん、めちゃくちゃ腹黒い子だったな。

## リザルト・C

翌日

オレはとある武偵について調べるためマスターズ教務科に来ていた。

とある武偵とは、弥生さんのことだ。

杉田弥生。

アンビュラス  
救護科3年のAランク武偵。

彼女は主に薬学について勉強、研究している。

多くの薬を開発する天才薬剤師といわれているが、開発した薬の半分が失敗作であるためAランク止まりだそうだ。

「初めて会った日に、謎の薬を飲まれたんだよなあ」

飲む前に書かされたサイン。

あれは誓約書だったんじゃないだろうか。

オレは知らない間にモルモットにされていたようだ。

その日、2回目の会合時、頭痛や吐き気をもよおしてないか聞かれたが、あれはおそらく、薬の副作用の懸念があったからだろう。

以上、マスターズ教務科で集めた資料を元にして、オレが考えた推測でした。

オレの推理の的中率は13%と探偵科中最下位の成績だが、さすがにこの推理には自信がある。

だけれど、なぜオレなんかで試したんだ？

今じゃ薬の実験体なんてやる人間が少ないだろうが、わざわざ人を騙してまで実験させたかった意味が解らない。

そんな犯罪的なことをするメリットがない。

デメリット、リスクの方が大きい気がする。

なぜ……？

「おっ、桜野じゃないか。どうした、こんなところ」

「ん？ああ、あんたか」

この人は、山吹先生。やまふき

よく、オレに絡んでくる人だ。

そして、この人がオレにニュートラル制度を勧めた人でもある。

今も、オレのニュートラル制度の担当教師である。

「そうだ、杉田弥生って、知ってますか？」

「ああ、あいつな。知ってるよ。つい最近話したしな」



「えっ！？そうなんスか？」

「ああ。薬のいい実験体がないか？って聞いてきたから、お前を紹介したぞ」

「あんたのせいかなぁああ！！」

山吹先生は情報科インフォルマの教師だ。

弥生さんはなかなか実験体になってくれる人間が見つからないため、情報科インフォルマではかなりの情報通である山吹先生にいい実験体を見つけくれるよう依頼に来たそうだ。

それで、この山吹先生、ニュートラルのオレなら、なにがあっても大丈夫だからと勝手にオレを実験体にしてもいいように許可をだしたらしい。

迷惑な話だ。

「知っているぞ、桜野」

「何をっスか」

「お前最近金に困ってるそうだな」

5年ぶりにあつた、金持ちの友人みたいなことを言い出した。

「どこで聞いたか知りませんが、先生には関係ないっすよ」

なんで人のお財布事情知ってんだよ。

「月の支給金だけじゃ、厳しいんじゃないのかあ？」

実に憎たらしい顔で聞いてきた。

「だったら、もっと貰える額増やしてくださいよ」

ニュートラル制度にはメリットもあれば、デメリットもある。

この制度をつけていると、なんと任務クエストを受けられないのだ。

任務クエストが受けられなければ、報酬がでない。

だから、月に決まった額、2万5千円を貰っていた。

「それはムリだ。規則で決まった額だからな」

「ケチ」

「私のせいじゃないんだが……。だから、杉田にお前のことを紹介したんだ」

「？」

「実験体やモニターになれば報酬金が貰える。お前にとっちゃ悪くない話しだと思っぞ」

だからって、オレの了解なしですることじゃないだろう。

教師の傲慢に不満を抱きながらも、とりあえず、マスターズ教務科を後にしたオレ。

その足でアンビュランス救護科に向かった。

もちろん、弥生さんに会いではなく、つぐみちゃん＆狼に会いだ。

「邪魔するぜいつ」

部屋にはいると、つぐみちゃんは昨日の狼ではなく他の犬を診ていた。

「邪魔をするなら帰ってください」

会ってそうそう冷たい一言をいただいた。

「えっ、あっ、いや、別に言葉通りの意味じゃなくって、その……邪魔はしないので部屋にいさせてください」

「土下座してくれたら考えなくもないです」

「冗談いつてすみませんでしたー!!」

追い出されたら狼の後処理ができなくなる。

ここは恥をしのんで土下座するしかなかった。

「気持ち悪いので、やっぱ帰ってください」

「オレの土下座を返せ!!」

なんなんだこの子は。

人をいじってそんなに楽しいか!!

「昨日の狼なら、今朝、レキさんが引き取りましたよ」

「そうなの?じゃあ、ムダ足だったかなあ?」

「ムッ、そんなことないです。コレを教務科<sup>マスタース</sup>に提出しといてください」

渡された書類には、狼事件の事の顛末と、レキの武偵犬の要請だった。

「あいよ。ところで、その犬はどつか悪いの？」

「……春休みの間からわたしが預かっている子なんです。前足が弱い子なんです。……終わったよ。フフ、今日は調子がいいみたいだね」

わんこの治療が終わったみたいで、その子に笑顔で語りかけていたつぐみちゃん。

オレに対しても、あれぐらい優しくしてくれたらいいのに。

『いつもありがとう、おねえちゃん』

今のは、あの犬の声か。

やっぱりこの能力は夢じゃなかったんだな。

「あら、まだいたんですか？てつきり、消滅したと思っていたのに」

「オレはつぐみちゃんの心理が読めないよ」

「……ちゃん付けで呼ぶのやめてもらえませんか？あなたに呼ばれると寒気がするので」

「なんか、涙でてきたなあ。じゃあなんて呼べばいいの？女王様？」

「普通に呼び捨てでいいですから」

「わかったよ。じゃあ、つぐみ」

「……早く行ってください!!」

ええっ!!

結局、追い出されてしまった。

早く<sup>マスターズ</sup>教務科行って帰ろ。

## 華麗なる刺客

自宅にて

「あかりちゃん……そろそろ入れるよ」

「ひゃっ！だ、ダメですよフブキさん！！入れないで………くださいよ」

「えっ？でも、入れていいってあかりちゃんがいったんじゃないか」

「言いましたけど……でも………でしたら、せめて………つけてくださいよ」

「大丈夫。もしもの時はオレが責任もつから」

すると、突如リビングのドアが、バタンと開く。

「あ、ああああんたら何やって………！！」

ずかずかと声を荒げながら入ってきたのは、顔を真っ赤にしたアリアだった。

「なに？って、カレー作ってんだけど？」

「カレー！？で、でもさっきあんたたち、入れるとかつけるとかって……」

アリアがなにを勘違いしてるかわからなかった。

あかりちゃんの顔を見たが、彼女もよくわからない顔をしていた。

「お前が何を勘違いしてるかわからんが、オレは最初あかりちゃんにカレーにもっとスパイスを“入れて”いいか聞いたんだぞ？」

「へ？そうなの？」

「そうですよ、アリア先輩。で、入れすぎると辛いからあたしは“入れないで”と止めたんです」

「でもあかりちゃん、最初に好きなだけ入れていいって言ったじゃないか」

「でも、限度つてものがあるでしょ！！」

「えーっと……それで、せめてつけてくださいってのは……」

「ああ、福神漬けのことです。フブキさん、自分が嫌いだからって出そうとしないんですよ。せっかく買ってきたのに」

あんなもんがなぜカレーと食べられるか、理解できん。

「はあ、まったく、焦って損したわ」

「アリア先輩、一体何を焦ってたんですか？」

「な、なんでもないわよ」

そう言って、ソファアにグデンっ、と寝っころがったちみっこ。



おい、少しは手伝えよ。

まったく。

アリアは前に味噌汁を作つて以来、毎日料理を手伝つてくれた。

だが、味噌汁しか作ろうとしないから、はたして、それは手伝っていると言えるのだろうか。

「そういえば、ののかちゃんは？」

「今日は、友達の家泊まるそうです」

「んー、残念。会いたかったのになあ」

ののかちゃんとは、またの機会に。

「にしても、フブキ。このカレーやけに辛いな」

「ああ、ホントはもっと辛くしたかったんだが、あかりちゃんに待たをかけられてさ」

「あんなキチ外な量を入れるなんて、ありえません」

「間宮も大変だな」

「そう思っただら、遠山先輩がしっかり見張つといてくださいよ」

「それができれば苦労せん」

「ですよ〜」

「捕まっちゃまえ、このロリコン野郎!!」

「今関係ねえだろ」

この感覚も久しぶりな気がするなあ。

前、4人での朝飯の時はヒドかったからなあ。

「ん?どうした、アリア?」

キンジが、アリアの食が全然進んでないことに気がついた。

「えっ?ああ、なんでもないわ!!」

「もしかして、辛いダメでしたか?フブキさんのせいですからね」

「ちよっ!?!なんでもかんでもオレのせいにしないでよ!!」

だが、アリアって、別にキレイなものとかなさそうなのになあ。

「別に大丈夫よ！！これぐらいなんともないわ！！」

そう言つて、何回か口にカレーを運ぶ。

「ほらね」

見た感じ、特に問題ないなさそうだった。

「さすが、アリアだ！！なんともないぜ！！」

とりあえず、気にしないで、再び場を盛り上げることにいそしんだ。

「にしても、夜はちいーつとばかり、肌寒いね」

「そうですね」

食後に、アイスでも食べようかということになり、近所のコンビニに買い出しに出たオレとあかりちゃん。

ちなみに、アリアはももまんがご所望だった。

「なんであんな甘いのが好きなんかねえ」

「いいじゃないですか。好みは、人それぞれですよ」

そりゃそうだ。

コンビニへ行く前に、散歩しようと夜の道を歩いているオレたち。

夜の月が明かりに照らされて、ロマンチックな展開に……。

「隣に歩いている人が、こんな変人じゃなければそうだったかもしれないがね」

皮肉混じりに、そんなことを言ってきた。

「そう!!こんなちびっ子変人じゃなければ……!!」

「フブキさんのことです!!」

オレとあかりちゃんじゃ、ロマンチックなんて一生やってこないだろう。

なんて、いつもみたいに漫才をやっていると前方に見慣れない、全身黒で染まった人が現れた。

知り合いじゃないっぽいので、スルーしようとしたが、

「桜野フブキ。貴様を、拘束する」

!?

オレはバックステップで、そいつから距離をとった。

「だれだ、お前」

「会つのは2度目だが、覚えてないのもムリはないか」

2度目？

「一昨日の晩もここで会ったぞ」

一昨日！？

なぜだ！？まったく、思い出せない。

「だから！！お前は、だれなんだよ！！」

「我が名は、光秀」

そう言つて、奴は腰にぶら下げていた刀を抜いた。

## 凡人たちの秘めたる力

現在、光秀と言うやつにからまれている。

からまれている、と言ったがコイツは別にヤンキーといった類のやつじゃなさそうだ。

じゃあだれかって？

そうだな……将来、活躍する人間を消すために未来から派遣された、暗殺者……とか？

それじゃあ、どこのターミネーターだよ。

……わかってるよ、つまんねえ現実逃避をしちまっている。

正直、ビビッてどうしたらいいのかわかんねえんだ。

とりあえず時間を稼ごう。

「一昨日の夜って、オレは特に何も変わらない日常を送ったはずだが？」

時間稼ぎ、アンド疑問解決を狙う。

「ホントに覚えてないのか？ まあ無理もないか、殺されかけて、ビビッて逃げ出したんだからな。シヨックでその時の出来事だけ記憶から消えたんだろう」

アイツがしゃべっている間に、オレはあかりちゃんに左手の親指と小指を立てて手首を何度も曲げて、ジェスチャーを送る。

要は『電話しろ』ってことだな。

「……そういえば、なんとなくだがい思い出してきたなあ」

あかりちゃんはオレの意図に気づいたのか、ちいさくうなずき、携帯を取り出していた。

ホントはもっと武偵らしいジェスチャーがあるのだが（目蓋の瞬きで伝える『ウインキング』と言うやつ）、そんなことはできないので今回は手で伝える。

「たっしか、女の子を一人、家まで送り届けた帰りだったか？」

おい、あかりちゃん。電話するならもうすこし気づかれないようにしろ。もろバレじゃないか。

だが、アイツは電話を妨害しようとはしないのな。

応援を呼ばれても問題ないとか？ それ以外か？

「その時にこの刀を抜き、構えただけでお前はビビッて逃げたんだ。それはもう滑稽な姿だった」

オレがビビッて逃げた？

「フブキさん！！ 大変です！！」

「お前はもう少し慎重に動け！！ で、どうした！？」

「アリア先輩に電話したんですが、全く電話が繋がらなくて……」

「つながらない……？ いったいどうして……」

「くっくくくく」

突然、意味深に笑う光秀とかいうやつ。

「なんだ、急に」

「アンテナをしてみる」

「アンテナ……？ なっ！？」

オレはポケットから携帯を取り出し、ディスプレイのアンテナの部分を見るとそこには無情にも圏外の字が。

「気づいたか？ この絶望的状况に。貴様らの信頼している神崎・H・アリアは来ない。そして、この辺りはこの時間、人が全く通らない。故に、助けは望めない。お前たちはここで私に敗北するのだ」

「ぺらぺら、よく喋るやつだぜ」

「ですが、どうしますか？ このままじゃあたしたち、この人にやられますよ……！」

「決まってる……！ ……三十六計逃げるにしかず」



フブキたちは逃げ出した。

しかし、回り込まれてしまった!!

「逃がすわけがないだろう? 何人<sup>なんびと</sup>たりともこの我、  
『<sup>ファーストラビット</sup>神速』から  
は逃れられん」

『<sup>ファーストラビット</sup>神速』だあ?

かつこいいじゃないか。

なんて言ってる場合か!!

「やるしかねえのか……」

右手で腰のホルスターからガバメントを抜く。

左手で右の胸元のナイフカバーからファイティングナイフを抜く。

「おとなしく降参すれば良いものを」

はじめは相手の動きを見る。

相手がどう動くかで立ち回りが変わってくる。

と、というのが強襲<sup>アサルト</sup>科の教科書に載っているもの。

現実<sup>リアリティ</sup>は教科書通りにはいかないさ。

「こないなら、先に……行くぞ!!」

そう言つて、相手が動き出したかと思つたらあいつがいつの間にか消えていた。

「どこを見ている」

やつが消えたとは認識した時には遅かった。

すでに近くまで迫られており、気づいたときはすでにやつは刀を構えていた。

「ちっ!!」

バックステップ、いや上体を反らすか……!?

「遅い!!」

オレが回避方法で迷っている隙に、やつの刀が振り下ろされる。

と同時に、オレはバックステップで回避行動をとる。

しかし、わずかに回避が遅れたため……、

「ぐっ……!？」

右腕を切られてしまう。

そして、切られたことによる痛みが脳を刺激する。

「フブキさん!!」

「遅いな。その速さでは我には勝てない」

「うつせよ……！……ちっきしょう……。かつこつけやがって……」  
まずい。

あんな、はえーやつに勝てるわけがない。

なら、いつものように精神攻撃か？

残念だが痛みであまり頭が回らない。

少し、深く切られたか……？

こんな痛みは初めて味わうぞ。

「おとなしく投降しろ」

「だれが……そんなことを……」

はじめてだ。

命の危機ってやつを味わうのは。

1年の頃、自分がどれだけぬるい任務クエストをやっていたのかを実感させられる。

このままやつの言うように投降するか？

幸いにも命までは取らないらしいからな。

「フブキさん!!」

ふざけんなよ。

こんなところであきらめて、敵に投降だと？

オレはやつに目を向けた。

「フンっ、これだけ力の差を見せつけられてまだ抵抗する意思を向けるか」

そしてやつは、オレの前まで近づき刀を振り上げた。

「安心しろ、少し眠っていてもらっただけだ」

このまま、やられるかよ。

考えろ、なにか突破口があるはずだ……!!

ズガガガン!!

突如、数発の発砲音。

それは、あかりちゃんの持つマイクロUZIが発したもので、銃口は光秀に向けられていた。

光秀は刀を振り下ろすのをやめ、向かってきた弾丸を素早くはじいた。

「フブキさんから、離れてください!!」

すでに、半泣きになりながらも愛銃は光秀に向けられたまま。

彼女の勇気にオレは助けられた。

「小娘、銃を抜き、我を撃つたということはどういうことかわかっているのか？」

そう言つて、光秀は改めてあかりちゃんの方を向き直り、

「それは、我に殺されても文句は言えんのだぞ!!」

素早い速さで、あかりちゃんに突っ込む光秀。

「あかりちゃん、逃げ……!!」

すぐに射撃体勢に移ろうとするも、右手は切られて使えず。

このままじゃあかりちゃんが……!!

だが、再び驚愕する出来事が起こった。

突っ込んだ光秀とあかりちゃんがすれ違った。

すれ違いざまにあかりちゃんがなんと、光秀の刀を奪ったのだ!!

一瞬の出来事で何が起こったかはわからなかったが、とにかく今は刀を奪ったあかりちゃんと、刀を奪われたことに驚愕している光秀

の姿が。

「小娘、何をした……!!?」

「そう簡単にやられませんよ!!」

刀の柄を持った後、べーっ、と舌を出すあかりちゃん。

あの子、あんなことできるのか。

「小癪な真似を……!!」

懷から、小太刀を出しあかりちゃんに迫る秀吉。

今度はオレが助けるんだ。

痛む右手に鞭打って、何とかガバメントを構える。

”集中しろ”……!!

すると、急にやつの動きが遅く感じられた。

さらに、不思議と右手の痛みも治まっている……?

これならいける。

やつの動きを予測して……撃つ!!

狙いはやつの小太刀だ!!

ズガン！！ ガキンっ！！

撃った弾は見事小太刀に命中。

「くっ！？ ここは退くが得策か」

そう言って、やつはどこかへ逃げていった。

傷ついて……キズついて……

「疲れた……」

正直、なにがなんだかさっぱりだ。

とりあえず、落ち着いて考えたい。

でも、右腕切られちゃったしなあ。

救急車呼ぶか。

「……電話使えねえじゃん」

ディスプレイには未だ、圏外の2文字が。

たぶん、ここら一体に妨害電波が出ているんだろう。

たぶんだぞ！？ 間違ってもオレのせいじゃねえから！？

ここからだアシビュラスと救護科より病院まで歩いて行った方が近いか。

「ほら、あかりちゃん。行くよ。」

「フブキさん！！腕の方は！？」

「大丈夫。こんなんつばでもつけときゃ治るっしょ」

「だ、だめですよ！！ちゃんと病院行かなきゃ！！」



「わかってる。でも、電話使えないから一旦家に帰るよ。それとも、その刀病院まで持っていくの？」

「え？うわあああ！！！」

ポトンッと刀を落とすあかりちゃん。

危ないなあ。

刀と小太刀を拾って、家へと戻るオレたちであった。

「我が家よ！！私は帰ってk……」

「うるさいです！！！」

一度家へ戻り救急車を呼んだオレたち。

病院へ行き、医者に見せると「どうしてこうなった」と当然聞かれた。

オレはとりあえず「この子が包丁で誤って右腕を切りました」ということにした。

確実に不信がつていた先生。

ここはオレたち二人のニコニコ笑顔でごまかそうとしたが、余計不信がられる結果に。

なんとか取り繕い、再び我が家へ帰ってきた。

しかし、部屋にはだれもおらず、オレたち二人だけだった。

なんとなく部屋の電気はつけずオレたちはリビングで呆けていた。

オレは壁を背に床に座り込み、あかりちゃんはソファに座っている。

それにしても、さっきのことが夢のように感じられていた。

突然、オレを襲う刺客が現れ、オレも、あかりちゃんも命の危機に……。

しかし、夢じゃないことはこの右腕が証明している。

ソファを見るとあかりちゃんは眠ったようだ。

テーブルの上にはあかりちゃんの持ち物である携帯と愛銃、さっきやつから奪った刀と小太刀が置いてあった。

ブーっ、ブーっ。

ちびっ子の観察をしていると、突如2人の携帯からバイブが鳴る。

テーブルの上に置いてあった携帯がなかったので、あかりちゃんが起きないか警戒したが、どうやら爆睡しているみたいだ。

携帯を開くとメールが届いていた。

マスターズ  
教務科からの周知メールか……？

時刻は午後10時、決して夜遅いというほどの時間ではないがこんな時間にメールが届くのは珍しかった。

疑問に思いながらもメール内容を確認すると、内容は近くで事件が起きたようだ。

事件はバスジャック事件で車内には数十人の武偵がいたらしい。

車内には犯人はおらず、爆弾で運転手を脅迫。

もしかして、前にキンジを襲った武偵殺しか？

手口が似ているのでその可能性は高いな。

続きを読むと、その事件は複数人の武偵でひとまず解決したようだ。

名前は載っていなかったが、アサルト強襲科2年のSランク武偵と書いてある。

これは絶対アリアだな。

それで部屋に誰もいなかったのか。

キンジも約束があったから付き合った……というより付き合いざるをえなかった、か。

「よかったじゃねえか、解決できて」

そのまま、眠りについた。

「おい、起きろフブキ……!!」

だれかに肩をゆすられ起こされる。

寝ぼけながらもオレを起こした人物に目を向けた。

「あれ？ キンジ、帰ってきたのか」

「まったく、こんなところで寝やがって。俺たちが大変な時に騒いでたんだろ」

「やっぱりさっきのメールはキンジ達だったか。電気はつけんなよ。あかりちゃん寝てるから」

も、理由のひとつだが電気をつけなかったのはテーブルの上にある刀などを見られなくなかったため。

右腕は包帯を巻いているが上にシャツを着ているからバレないだろう。

「ところで、アリアは？　一緒じゃないのか？」

「そのことなんだが……実は事件の最中に俺をかばってケガを……」

かなり気落ちしていたキンジ。

自分のせいでアリアケガをさせてしまったと思っているから、ムリもないだろう。

ゆっくりながらもキンジが話す事件の内容に、オレは黙って聞いていた。

「さつき、医者に聞いたんだが……アリアは額に傷をつけちゃったんだ。一生消えない跡が残るらしい」

「そっか。でも、落ち込んだってしゃーねえだろ。アリアはお前と約束してたんだろ？　『ピンチになるようだったら、あたしが守ってあげるわ』って」

キンジとアリアはその

その約束を、アリアは守ったんだ。

「別に死んだわけじゃないんだからそんな辛気臭い顔すんなって。明日、一緒に見舞い行こうや」

「悪いな」

「いって。さっさとシャワー浴びてこい!!」

「ああ」

そう言って、キンジはバスルームへ行った。

その間に刀を隠しとかないとな。

オレの部屋に置いとくか。

翌日

オレはキンジと二人でアリアがいる病院まで来た。

「間宮は呼ばなかったのか？」

「いやー、さすがに呼べないっしょ。アリアがケガしたって聞いた  
ら、泣き出しそうだよ？ あの子」

ただでさえ、昨日のことがあるから呼べないよ。

あかりちゃんは一とまず家に帰した。

昨日のことはだれにも言わないように釘を刺して。

アリアの病室まで来た俺たち。

それにしてもすごいな。

VIP用の個室だよ。

2ちゃんネタができるな。

VIPからきますた。

って、なにバカなこと考えてんだよ。

室内には小さなロビーがあり、そこに『レキより』と書かれたカー  
ドのついた白百合カサブランカが飾られていた。

そういえば、レキも事件にあたってたんだっとな。

昨日、キンジに聞いた。

にしてもカサブランカか。

花言葉は『雄大な愛、威厳、高貴』だったかな。

高貴という言葉が合うかな？

アリアはどこぞの貴族らしいし。

……パッチン……パッチン。

「「？」」

少しかだけ開いていたベッドルームから二人で覗くと、アリアは手鏡で額の傷を見ていた。

キンジに聞いた話によると、アリアの傷は浅かったらしい。

アリアを襲った銃弾は2発で、両方ともアリアの額をかすめただけで重傷にはいたらなかったそう。

オレは見舞いに持ってきていたももまんをキンジに渡し、ジェスチヤーで「行けよ」と送った。

キンジの表情がいかにも嫌そうにしていた。

「オレ一人でかよっ！？」とか思ってるんだろうな。

オレはロビーのソファに座って少し待つことにしよう。



## オレと俺の過去

神奈川武偵高付属中にオレが転入してきてすぐの出来事だ。

隣の席に座っていたのが偶然キンジで、ネクラなキンジにオレは積極的に話しかけたのだ。

なんだかんだ仲良くなり、よくつるむようになってからオレはキンジの持つあれを知った。

「ヒステリアモード？」

「そうだ。この特性を持つ人間は、一定量以上の……」

ナルホド、わからん。

よくわからない単語のオンパレードだった。

一般の中学から来たばっかのオレにはなにがなんだか……。

「……ようするに“性的に興奮すると”、一時的にだが人が変わったようなスーパーモードになれるんだ」

「それと女子にパシられるのと同じような関係があるんだ？」

よく休み時間に女子に頼まれ制裁をくわえているらしい。

初めは目を疑ったね。

あのキンジが、よくセクハラをする教師をフルボッコにしてんだから。

影からこっそり見てたのがキンジにバレたときはもう、オレ涙目でしたよ。

「実は、ヒステリアモードになるとな、女子の前じゃ……その……キザな態度をとっちゃまうんだ……」

なぜかというと、ヒステリアモードの大本にある『子孫を残すための本能が働いて、女にとって魅力的な男を演じてしまうということらしい。

なんともまあ、諸刃の剣というかなんというか。

「ヒステリアモードの俺は、女子に優しく接するわ、誉めるわ、慰めるわ、さりげなく触るわ、ああ、思い出すだけで死にたくなる……」

「大変なんだね、キンジも。わかるよその気持ち。オレも女に苦しめられたことがあるからね」

「おお、わかってくれるか!」

こういったことがあったため、今のオレとキンジがいるのだ。

もし、キンジのヒステリアモードのことを知らないままだったら今みたいに仲良くなれたりはしなかっただろう。

たぶん、東京武偵校に行こうとも思わなかったはずだ。

「桜野くん！！好きです、私と付き合って！！」

時は変わって7月。

人々の体力を奪う殺人光線を放つ太陽の下。

オレは女子に告られていた。

「ごめんね。キミと付き合うことはできないんだ」

普段は仲むつまじいカップルを見て「リア充爆発しろ」とか言っているのだが、実は極たまに告られることはあったりする。

その時は全て丁重にお断りしている。

「どうして！？他に好きな人でも……やっぱりキンジと……！？」

断った相手が皆、口を揃えてこう言っただが。

どうしてそうなる。

「あははは……それはないよ。でも、好きな人がいるのはホント。前の学校にいたときの同級生」

そして、2、3、話をして終わり。

その後は少し罪悪感を持ちながら教室へ帰還する。

教室へ戻るとクラスの男どもが、

「またフブキかよ」 「なんでフブキばかり!？」

「女をおとすテクニクがあるんだろ!? 教える!!」 「弟子にしてください!!」

なんて言ってくるやつらを適当にあしらいキンジのもとへ。

「まったく、今月は3人目だろ？」

「そ。数人だけだけどなんでオレなんかと付き合おうとするんだろ？」

「……ホントはもつというけどな」

「ん? なにか言った？」

「いいや、別に。それよりお前、進路はどうすんだ? このまま神奈川残んのか？」

「キンジは東京行くんでしょ? だったらオレも行こうかな」

「そんな適当に決めていいのかよ」

「人生どうなるかはわかんないっしょ。“テキトー”に選んだものが、正に“適当”だったかもしれないしね」

「なんだそりゃ」

この頃のオレは人生を樂觀視し過ぎていた。

まだ、子供だったから。

好きなように生きるとはとても難しいことだと知らなかった。

オレがまだ未熟だったから。

しかし、東京武偵校に来たことは後悔していない。

ここを選んだのはテキトーだったさ。

でも、この場所はオレにとっては適当な場所だった。

それだけはわかった。

## ドレイ

「また、あの時みたい、実力を見せてくれると思ったのに!!」

アリアの怒声で目を覚ました。

ロビーのソファで座って待っていると、いつのまにかねむってしまったようだ。

なんか、懐かしいような夢を見ていた気がしたが……忘れたな。

「……お前が勝手に期待したんだろ!!俺にそんな実力はない!!」

何で二人つきりになるといつもケンカするんだろうね……。

コーヒーでも買ってこようかな。

自販機からお気に入りのコーヒーを買って戻ってくると、VIPルームの前に見知らぬ女性がいた。

といっても、歳はオレと同じぐらいかな。

その人はかわいいというより、美しい女性だった。

黒い髪はショートにしており、服装は黒いワンピースで壁に寄りか

かつて、腕を組み中の様子を見ていた。

なんとなく、わざとらしく足音をたてながら近づくとその人はオレに気づき、するとどこかへ行ってしまった。

ダレ？ とか、なに用？ とかいろいろ疑問を持ったが考えても仕方がないので気にしないことにした。

ロビーに戻るとあの二人はまだ言い争っているようだ。

もしかして、さっきの女子はたまたま通りかかって、言い争いが聞こえたから、それを聞いていたんじゃないだろうか。

だとしたら、なんて恥ずかしい奴らなんだ。

「あたしが探していたのは……あんたじゃなかったんだわ」

聞こえてきたその言葉。

少しの間を置いた後の言葉は、まるで物語にピリオドを打つかのようだった。

たぶん、その物語はアリアにとって文章にはいけないものだっただろうな。

それから、少ししてキンジが病室から出てきた。

その表情は、怒っているような何とも言えない表情だった。

それからキンジはオレに「先に帰ってる」と小声で言い残し、帰っ

て行つた。

オレはどうしようかな。

このまま病室に入つて行つても、空気読めないやつみたいだし。

それを承知で中に入るか？

それとも、帰るか？

「フブキいるんでしょ？入ってきたら？」

どうやら、アリアさんにはオレがいることはバレていたらしい。

「おじゃマンb……おじゃまします……」

「言い直すんなら言わなきゃいいのに」

なんて言いながら、ベッドの傍らに置いてあるイスを指さしていた。

座れってことか。

「湯加減はどうだ？」

「それをいうなら、おかげんでしょ？ まったく、アンタは相変わらずね」

とりあえず、機嫌はいいらしい。

「キンジに聞いたよ。でこ、けがしたんだって？」



「大丈夫よこんなの。医者が大げさにしてるだけ」

「それなら良かった。すぐ帰ってこれるんだな？キンジとあかりちゃんはあるり食べないから飯も作り甲斐がない」

「あたしは大食い扱いなのね」

「すまん」

少し間が空き、オレたちはくすくす笑った。

「悪いけど、もうアンタたちの部屋には帰れないわ」

「なんで……！？」

「アンタも聞いたでしょ、約束。キンジと1こだけ事件を解決するって」

「そっか、キンジは……」

「まったく、事件現場に連れて行けばあの時の実力を発揮してくれると思っていたのに。まったくダメだったわ」

キンジは『ヒステリアモード』にならなかったんだな。

「それにしても、アンタの料理だけは惜しいわね。どう、フブキ？あたしが日本にいる間だけシェフとしてあたしのドレイにならない？」

「あはは……遠慮しとくよ」

ま、冗談だろうけどな。

それにしても、ドレイ……か。

「一つだけ聞かせてくれないか？どうして、パートナーにこだわるんだ？」

「……いいわ。餞別として教えてあげる」

餞別<sup>せんべつ</sup>って……冥土の土産じゃないだけましか。

それから、アリアは教えてくれた。

母の神崎かなえさんが冤罪で捕まってること。

真犯人を探し出しかねえさんの無実を証明すること。

アリアの家は優秀な相棒と組むことでその能力を飛躍的に伸ばすことができること。

そのためにアリアはパートナーを探しているのだ。

「でも、なんでかなえさんばかりに罪をなすりつけたんだ？」

「……それは教えられないわ」

「どうして？」

「あんたには関係ないからよ。知ったら、危険な目にあうかもしれないでしょ」

危険な目。それを聞いて昨夜のことを思い出す。

もしかして、かなえさんは謎の組織に罪をなすりつけられた？

そして、昨日襲ってきたやつもその組織の仲間だったりするんじゃないだろうか。

アリアのことを知ってるみたいだったし。

「なあ、教えてくれないか？」

「いやよ」

「どうしても？」

「どうしてもよ」

「そいつらの仲間のこと知ってるって言っても？」

「ええ。そうよ……なんですって？」

オレは昨日のことを話した。

「可能性は高いわね」

「まじかよ」

「やつらは能力のある人を集めてるみたいだし、もしかすると」

「でも、なんでオレ？」

「……あほさに定評があるからとか？」

「あほさを評価されたの！？」

んなバカな話があつてたまるか。

「で？ やつらっていったいなんなんだ？」

「やつらの名は……『イ・ウー』よ」

『イ・ウー』ねえ。

しらねえなあ。そりやそうか。

「あたしはやつらを早く逮捕しなくちゃいけないの。そのためにパートナーを探さないといけないの。でも、ほとんどのやつら実力がないからあたしについてこれないの」

そして、話は終わったといわんばかりに部屋を追い出された。

オレは帰る中、一人、つぶやいていた。

「……オレに実力があつたらなあ」

## 休日・風が吹く前

アリアの見舞いに行った日の翌日。

今日は神奈川の実家へ帰っていた。

「どうしたの、急に？ 帰ってくるなんて」

「ん？ まあ、ちょっとな。ズズズ、あー、茶がうめえ」

縁側に座って茶をすすりながら、庭に植えてある一本の桜の木を眺めていた。

我が桜野家では必ず桜の木を植えている。

家は一本だが、祖父母の家にはたくさんの木が植えられているのだ。  
うち

「武偵、辞める気になった？」

ここにいるのはオレの妹、桜野セツナ。

彼女も武偵を目指す一人だ。

今年で中二だったか？

曖昧なのはあまり話したことがなかったからな。

「辞めねえよ、武偵は。せっかくこれからがんばろうって気になったばかりなのに」

妹はオレが武偵になることに、というより、強襲科アサルトでがんばろうと  
しているコトに反対みたいだ。

「ムー、あきらめなよお。私もおにアサルトも強襲科の素質無いんだから  
あ」

ハッキリと言いやがる。

「最初っから諦めてどうすんだよ。オレはやれるだけやるんだ」

「ハア。ホント、頑固だよねえ」

「ほっとけ」

「で？ それ言いにわざわざ帰ってきたの？」

「いんや。ちょっとオヤジの武器を拝借しようかと……」

「そんなことだろうと思った」

そう言うと、セツナはどこかへ行っただ。

緑茶を飲んで待っていると、セツナがかいダンボール箱を持って  
現れた。

「なんだそれ？」

「渡すものがあつたんだ。まずこれ」

そう言つて、手渡してきた物は、フックショットと呼ばれるものだった。

「コレ、母さんの愛用のやつじゃん」

ちなみに、母さんも武偵である。

「使えるようにしといたよ。それから、コレ。私の自信作で〜す」

妹はこうみえて、装備科の武偵を目指しているのだ。

「ローラー  
回転車輪？」

「足に鉤爪を付けるやつ携帯してるでしょ？　その回転車輪バー  
ジョン」

ようするに、これを靴につければ、ローラースケートできるって事か。

「他にもたくさんあるよ！！」

ダンボールの中をのぞくと、銃やいろいろなパーツ、何に使うのか全くわからないものまである。

「悪いけど、郵送で送ってくれない？」

こんなの持つて帰れるか。

「いいよ。また、なにかあったら電話してね。ていうか、なにものなくても電話してよ！！　１年間全く音沙汰無しって信じられないよ

「!」

「ごもつともである。」

駅を降りて家まで歩いて帰っていると、レキとオオカミさんに会った。

「ようレキ。ホントに飼っちゃったんだな」

今はたぶんお散歩中なんだろう。

「はい。ハイマキといいます」

『よろしくな、兄ちゃん』

この設定、生きてたんだ。

とりあえず、ハイマキの頭をなでてやった。

「急いで帰った方がいいぞ。もうすぐ雨が降るだろうからさ」

「今、帰ってる途中です」

あ、そうすか。



「……風が言っています。もうすぐ、あなた達にによくないことが  
おこる」

「風？　そういえば、風も少し出てきたな」

「……………」

突然レキが歩き出した。

あれ？　もうからみ終わり？

『兄ちゃん、主の助言は素直に聞いとくべきだぜ』

「主ってレキのことか？　ていうか、風がどうのこうのって言うて  
たが、助言だったのか？」

『兄ちゃんはもうちょっと人の気持ちを考えた方がいいな』

「お前は犬っコロのくせに人の気持ちがわかるのか？」

『人の気持ちなんてだれであろうとわからないが、外から見れば見  
えてくるものもあるさ』

ハイマキはそう言って走ってった。

オオカミのくせに生意気なコトを言いやがる。

……人の気持ちねえ。

レキと別れた後、自宅に帰ってきてすぐに雨が降り出した。

危ないところだったぜ。

そういえば、アリアとキンジはなにしてんだろうな。

アリアは退院して、たぶんこっちの家には帰らないだろう。

キンジとケンカしてたし。

キンジは傘持ってたかな。

なんてコトを考えながら、いつの間にか寝てしまった俺だった。

休日・風が吹く前（後書き）

急いで書いたから文章が雑に……あれ？  
いつもと変わらない？

そして彼は走り出す

東京が強風に見舞われた週明け。

その日、午前中は一般科目の授業を受けていた。

だが、キンジの右隣、オレから見て右斜め前の席は誰も座っていなかった。

キンジもあまり元気がなかったので、今日はそっとしておいた。

にしても暇だなあ。（授業中だが）

オレは机に頭をひつつけて外を眺めていた。

さすがに暇すぎるので授業中だったがあかりちゃんにメールを送ることにした。

『暇だよ。なんかおもしろいことして』

メールを送ってから1分もしないうちに返事が帰ってきた。

『マナーモードにしてなかったから、先生に怒られちゃったじゃないですか〜』

焦ってるあかりちゃんがめにうかび、クスクスと笑ってしまう。

『アリアが今日来てないんだ。なにか聞いてない?』

そのメールを送ってからしばらく返事が帰ってこなかった。

「授業中にメール送ってこないでくださいよ!!」

あかりちゃんがツツコミに来たのは放課後だった。

わざわざツツコミに来るなんて。

この子将来大物になるで。

芸人として。」

「芸人としては大きくなりたくないです!!」

ついにはオレの地の文までツツコミだした!!」

「声に出てますよ……。それよりフブキさん、アリア先輩から聞いてないんですか？」

「何を？」

「アリア先輩、イギリスに帰っちゃうんですよ」

その言葉を聞いた瞬間オレの中の世界が歪ゆがんだ気がした。

「それ、いつ聞いたんだ!？」

「昨日の夜です。あたし……アリア先輩がいなくなるって聞いてものすごく悲しくて……」

今すぐにも泣き出しそうなあかりちゃん。

気休めにしかないが、頭をなでてあげる。

「……す、すいません……」

「いって。それより、戦姉妹契約はどうした？」  
アミカ

「アリア先輩は解除しようって言ってたんですけど……あたしが解除しないでくれて頼んだんです」

「どうして？ それじゃあ他の人と戦姉妹契約結べないんじゃない？」  
アミカ

「だって、あたしとアリア先輩をつないでるのは戦姉妹だけだから」  
アミカ

「……………」

オレは黙って聞いていた。

「あたしみたいな落ちこぼれじゃあ、アリア先輩とはこの先一生会う機会なんてないです。ですから、せめてなにかでつながっていらればいいと思ったんです。戦姉妹契約を結んでいけば、あたしとアリア先輩はいつまでも姉妹ですから」  
アミカ

最後に「戦姉妹<sup>アミカ</sup>なのは武偵校にいる間だけですけどね」と付け足した。

今の言葉を笑いながら語ってくれたあかりちゃん。

この子は、この子なりに考えている。

じゃあ、オレは？

オレはなにをしたらいい？

決まってる。見送りだ！！

さよならも告げずに勝手にいなくなんなよな。

「アリアはいつ発<sup>た</sup>つて？」

「えっ？ たしか7時に羽田の第2ターミナルって言っていました。見送りはいらなくて言われたんです……」

現在時刻は5時30分。

間に合うな。

「あかりちゃん、オレちよつと行ってくる」

そう言って素早く靴に、昨日妹にもらった回転車輪<sup>ローラー</sup>を取り付ける。

簡易ローラーブレードの完成。

「でしたら先輩あたしの代わりにコレを持ってってください」

手渡されたのはなんとあかりちゃん愛用、マイクロUZI。

代わりに銃持っけて……。

「わ、わかった。持ってくよ」

とりあえず、制服のズボンにさしておくことに。

「それじゃあ行ってくるね」

そしてオレは走り出す。



## フライハイテンション（前書き）

今回はいつも以上にがんばりました

## フライハイテンション

「ぎゃああああー!!」

突如、大地を揺るがすほどの叫びが発声する。

道を歩いていた人々は何事かと目を見張る。

そこにはボロボロになったフブキの姿が。

みなさん、こんにちは。

主人公です。

現在、私は友人に会うために簡易のローラーブレードで全力疾走しております。

このペー<sup>ス</sup>なら余裕で間に合うな、と軽快に走っていたんですが、突然、回<sup>ローラー</sup>転車輪がぶつ壊れ盛大にすっころびました。

転ぶとき、叫んでしまったのでまわりから奇妙なものを見る目で見られており、非常に恥ずかしい思いをしております。

それにしても、セツナのやつめ。

なにが『どんな衝撃にも耐えられる最高傑作なの!!』だ。

派手にぶっ壊れてんじゃねえか。

ついでに、オレの心もぶっ壊れそうだ。

なんて言ってる場合じゃねえ。

「走って行くしかねえか」

大丈夫。まだ間に合うさ。

やべえ。

途中道を間違え、現在、時刻は7時10分前。

もうすぐ、羽田の第2ターミナルに着くが、もう飛行機乗ってるだろうな。

だが、ここまで来たなら最後まであきらめずにがんばってみるか。

なんて思っていると、前方に見知った背中が。

「キンジー!!」

キンジも走っていた。

「フブキか！？　なんでここに！？」

「アリアの見送りしようと思ったんだけど、途中でいろいろあってこんな時間になっちゃった」

恥ずかしいからなにがあつたかは誰にも言わず墓場まで持っていこう。

「それで、キンジの方は！？」

「まずいことになった。アリアが『武偵殺し』に会っちゃうかもしれないんだ！！」

「なんだって！？」

詳細は後で話すということになり、今はひたすら走ることに専念する。

空港のチェックインを武偵手帳についた徽章きしょうで通り抜け、金属探知機？　なにそれ、おいしいの？　といわんばかりにスルーし、ゲートに飛び込む。

オレたちは息が切れ切れになりながらも、ボーディングブリッジを突っ切り、ハッチが閉じつつある飛行機に文字通り、飛び込んだ。

バタンツ、とオレたちの背後で、ハッチが閉ざされる。

「……武偵だ！！離陸を中止しろっ！！」

息を整えている暇はないとばかりに、キンジは急いで小柄なフライ

トアテナントに、武偵徽章を突きつけた。

「お、お客様！？失礼ですが、ど、どういっ……」

「説明しているヒマはない！！とにかく、この飛行機を止める！！」

「落ち着け、キンジ！！お姉さん、急いで機長さんに止めるよう伝えてくださいー！！」

お姉さんは初めこそビビりまくっていたが、少しばかり落ち着きを取り戻した顔でこくこくうなずき、2階へと駆けていった。

「とりあえず……これで大丈夫だな」

「……ああ」

お姉さんの後を追いかけたかったが、ここまで全力疾走してきたオレたちはその場で息を整えることに。

「まったく、アサルト強襲科を辞めたせいかな、体力が落ちちまってるな」

「インケスタ探偵科になっても、体力ぐらいはつけとけよな。これから毎日ランニングしようぜ」

「考えておくか」

なんて会話をやっていた矢先。

ぐらり。

機体が揺れた。

「なあキンジ。これってひょっとして動いてない？」

「俺の脳が正常なら、神経は揺れを感じ取っているな」

すると、2階に上がっていたお姉さんがバタバタと駆け降りてきた。

「あ、あの……だ、ダメでしたあ。き、規則で、……………」

その後お姉さんが色々言っていたが、ようするに止められなかったようだ。

オレたちはあ然としていた。

「どうしよう、キンジ。拳銃で脅してでも、止めさせる？」

「いや。ダメだ。今のコイツの話によれば機長は俺たちを信用していない。今さら脅しても、飛行機は止められない。」

それから、コソコソ相談し、出た結果はとりあえず今は静観することになった。

アテンダントのお姉さんを落ち着かせ、エリアの個室へと案内してもらった。

お姉さんには礼を告げ、いざ、ちみつこのいる根城へ！！

「じゃまするぜ」

変な緊張のせいか普通に入ってしまった！！

「フ、フブキ！？ それにキンジも！？」

生け花で飾り付けられたスイートルームで、アリアは目をまん丸に開いた。

今気づいたが、アリアの瞳ってカメラアなんだな。

「……さすがはリアル貴族様だな。これ、チケット、片道20万ぐらいするんだろ？」

「20万！？ アリアの背の低さと相対的だな！！」

金額のでかさに驚いていると、顔を真っ赤にしたアリアは座席から立ってオレを睨んできた。

「背の低さは関係ないでしょ！！ 断りもなく部屋に押しかけてくるなんて、失礼よっ！！」

「お前に、そのセリフを言う権利は無いだろ」

呆れ顔でつつこむキンジ。

アリアがオレたちの部屋に押しかけてきた日のことを思い出したのだろう。

オレも確かにと納得していると、アリアもあの日のことを思い出したのか、うぐ、と怒りながらも黙る。

「……なんでついてきたのよ」

「ついてきたんじゃない。アリアが先に居ただけだ!!」

「気のせいかしら。あんたとじゃあ、まったく会話が通じない気がするんだけど」

「人それを会話のドッジボールという」

風穴空けられそうになりました。

「……武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ」

「……?」

「約束したはずだ。強襲科<sup>アサルト</sup>に戻ってから最初に起きた事件を、1件だけ、解決してやるって。『武偵殺し』の件はまだ解決してないだろ」

わずかに、アリアが顔をほころばせていたのをオレは見逃さない。

「な、なによ!! なにもできない役立たずなクセに!!」

がう!! と、小さいライオンが吼える<sup>ほ</sup>ようにアリアは犬歯を剥<sup>む</sup>いた。



さつき嬉しそうにした顔はどこいった。

かわいいが。

「帰りなさい！！ あんたのおかげでよーーく分かったの、あたしはやっぱり『独唱曲』<sup>アリア</sup>！！ あたしのパートナーになれるヤツなんか、世界のどこにもいないんだわ！！ だからもう、『武偵殺し』だろうが誰だろうか、これからずっと1人で戦うって決めたのよー！！」

そこまで言い終わると、ぜえっぜえっ、と息を整えていた。

長文お疲れ様です。

「そういうことは早く言っただけじゃなかったんではない？」

「……まったく。それなら、ここまで来る必要もなかったのにな」

もちろん、冗談だ。

アリアの言葉を聞いてても、キンジはここまで来たと思う。

そんなキンジは室内にあつた座席に座り、眼下の街を見始めた。

あー、そういえばこの飛行機、ロンドン行きだったね……。

「……ついたらすぐに引き返しなさいよ。エコノミーのチケットぐらい、手切れ金かわりに買ってあげるから」

「えー、どうせならロンドン観光してえなあ。時計台見たいよ」

「アンタは今すぐここから飛び降りなさい!!」

怒られてしまった。

「いい!? あんたらとはもう他人なの!! あたしに話しかけないで!!」

「違うよ。友達だろ?」

「と、友だちい!?!」

「そ。オレたち3人、『愉快な三重奏<sup>トリオ</sup>』はユニット組んで音楽業界に殴り込もうって約束したじゃんか」

「そんな約束してないわよ!!」

「するんだよ。150話ぐらいで」

「しないわよ!! 相手が誰であろうとしないわよ!!」

「え? じゃあ、1人ならするの?」

「するかあああ!!!!」

ガガン!! ガガン!! ガガガン!!

突然、アリアの叫び声と同時に雷が落ちる。

そつえば、台風が来てるんだっけ。

きずけばアリアが目を丸くして、きゅっ、と首を縮めた。

「怖いのか」

キンジがおもちゃ（アリア）を見つけたような顔で聞いた。

「こ、怖いわk」

「ドッカーン！……！！！」

「キヤアアアア！……！！！！！！！」

アリアが言い訳しようとしていた途中、オレが大声で叫ぶとアリアは絶叫しベッドの中に潜ってしまった。

「おい、フブキやりすぎだぞ。大丈夫か、アリア？」

ブルブル震えるベッドに話しかけるキンジ。

「フブキ、k i l l」

アリアさんからいい発音の英語が出たああ！！

そして、言葉が短いのが余計に怖い！！

「ア、アリア。ごめんよ。少しやりすぎた……」

さすがに反省。

それからアリアは雷が鳴るたびにベッドの中で体をビクつかせていた。

あまりにもかわいそうだったので、潜ったアリアに入口を開け、手をさしのべる。

「さっき脅かしたお詫びに手、握っててあげるよ」

「でも……アンタ……」

「大丈夫、別に笑ったりちゃかしたりしないから」

その言葉に安心したのか、アリアはオレの出した手を握ろうと手を出し始め……

パン！！ パアン！！

……音。が機内に鳴り響いた。

今度のそれは雷鳴ではなく、オレたち武偵が聞きなれた音……

銃声……！！

## フライハイテンション（後書き）

いつもより余分に書いておりまーす。

……作者です。

いよいよ、1巻のクライマックスに突入です!!

果たして、『武偵殺し』は誰なのか!? キンジとアリアのパートナーのいく末は!? そして、フブキは活躍できるのか!?  
見所満載の1章クライマックス、次回もお楽しみに!!

以上、作者からの次回予告でした!!

……ハードル上げすぎじゃね?

## 雷鳴が轟く

通路は大混乱となっていた。

皆が不安げな顔でわあわあ騒いでいる。

銃声のした機体前方を見ると、コクピットの扉が開け放たれている。

「「!?!」」

そこにいたのは、なんとさっきのアテンダントのお姉さん。

その人が、ずる、ずる、と機長と副操縦士を引きずり出してきている。

その2人のパイロットは全く動いていない。

どさ、どさ、と通路の床に2人を投げ捨てたお姉さんを見て、オレとキンジは同時に銃を抜いた。

「――動くな!!」

「そこでなにしてるんだ!!」

キンジの声に続きオレも言葉を投げかけると、お姉さんはオレたちの声に顔を上げ、にいつ、と、笑いやがった。

そして1つウィンクをして操縦室に引き返ししながら、

「Attention Please.>>お気を付けてください<<でやがります」

ピン、と音を立てて、胸元から取り出したカンを放り投げてきた。

オレの足下に転がってきたソイツを見て背筋が凍る。

「全員部屋へ戻れ!! ドアを閉めろ!!」

転がってきたのはガス缶だった。

シュウウウウ……と音を立て始めたソイツにオレは焦る。

「キンジ、早くっ!!」

キンジと恐怖を抑え部屋の入り口付近まで来ていたアリアを強引に部屋へ押し戻す。

ボタン、と扉を閉めその場に座り込み自分の呼吸を確かめる。

……呼吸はできるし、手足の痺れもない。

「大丈夫か、フブキ!？」

「……やられた。あのガス、無害だ」

悔しいが、1本取られたようだ。

「……ねえ、一体なにが起きてるのよ？」

そういえば、アリアにはこの飛行機に『武偵殺し』が乗ってるかもしれないってこと、知らないんだっけ？

まあ、オレも詳しくは知らないけど。

「アリア、あのふざけた喋り方……アイツが『武偵殺し』だ。“やっぱり”、出やがった」

「……“やっぱり”……？ あんたたち、『武偵殺し』が出る事が分かってて……」

アリアのカメリアの瞳がまんまるに見開いた。

……オレは知らなかったがな。

それから、キンジの推理が始まる。

カンタンに言うと、『武偵殺し』の狙いは初めからアリアだった。

終わり。

「まあ、大雑把に言うとそのだな」

せっかくの推理をオレが削りすぎたせいか、ジト目で睨んできたキンジ。

ここは褒めとこ。

「にしても、キンジがそこまで推理できるとはねえ。すげえじゃん！ー」



ガッハッハ、とキンジの肩を叩きながら褒め称えと、今度はアリアが、キンジに推理されて悔しいのか、ギリと、齒を食いしばっていた。

フォローしないぞ、面倒くさいから。

なんてやり取りをしていると、

ポポーンポポポン。ポポーン。ポポーンポポポンポーン。

ベルト着用サインが、注意音と共にわけの分からない点滅を始めた。

「……これは、魔法の言葉か!？」

「和訳モールスだ」

モチロンシツテマシタヨ。

魔法の言葉でポポーンポポポン。

そのモールスを聞き訳す。

「キノウ ノ ゴハン ハ カレー デシタ」

「一階のバーに来てって言うてんのよ!!」

「……誘ってやがる」

「上等よ。風穴開けてやるわ」

眉をつり上げて、スカートの中からガバを2丁出すアリア。

「一緒に行つてやる。今の俺が役に立つかどうかは、分からないけどな」

「来なくていい」

ガガンー!!

キンジがショックを受けた音ではなく、雷鳴だ。

その音で、アリアはきゅつと体をこわばらせた。

「どうする」

「……く、来れば」

かわいい。

「2人ともがんばってね」

「あんたも来るのよ」

「オレは強制かよ」

オレたちは慎重に一階へ降りていく。

一階は……豪華に飾りたてられたバーになっている。

飛行機の中なのにすげえな。

バーに入ると、豪華なシャンデリアの下、カウンターに足を組んで座っている女がいた。

「!？」

顔を見た瞬間、オレは驚いた。

服装は、先ほどのアテンダントのものだ。

ネームプレートに書かれている名前も同じ。

だが、顔だけ違った。

「なんで……なんで、その顔なんだよ……!？」

その顔は、オレの知っている顔。

昔死んだはずの幼なじみの顔だった。

過去は「ひとり」が背負うもの

「久し振りだね、フブキくん」

声も昔と変わらない、落ち着いた少し低めの声。

本当はもっと高い声を出していたが意識的に低くしたそうだな。

理由は結局、聞けなかったな。

「下手な芝居は止める。それとも、わざとしてんのか？」

当然こいつは本人じゃない。

「へえ〜。今の一言だけで気づいちゃうんだ」

「……言動、行動、仕草に言葉使い。全部がアイツと違いすぎる。ショートヘアーではあったがアイツの前髪は一部分がくせ毛だったぞ」

オレの目の前にいる幼なじみモドキは前髪が揃いすぎていた。

「さっすが幼なじみ！！ 全部知ってるんだ」

今の声はさっきのアテンダントの声だな。

たぶん、この声も地声じゃないな。

器用なヤツだ。「ねえ、フブキ。さっきからなに話してんのよ。ま

「たく話が見えないんだけど？」

アリアの問いに答えるべきかどうか考えていると、

「アリアにキーくん、それにブッキー、見事に引つかかってくれや  
がりましたねえ」

また、別の声。

だが、知っている声、そして、あのあだ名を呼ぶヤツは1人しかい  
ない。

「お前……理子か!？」

ひとつ、含み笑いをし、顔に被せていた、薄いマスクみたいな特殊  
メイクを自ら剥いだ。

中から出てきたのは、やはり、理子だった。

「理子!？」

驚くキンジ。

知り合いが事件の犯人だったなんて誰だって驚くよな。

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよ  
ね」

理子はマスクを剥いだ後、髪を整えながら唐突に何かを語り出した。

「武偵高にも、お前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも……お前の一族は特別だよ、“オルメス”」

「……」

理子に言われた単語に、アリアは電流に打たれたように硬直した。

オルメス。

前に理子に直接聞いた単語。

オレはキンジを見たが、キンジもこっちを見ていたから考えは同じか。

「あんた……一体……何者……！？」

眉を寄せたアリアに、にやり、と理子が笑う。

「理子・峰・リュパン4世……それが理子の本当の名前」

リュパン……。

アルセーヌ・リュパン……！！

理子はあのリュパンの曾孫というのか！？

「でも、家の人間は理子のことを『理子』とは呼んではくれなかった。お母様がつけてくれた、このかわいいい名前を。呼び方がおかしいんだよ」

「おかしい……?」

アリアが呟く。

「4世。4世。4世。4世さまあー。どいつもこいつも、使用人どもまで……理子をそう呼んでたんだよ。ひつどいよねえ」

「そ、それがどうしたってのよ。……4世の何が悪いってのよ!!」  
後半部分をなぜか強調するアリアに、理子はいきなり目玉をひんむいた。

「悪いに決まってるだろ!!あたしは数字か!?あたしはただの、DNAかよ!!あたしは理子だ!!数字じゃない!!どいつもこいつもよオ!!」

今の言葉はオレたちにじゃない、誰か別のヤツに向けての叫び、怒りのような気がした。

そんな理子にオレは……

「理子の周りには助けしてくれるヤツはいなかったのか?」

なくさ  
慰めようとした。

オレは理子の友達のつもりだ。もちろん、今でも。

「助ける?」

「そ、理子が苦しんでる時に理子のこと助けしてくれるような人はい

なかったのか？」

「いるかよ、そんなやつ！！ あたしのことなんか、だれも、気にもとめようとしなかったね！！」

くやしかった。

苦しんでる子を助けようと思った人がいなかったことに。

「誰もあたしを『理子』とは見なかった！！ 曾お爺さまを超えなければ、あたしは一生あたしじゃない、『リユパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た……この力で、あたしはもぎ取るんだ……あたしをッ！！」

逃避せず現実にはぶつかっていく。

それは強い心を持っていないと、とてもできないことだ。

しかし、

彼女がどんな方法で自分自身をつかみ取るのか知らないが、その目標を成し遂げた後はどうするんだ？

今の彼女の周りには誰もいないんだぞ。

ひとりでパーティーでもするのか？

ひとりで歓喜の声をあげるのか？

どちらにしろ、今の理子はひとりだ。



ひとりじゃなにもしないぞ。

## 未来は「みんな」で掴むもの

オレが物思いに耽<sup>ふけ</sup>っていると、飛行機が、ぐらり、と揺れる。

今の揺れで我に返ると、気が付けば理子は小ぶりな銃、ワルサーP99を構えていた。

「フブキ」には感謝してるよー。二人をこうしてくっつけてくれたんだから」

「あの時、約束したことか？ でも、この二人がくっついたのはオレの功績じゃないぞ。勝手にこうなったんだ」

2人、ケンカしてたし。

「それでも、フブキがいたことは大きいと思うよ。乗り気じゃなかったキンジが折れたのは間違いなくフブキのおかげ」

なんでオレのおかげなんだ？ と、言おうとしたが、理子の隙をみたアリアが床を蹴って理子に迫った。

だが、アテンダントの制服を着た理子は上着を脱ぎ襲いかかるアリアに投げ捨てる。

「!？」

上着が自分の頭にかかり視界を遮られたため、アリアはその場で止まり上着を払いのけた。

「ダメだよ、アリア。無闇に突っ込んだじゃ」

まるで、子供を諭すようにしゃべる理子は、いつのまにか、いつも着ているフリフリの改造制服姿だった。

手品師みたいだな。

「2丁拳銃はアリアだけじゃないんだよ」

そう言つて、理子はスカートの中からもう1丁のワルサーを取り出した。

これで互いに2丁拳銃。

勝負はやはり装弾数で優劣が決まってくる。

ガバは7＋1発、に対して理子のワルサーは確か16発ぐらいだったか？

倍ぐらいの差があるため圧倒的にアリアが不利だ。

だがそれは、タイマンでの場合だ。

「アリア、援護する！！」

キンジの掛け声と同時に銃を構えるオレとキンジ。

3対1なら、装弾数は関係なくこちらが有利のはず！！

「ねえ、フブキ。今からイ・ウーに入らない？」

「はあ？ 何言ってるんだ」

この状況でこの提案。

分が悪いから、苦し紛れの提案ってところか？

「入るわけないだろ、そんな危ない組織」

「だったら仕方ないね。力ずくでも連れていくしかないか」

この状況でどうするんだ？ と、聞こうとした瞬間。

ヒュッ、と何かが頬を掠める。<sup>かす</sup>

その頬を掠めた部分から赤いものが一筋流れ落ちる。

頬を流れる血を左手の甲で拭いながら振り向くと、そこには全身を黒装束で包んだ人が立っていた。

「お前は、たしか…… 光秀」

「我がここに理由はわかっているだろう」

嫌というほど聞かされたからな。

オレを誘拐する気か。

「なんなんだよ一体。まったく会話についていけないんだが」

キンジが弱音を吐くように呟いた。

唯一ついていけない一般人（？）になりつつあるためか、心配になってきたんだろう。

オレの頬の心配もしてくれよ。

「どうする、キンジ、アリア。挟まれちゃった」

「俺はまったく状況が理解できていないのに、それを聞くか」

「あとでちゃんと話すわよ。フブキ、アイツがこの間言ってた……」

「そ、謎の黒装束。名前は光秀らしいよ」

近くまで下がってきたアリアの質問に短く答える。

「あいつはアンタとキンジが対処しなさい。理子はあたしが引き受けるわ」

「でもそれじゃあ……」

「わかってる、不利だって言いたいんですよ。大丈夫よ負けるつもりなんてないわ。でも、どうしても心配ならアンタらが早くアイツを倒すことね」

「……わかった。用事を終わらせたらすぐ駆けつけるよ」

アリアとの会話が終わりオレたちは互いに背を向け目の前の敵に集中する。

「さてキンジ、どうしようか」

意図したことではないが、結果的に一人ハブってしまったキンジと作戦会議を始める。

「まったく、俺はお前らに厄介ごとに巻き込まれる運命らしいな」

「アハハ、ごめん。かならず埋め合わせするから。それより今はあの黒いのを何とかしよう」

オレたちのあいてになるであろう黒いやつは、こちらが作戦会議をしているがいつこうに動く気配がない。

あれか？ 怪人がヒーローの変身を律儀に待つ、悪役の美学ってやつか？

それとも、武士として正々堂々と戦うためののか？

どちらかといえば後者か。

どちらにせよやつと戦うんだ。

「キンジ、行こう！」

## 舞散る桜吹雪

キンジと作戦を決め光秀に対し銃を構える。

作戦は簡単、「がんがいこうぜ」だ。

一応、冗談ではなくがん銃を撃ち続けヤツを近寄らせないよう  
にすること。

前に戦った時、ヤツは刀がメインみたいだったからな。

「作戦会議は終わったか？」

「ああ、悪いがお前と遊んでる暇はないよ」

「そうか……ならば!!」

「!？」

ヤツが何かを投擲してきた。

それを体をそらしてかわす。

「フブキ!!」

ズガガンっ!!

ヤツの追撃をさけるためキンジが数発、発砲した。

遅れて、オレも発砲を開始。

当たるかは分からないがこの狭い通路だ。

牽制ぐらいにはなる。

しかし、ヤツはかがんで弾を回避……いや、そのままこちらへ接近してきた。

ヤツのスピードは前回同様、神速と呼ばれるヤツは素早く、気づけばすでにオレの足下まで来ていた。

「速いつ!?!」

キンジは初めて見るからか、驚き、撃つ手が止まっていた。

光秀はオレの足下まで来たら何かでオレを切り上げてきた。

こいつ、さつきからオレばかり狙ってやがるな……。

なんて、悠長にヤツの行動を分析してる場合じゃないか!!

「ちっ!?!」

イナバウアーよろしく、上体を反らし攻撃をかわす。

かわしたときに見えたが、ヤツが手に持っていたのは小さなナイフ……医療に使うメスみたいなものだった。

詳しくは直接本人に聞かないと分からないか。



まあ、別に聞かないが。

上体を戻し、キンジと共にバックステップで光秀から距離をとる。

だが、着地の瞬間を狙ってかヤツは再びメス（のようなもの）を投げてきた。

為すすべがなかった。

未だ、空中。

動けるはずがない。

バカがオレは。

死ぬつもりか？

“集中”しろ。

「フブキ!!」

絶対に刺さったと思った瞬間、キンジの声が聞こえた。

オレの体にはまだなにも刺さっていない。

ヤツの投げたメスはオレの方にスローで向かって来ているが見えた。

いや、それだけじゃない。

視界の端で僅かに焦った顔をして戦っているアリアの動きも、さっきまで理子が飲んでいた青いカクテルの液体の動きも、シャンデリアの僅かな動きも全てがスローで見えた。

オレになにがあつたかはわからない。

だが、今やるべきことは、目の前の敵を倒す。

いや、逮捕するんだ。

まず、ヤツの投げてきたメスを対処する。

そんなの簡単だ。

オレに刺さる前にキャッチすればいい。

「なに!？」

キャッチと同時に光秀の黒いフードの下に隠れた顔が驚愕している

のが見えた。

自分で投げた物がキャッチされるとは思わなかったんだろう。

「キンジ！！」

「あ、ああ」

キンジも驚いてやがる。

今はそんなことしてる暇はないぞ。

再びキンジと共に射撃に入る。

弾幕をはりヤツの接近を防ぐ。

しかし、ヤツは銃弾を避け、再びオレに迫ってこようとする。

だが、今のオレにはどんなに速いヤツの動きもスローで見える。

故に、ヤツの進路も予測できる。

オレはヤツの進路を予測し、それにあわせてちょうどヤツの持つメスに当たるように撃つ。

結果は、ヒットだ。

「！？」

ナイフがはじかれ、右手を抑える光秀。

ヤツはその場で考え込んでいる。

「……コレがヤツの潜在能力か」

何かひとりでブツブツ呟いている。

「峰理子、悪いが我は下がらせてもらっ」

「あつそ、まあその様子じゃしょうがないか」

「下がるって、逃げるのか!？」

「勘違いするな、桜野フブキ。今はまだ時期じゃない、殺そうと思えば我はいつでも殺せる」

「殺しちゃまずいんじゃないのか」

「ふんっ」

気づいたらいつの間にか消えていた。

そういえば、オレも周りがスローに見えなくなっ たな。

なんだっ たんだ、さっきのは？

舞散る桜吹雪（後書き）

ん、戦闘描写は難しい

## 心の奥底

「さあ、理子！！　これでまた3対1だぜ。どうするんだ」

「フッフ、今さらキンジとフブキが増えたって足手まといなだけだよ」

「なにっ！！」

足手まといと言われたのが悔しいのか、キンジが僅かに怒りを表す。

「それに、決着はもうすぐついちゃうよ」

「それってどういう……」

「カドラ双剣双銃……奇遇だね、アリア」

理子が言った。

「理子とアリアはよく似ている、家系、キュートな容姿」

自分で言うな。

まあ、否定はできないが。

「それに、2つ名」

「？」

「あたしも同じ名前を持ってるよ。『双剣双銃の理子』。でもね、アリア」

オレたちは動けずにいた。

ありえない、不気味な光景をみて、本能的に。

なんだよ……あれは！？

「アリアの双剣双銃<sup>カラ</sup>は本物じゃない。お前はまだ知らない。この力のことを……」

しゅら……しゅるるっ。

笑う理子の、ツーサイドアップの、テールの片方が、まるでメデューサの髪のように動いて、

ザシュ！！

テールに握られたナイフが、鮮血を飛び散らせる。

「うあっ！！」

「アリア！！」

アリアが真後ろにのけぞる。

側頭部を斬られたのか！？

「……………！！」

理子がわけの分らないことを叫びながら、

髪で押しのけるようにして、アリアを突き飛ばした。

あの髪、思ったより力があるのか……？

アリアは驚くほど易々と吹き飛ばされ、……キンジの足元へ転がっていった。

「アリア……アリア!？」

キンジがアリアの肩を揺すって意識を確かめる。

アリアの顔面には真紅に染まる血に<sup>まぶた</sup>瞼をきつく閉じているようだ。

「アリア……」

オレはいつの間にか、呟いていた。

アリアを心配する気持ちから出た言葉なのか、唯一理子とともに戦えるアリアが欠けることによる恐怖から出た言葉なのか。

「キンジ、アリアを連れて撤退しよう!!」

「だが、今ヤツに背を向けると銃で撃たれるぞ」

とるべき行動は一つか。

「だったら、どっちかが残って時間を稼ぐしかないだろ。そして、



それは言い出しっぺの役目かな」

「でも、それじゃあお前が……」

「大丈夫、数分稼いだら尻尾巻いて逃げるから。早く行け!!」

「あ、ああ。……絶対、戻ってこいよ」

そして、キンジはアリアを抱えて走っていった。

「きゃはははっ!! ねえねえ、こんな狭い飛行機の中、どこへ行こうっていうのー?」

「安心しろ、お前の相手はオレがしてやる」

「フブキがあ? ムリムリ!! フブキじゃあ、あたしを止められないよ」

「やってみなくちゃわかんねえだろ」

「フッフ、足が震えてるヤツにあたしがまけるかつーの」

言われるまで気づかなかった。

自分の足が震えてることに。

オレがビビってる?

……そうだな、誰だってあんなバケモノじみた能力を見せられりゃあ、誰でもビビるだろ。

「理子も、ビビってたんじゃないのか？」

「あたしが？ なにに？」

「昔から4世、4世言われてきたんだろ？ 武偵高のヤツらに正体がバレて、また、4世って言われるのが怖かったんだろ」

「あたしのことを4世っていうな！！」

理子は叫んだと同時に、右手のワルサーで発砲してきた。

唐突だったから焦ったが、オレはカウンターの陰に飛び込んだ。

「だったら、昔も、今みたいに言えばよかったじゃねえか。『自分のことを4世ってじゃなく名前で呼べ』って」

ガバメントを抜き臨戦体制をとる。

「そんなこといえるわけないだろ、ガキじゃねえんだから！！」

ずがんっ！！

陰から理子を覗こうとしたが、撃ってきたため、すぐに顔を引っ込める。

「今だってガキだろうが。ただ、逃げてるだけのな」

声を出した後、すぐに発砲。

理子の接近を制するためだ。

「あたしが逃げる？　なにからさ！？」

オレの撃った弾は、珍しくターゲットへ飛んでいく。

しかし、それはテールの持ったナイフで弾かれる。

「まあ、現実から目をそらしている、の方が適切かな。理子は分か  
ってるんだろ“こんなことをしてもなんの意味もない”ことに」

「！？」

そう、理子だって分かっているはずだ。

「仮にアリアを倒してた後には何が残る？　それが本当に初代リュ  
パンを越えること、自分を手に入れたことになるのか？」

オレはカウンターの陰から出る。

長い沈黙の後、

「……………だったら、どうすればいいの？　理子は何をして生きればい  
いの！？」

彼女の目的。

それは心の支えだった。

目的を失った彼女はなにもかも失ったかのように、苦しんでいた。

「だったら、オレと一緒に探すよ」

ひとりだった理子。

「だからさ」

いつも心のどこかでは泣きながら助けを求めている。

「それが見つかるまで」

だから、

「また、一緒にゲームしよう」

笑顔で手をさしのべてあげるんだ。

## 揺れる心・揺れる機体

昔、一人の子供がいた。

その子はある幼馴染を暗闇から救い出したことがある。

その時からだろうか、その子がたくさんの人を助けたいと思い始めたのは。

「フブキの手を握ることはできない」

さしのべた手はただ宙に浮かんでいるだけだった。

「どうして！？ オレは別にお前が『武偵殺し』だろうが関係なく……」

「そんなんじゃない。あたしは逃げられないだけだ」

「逃げられない？ なにからだ？」

「それこそフブキには関係ないことだ。だから、もう二度とあたしとは関わるな」

そう言つて、理子は窓際へと歩き出す。

「関わるなあ！？ そりゃあ、オレは力の無いちっぽけな存在かもしれないけど、相談にのったり、なにかしら役には立つかもしれないだろ！？」

「フブキじゃ無理だ」

ピシヤリ、と言い放たれた。

窓に背中をつけるように立つて、腕を組んだ理子がオレを冷たい目で見てくる。

「フブキがなにをしようが、あたしはこの運命から逃れられない」

なんだ？ 理子が言っていることがわからない。

でも、なにかはわからないが、

「だから、最初っからあきらめんなよ！！」

こう言うしかない。

理子がわからないなら、わかるまで言い続けてやる。

「なにかはよくわかんないけどさ、ひとりでなんでもかんでも抱え込むな！！ オレ一人じゃどうにもなんないならもつとたくさん仲間を連れてきてやる！！ お前のが困つてたら助けようって奴は武偵高探しゃあいくらでもいるぞ！！」

言ってることはむちゃくちゃだって分かってる。

でも、これだけしなくちゃ理子は助けられない。

今助けないと後で後悔することになる。

「……なんで、そこまでしようとするの……」

「ギャルゲー仲間だからだ!!」

それ以上でも以下でもない。数すくない仲間。

「お前がいなくなったら、キンジがオレのギャルゲー話を聞く羽目になるんだぞ」

「フッフ、それはそれでキンジの困った顔が見れて面白そうだけど」

「確かに」

こんな状況で笑いあってるオレと理子。少しは分かってもらえたの  
だろうか。

「フブキ」

「ん？」

「理子がいつか戻ってきたときは助けてくれる?」

「何回も言っただろ。助ける」

「……ありがとう」

理子がスカートをちょこんとつまんで少しだけ持ち上げ、急にお辞儀しだした。

その時、オレはあるものに気づく。

「……あの、理子さん。その周りにある粘土状のものって、まさか……」

「くふっ、なにせ『武偵殺し』<sup>ワタクシ</sup>爆弾使いですから」

理子はウインクをしたかと思うと、両腕で自分を抱きしめるような姿勢を取り――

「Au revoir、キンジとアリアによろしく伝えといて」<sup>しきげんよう</sup>

ドウツツツツッ――!

まさか爆破オチになるんとは思わなかったなあ。



機外へ出た理子はなんとあの改造制服をパラシュートへ変形させたのだ！！

どこまで用意周到なヤツなんだ。

だが、どうにも憎めないオレがいた。

あんなに笑顔で手を振られるとどうしても怒れなかったんだよな。

その後、アリアたちと合流するためにアリアの部屋へ向かった。

扉を開けて部屋へ入るとなぜかアリアは床にへたり込んでいた。

「お、おつかれさまです」

「フブキか。お前大丈夫か？」

「あ、ああ。まあな」

「そうか……お前はよくやったよ」

ぞぞぞぞッ！！

背筋が凍った。

「キンジ……！！ あんた、また……」

なつたみたいだね、ヒステリアモード。

何度も見たことはあるが、この状態のキンジとしゃべるのは初めて

だったりするが……ヒステリアモードって女に優しくすんじゃないの？

キンジはアリアの耳元まで顔をやり、囁きだした。

「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。俺は、アリアを信じる。だからアリアも俺を信じてくれ」

「わわ、わわかったわ。協力して理子を……」

「理子なら撤退したよ」

「「えっ!?!」」

「なんか、用事があるつつつて帰ってった」

「なっ!! あ、アンタ何で捕まえなかったのよ!!」

「ムリ言つなよ!! こっちだっていっぱいいたんだぞ  
!!!」

「いや、フブキはよくやってくれたよ。逃げられたのは癪だけど、ケガをしなくてよかったよ」

「ぞぞぞぞッ!!」

「キモイよ!! この人キモイよ!!」

そして、オレがキンジとの付き合い方を変えようかと思案し始めたころだった。

ドドオオオオオンッッ！！

轟音と共に飛行機は激しく揺れた。

なんだ、いったい何が起きてるんだ！？

「」

「うおっ！！」

轟音と共に激しい揺れが機体を襲った。

突風や落雷とは違う、機体を巨大なハンマーで2発殴られたような衝撃。

その揺れに耐えきれず、オレたちは転倒した。

「いつつ、みんな大丈夫か？」

「ええ」

「俺も大丈夫だ。なんなんだ、今のは？」

「オレがしるかよ」

「手分けしてことに対応するわ。アンタたちは両翼の確認してきて」

「両翼？」

「あたしの勘だけどね、もしかしたら今のはミサイルか何かが当たたんじゃないかしら。そして、当たった場所は両翼に1発ずつよ」

「わかった。アリアは？」

「あたしは操縦室へ行くわ。この飛行機、降下し続けてるみたいだ

から」

窓を見ると、確かに降下しているようだった。

ちなみに、ここからじゃ翼は見えてもエンジンまでは見えなかった。

「わかったら、さっさと動く!!」

まったく、人使いが荒いなあ。

再び、バーへとやってきたオレ。

外へ飛ばされないようにしがみついて窓を覗くと、翼が見えた。

翼は2基ずつ左右にジェットエンジンがあるうち、なんと、内側を1基ずつ破壊されていた。

こっち側に2発も当たったのか。

すぐにアリアに連絡を入れる。

「アリアか？　こちらの翼についてるジェットエンジンが2基ぶっ壊れてる」

『……わかったわ。すぐにこっちへ来て』

「あいよ」

あっちに行けとかこっちに來いとか忙しいヤツだ。

あ、忙しいのはオレの方か。

「……遅い!!」

操縦室へ行くとアリアに怒られました。

オレ、キレていいよね？

「あたしとキンジが座るわ」

そう言つて、アリアは小さな体をスポツと操縦席に収めた。

「で、オレは？」

「アンタいらぬ。帰つていいわ」

ヒドいつー!!

なんとなく予想してたことだけど、やっぱ言われるのはキツいなあ  
ゝ。

「安心しろ、フブキ。このでっかい鳥は俺とアリアで巢へ帰してやるから」

うるさい、今のお前は黙ってる。

なんとか力になれないか説得するも、結局オレは退場させられた。

ここに来てオレの力のなさが発揮されてしまった。

その後、飛行機はキンジとアリアの活躍により無理やりではあったが、なんとか着陸した。

なに？ お前は何もしなかったのか、だって？

考えてもみる、アリア様とヒスったキンちゃんがいるんだぞ。オレができることなんて何もなかったんだよ。

武偵憲章1条にならって、二人を信じたんだ。別にサボってたわけじゃねえんだよ。

……すまん、少しイライラしているんだ。自分の無力さにな。

今はこのイライラを止めようと屋上で寝そべって、東京の夜空を見ているところだ。

だが、疲れているのか思考がネガティブになってしまい、イライラは一向に収まらなかった。

「このまんまじゃダメだよな……」

「なにがダメなのよ？」

オレの見ていた景色に一人の少女が入り込んできた。

名は神崎・H・アリア。オレの友達。

「今回、オレ何にも役に立てなかったなあって、思ってたね」

上半身だけ起こし視線は夜空に固定。台風一過ってやつなのか、綺麗な星を見ることができた。

「何言ってるの、あんたはできることを十分にやったじゃない。あたしとキンジのために時間を稼いでくれた」



「いんや、だめだめだ。アリアにケガさせる前に助けられれば良かった。それに、理子だって……」

理子は未だ闇の中にいる。だが、その闇の中にいる理子を、オレは見つけることができていない。

家系とか遺伝子とか関係ない、理子そのものをオレは見つけることができるだろうか。

「だったら、やることは一つしかないじゃない。アンタ、あたしと最初に会ったときに言ってたわよね」

『最初からムリだなんていつてたらできることもできなくなっちゃう。俺はそうなるのはイヤだから』

言ってたなあ、つい最近。

「それは、さ。なんていうか、その時はまだ、現実つてもんが見えてなかったんだよね」

人間、がんばれば結果は出る。

だが、命の危機を感じたオレはそれは甘い考えだと思つようになつていた。

どんなにがんばっても、できないことはできない。

Eランク以下のオレがSランク並みの実力を持ったヤツと戦うなんて模擬戦じゃない限り自殺行為だ。

「だから、オレはもう武偵をやめるよ。オレみたいな弱いやつがこんなところ、来<sup>き</sup>ちゃいけなかったんだ」

始めからわかっていたことだった。始めとは武偵校に転校する直前のこと。

妹の猛烈な反対を押し切って強襲科<sup>アサルト</sup>に入ったものの、覚悟が足りずに落第寸前。

運よく救われたものの一向に強くなるような気配はせず、ただ苦しい毎日の繰り返し。

顔ではへらへら笑っているものの、いつも辛かった、苦しかった。

こんなに弱い自分をダレにも見せたくなくって、ただ、へらへら笑うことにした。

笑っていれば、ダレも気づかないだろう？

もう、弱い自分とはおさらばしたかったんだ。

約束したもんな？ 美稀。

パンっ！！

突如、乾いた音が屋上に鳴り響いた。

始めは何の音か全くわからなかったが、気づくよりも先に頬に痛みがきたので、なんとなく理解した。

アリアに頬を叩かれた。

痛くはなかったと言えばウソになるが、肉体的な痛みよりも精神的な痛みの方が強かった気がした。

「ばっかじゃないの！？ 強いとか弱いとか関係ない！！ アンタは武偵になりたいの？ なりたくないの？」

「武偵には…… なりたいたと思った」

「だったら、アンタはアンタなりの武偵を目指しなさい！！ 世の中、強襲科だけが武偵じゃないでしょ！！」

「でも、オレは武偵になるならやっぱり、強襲科が……」

「視野が狭い！！ 戦うのは強襲科だけじゃないの！！ どの科だつてみんな、犯人逮捕のために戦っているのよ！！」

戦っているのは強襲科だけじゃない。

そんなこと、考えたこともなかった。

犯人と直接戦うのは主に強襲科、他の科は主に事件の”捜査”、としか見ていなかった。

誰かを守る武偵は強襲科だけだと思っていたが、違ったようだ。

「誰かを守るために戦う、それがオレの信念だった」

もちろん、今も変わっていない。

「だけど、オレが守っていたのは自分自身だけだった」  
必死に昔の自分を守っていた。

「頭のどっかじゃ、気づいていたのかもしれない」

だけど、気づきたくなくて、知らないふりをしていた。

「だから、認めることにするよ。弱い自分を」

でも、それは成長ではない。

「スタートラインに立つために!!」

また、その日まで……（前書き）

ついに

また、その日まで……

バラバラっ。

東京では珍しく綺麗な夜空の中、何かが小さく光る。

それは徐々に大きくなっていくのを見るとどうやらこちらに近づいているようだ。

そして、ようやくあれがヘリだと視認できるようになったのはもう少し時間がたってからだった。

「どうやら迎えがきたようね」

言葉から察するに、あのヘリがアリアの迎え。

アリアは元々、ロンドンへ帰るつもりだった。

帰国が延期し、しびれを切らしたロンドン武偵局が直接迎えに来たのだろう。

「やつぱり、かえ……るのか？」

オレたちは迎えの来る女子寮のあるヘリポートへと移動していた。

今回はちゃんと見送り、のつもりだったが、どうしてもアリアを引き止めようとしてしまう。

「一度、ロンドンへ戻って態勢を立て直すわ。それに、パートナー

も探さないよね」

パートナー。

自分独りでもやっていくなんて言っていたあのアリアから、パートナーなんて言葉を聞けるとは。

でも、

「キンジはいいのか」

「……ええ、1回だけって約束だし、もうお別れは言ってきたわ」

素直じゃないな。

2人とも。

オレに喝を入れてくれたアリアさんには、なにかお礼をしないとな。

「なあ、アリア」

「言っとくけど、今のアンタじゃアタシのパートナーにはふさわしくないわ」

先読みされてるし。

「バツサリ言うなあ」

「当たり前よ。イ・ウーと戦うにはそれなりの実力があるの。今の弱いアンタじゃ足を引っぱるだけよ」

足を引っぱる前に死ぬかもね。

「今のアンタじゃね」

「!？」

ずるいなあ、アリアは。

落としてから上げるなんて、がんばりたくなるじゃないか。

「日本にはまた来るんだろ？」

「それはヤツらしだいね。そう都合よく日本に何度も出沒するとは思えないけど。でも、光秀ってヤツはまたアンタのどこに来るかもしれないわね」

「かもな。オレの方も何かあつたら連絡するよ」

「わかったわ。連絡先は後で送るわ」

「おう」

そして、ヘリはヘリポートへ到着。

そのヘリにアリアが乗り込むとヘリは離陸し始める。

その時だった。

「アリアっ!!」



屋上の扉が、ボタンっ、と力強く開きキンジが息を荒々しく上げながらヘリポートへと入ってきた。

「アリアっ！！ アリアあああ！！！！！」

叫ぶキンジ。

アリアもキンジに気付き、扉を開けて高さ5mから飛び降りた。

「遅い！！！」

……足、大丈夫か？

今、痛そうにしたけど。

「アリア！！《aria！！》何をやってるんだ！！《what，  
re you doin！！》」

ヘリの中から白人が叫んでいた。

「少し待つて！！>>wait a little！！<<」

アリアは白人に対し、怒りを含ませた声で叫んだ。

あの人、ロンドン武偵局の人かな。

若干、涙目になってるんだけど。

「な、何しに来たのよ」

えー、この状況でまだ素直にならんですか。

「アリア、お前は『<sup>アリア</sup>独唱曲』だ」

「そうよ、でもこれからパートナーを探しに……」

「そうだ。でもな、俺がBGMぐらいにはなってる……!」

「……ホント、遅いのよアンタは」

顔を伏せ何かをつぶやいたアリア。

しかし、それは聞こえなかった。

「いい!? 次に会うまでは素のアンタでも強くなっておくのよ!」

「え? 帰んのか?」

「ロンドンでイ・ウーのことを調べてくるの!! あっちの方がこっちよりも自由に動けるしね」

そういつて、アリアは身を翻し、再びヘリポートへ降りてきていたヘリに乗り込んだ。

「……じゃあ、またね」

「行っちゃったね」

「アリアのヤツ、めんどくせえ宿題置いていきやがって」

「あはは、まあいいじゃんこれからがんばれば」

「せっかく走って来たってのになんか骨折りみたいになっちまった」

「走って来たの！？ 南端の男子寮から北端の女子寮まで！？」

「おかげで、今頃になって体中が悲鳴を上げてやがる」

「あー、チャリ物故してるから。電話してくればよかったのに」

「お前がいるって知らなかったし、それに、直接会って言いたかったしな」

「それもそうか」

電話越しに伝えるようなことじゃないか。

「どれくらいで帰ってくると思う？」

「1ヶ月に学食の焼肉定食」

「1週間に学食のステーキプレート」

「お前っ、それ一番高いやつじゃないか!?!」

「ウソウソ。かつ丼でいいよ。いいやむしろかつ丼がいい!?!」

「ラーメンじゃなくていいのか。学食のラーメン好きだったろ」

「ん? ラーメンは今日の晩飯」

「そうか。……それにしても1週間って早くないか?」

「意外と早く帰ってくると思うよー」

「だが、宿題残してたんだぞ。1カ月ぐらいいいんじゃないや」

「まあ、アリアだからね。1週間で強くなれとか言いそうだ」

「う、確かにな……」

まあ、半分はオレの願望だけだな。

またすぐに帰ってきてほしい。

別に神様ってやつを信じてるわけじゃないが、今回は神様に祈ることにするよ。

たまには、いいだろ?

また、その日まで……（後書き）

第1章・完

## おはなしのあとにかくやつ

作者「終わった！！ 緋弾のアリア・完！！」

あかり「だめです！！」

作者「えーっと、どちら様？」

あかり「間宮です！！ 間宮あかり！！」

作者「あー、本編でレギュラー通告されていたにも関わらず1章クライマックスで出演できなかったあかりちゃんかぁ」

あかり「それは言わないでください！！ そもそもなんであたしは行かないんですか！？ 授業なんてサボって行けばいいじゃないですか！！」

作者「うん、初めはフブキと一緒にいくつもりだったんだけどね、書いてる途中でめんどくさくなっちゃった」

あかり「めんどくさい！？ そんな理由！？」

作者「っていうのは建て前で……」

あかり「よかったです。そうですね、もっとちゃんとした理由も作者さんにはありますよ」……」

作者「あかりちゃんがいたらシリアスな雰囲気くずれそうじゃん」

あかり「あたしは存在がお笑いなんですか!？」

作者「1巻ラストに出れるって悶々としていたお前の姿はお笑い草だったぜ」

あかり「どこのアスパラガスさんですか!？」

作者「おお、野菜の名前を使うことによって伏字を回避するなんて誰にでもできる芸当じゃないな。あかりちゃん、もうそっち方面で行こう」(＜|o) b

あかり「行きません!! それより、もう真面目なこと語ってくださいよ!!!」

作者「あれ、もういいの?」

あかり「よくはないですけど、早く先に進めないとズーっと続きそうなので」

作者「おーえらいえらい、2章ではちゃんと出してあげるからね」

あかり(計画通り)

作者「顔で心が読めちゃうよ……」

あかり「ところで、なんでアリア先輩は帰っちゃったんですか?」

作者「スルーなんだね。原作じゃあキンジの誘いにホイホイ乗っちゃって結局日本に留まるんだけど、今回はオリ主のフブキくんがいたからね」

あかり「フブキさんが？」

作者「そ。キンジが来る前にアリアはフブキに、まだパートナーになれるかもしれないから頑張れみたいなこと言っちゃったからねえ。それを無視してキンジとくつつくなんてできなかったんだよ」

あかり「へえ、アリア先輩が」

作者「まあ、それだけじゃないのかもしれないけどね」

あかり「それは秘密ですか」

作者「そ。まあ感じがいい人はわかるかもね」

あかり「わかりませんよ。あなたの伏線の張り方かなり雑なんですから」

作者「ぐさり！！ い、いやちゃんと勉強はしてるんデスヨ。物語の作り方や文章の書き方とか」

あかり「暇なときはゲームばかりしてる人が？」

作者「・・・・・・」

あかり「はあ。もしこの小説を見ている人がいたら、遠慮なく質問や感想を書いてみてくださいね。ログインせずに感想やコメントを書けるようにしてますから、ユーザー登録をしなくても大丈夫です。なので、気軽に書いてくださいね」



作者「疑問なんかは返信やあとがきなどで回答するよ」

あかり「……で、次回からはどうなるんですか？　それとも、本当に完結にしちゃいますか？」

作者「いや……一応、これ始まったばかりだから。1章だけどどちらかというとまだプロローグだからね」

あかり「おまけにA Aの本が出ないとA A組の話が進められないという」

作者「うん。特にあかりちゃんの過去は気になるね。じゃないと勝手に作っちゃいそうだし」

あかり「設定とかあるんですか？」

作者「特に決めてはないよ。むしろなかったことにしようかと……」

あかり「あたしの唯一のシリアスな部分をなかったことに!？」

作者「まあ、どちらにせよあかりちゃんの過去は後半でやるつもりだしね」

あかり「そうなんですか……よかった。ところで、この小説どこまで書く予定なんですか？」

作者「5巻までか極東戦線編までかは迷い中」

あかり「打ち切りの可能性は？」

作者「見る人少なければあるかも。一応、どんな形であろうと完結はさせるつもり」

あかり「よく続いてますよね3日坊主だったのに」

作者「うん。たぶん感想書いてくれてる人がいるからだと思う。人に見られてるって分かるとがんばろうって気分になるから」

あかり「そういうことは話のあとがきでもちゃんと書いたらいいんじゃないですか?」

作者「話、書き終わるとね『終わったー』って感じになってすぐ投稿しちゃうからねー」

あかり「それじゃあ、2章からの課題ですね。あとがきには何かしら書く」

作者「せっかくだから、まえがきにも一言何か書きちゃおう」

あかり「あと、文をしっかりと」

作者「努力します……」

10分の休憩後

あとがきのしめへ

作者「やっぱあとがきの最後は次回のネタバレだよな」

あかり「さっきもちよこつとふれましたけどな」

作者「2章からはシリアスなしにしようかと思ってるんだけど」

あかり「原作ブレイカーwww」

作者「といつても、3巻・理子の話はどうしてもシリアスになっちゃうけどね」

あかり「人の過去を笑うのはいけないことですよ」

作者（まだ根に持ってるのか）「わかってる。理子の話は原作の雰囲気そのまんまだ。それから、たぶん2章から物語は加速するよ」

あかり「どういう意味ですか？」

作者「駆け足で原作進めるってこと基本オリキャラ、オリ話入れたいからね」

あかり「まだキャラ出るんですか……」

作者「だいじょうぶだよ、またチョイ役だと思う。たぶん……」

あかり「たぶんですか。まあいいです。では、この辺で終わりにしましょう」

作者「うい、とりあえず話したいことは話したかな」

あかり「それでは、最後に一言!-!」

作者「ちよつと予告すると、第2章からは、大変な事が、ついに、

キンジの身に起きてしまつのです!！」

あかり「ちょwwwそれ、原作?巻のあとがきwww それではこの辺で……」

作者・あかり「Go for the next!！」

新章突入！！しかし、出ようとしない2人（前書き）

今回見なくていいです

でも、やっぱり見てほしかったり

## 新章突入！！しかし、出ようとしない2人

- - - - 運命って言葉を頻繁に使うヤツってさ、大抵、厨二病患者だよな。

- - - - 物語の冒頭なんかで主人公が運命について語ったりするが、たかだか十数年生きた野郎がなに語ってんだ、って話だよな。

- - - - 運命って言葉を信じているとか、信じていないとか、そんなこと他人にとってはどうでもいいことだ。

- - - - たとえ運命を信じていようが、信じていなかろうが、それは語らず心の中にしまっておくもんだぜ。

- - - - あっ、ちなみにオレは信じてる方っす。

- - - - 信じているけど、本当にあつたら無理やりにも変えてみたいなんて思ってる、ひねくれた感性の持ち主なんであんま相手にしないでいいっす。

- - - - だけど、運命って言葉を言い訳にして逃げてるヤツは嫌いだ。

- - - - 運命なんて努力次第で変えられるんだ。

- - - - だから、あきらめない。ぜったいにあきらめないんだ。

- - - - 最後に一つ、お前も運命って言葉を多用してんじゃねえかWWW、ってツッコみは無しの方で。



勿論、玄関先に高橋〇人がピンポンダッシュをしに来ているわけでもない。

「伏せるとこおかしいだろ。あと、16連打もしてたら、逃げる暇ねえよ」

ヒスってもいないのに、冷静かつ的確にツツコみするのは永遠のツツコみ役、オレのルームメイトの遠山キンジ。

遠山の金さんの子孫である彼の家系は代々、正義の味方であることをお忘れなく。

決して、ツツコむために生まれてきた存在、とか思わないように。

ちなみに、彼についている2つ名は「女嫌い」と「昼行灯」だ。

「誰が永遠のツツコみ役だ。あと、前にも言ったがそれは2つ名じゃねえよ」

いやはや、こんなに律儀にツツコんでくれる親友を持ったオレ、桜野フブキは大変喜ばしく思っている。

「それより、早くあれ、出てあげた方がいいんじゃない?」

玄関の方を指し示し、キンジに急いで客人の対応を促してみるが、

「なんでおれなんだ。いつもはお前が出てくれてるじゃねえか」

「いやいやいやいや、だってあれ星伽さんだろ? キンジに会いに



来たんじゃないか」

「……仮に白雪だったとしても、俺に会いに来たとは……かぎらねえ、だからお前が出る!!」

急に声のトーンを上げたのは、どう考えても自分に会いに来たとは思えなかったからだろう。

どうしても、今の、あの星伽さんには会いたくないらしい。

「だったら、何か勝負しよう!! 負けた方が応対する!!」

「だったらポーカーで決めるぞ。その方が手っ取り早い」

「いやだ!! キンジ、いつの間にかジョーカー隠し持ってるんだもん!!」

「そんなイカサマしねえよ!!」

しかし、目線は左斜め上を向いたまま。

「だったらさキンジ、ブラックジャックやろ!! それでいこう!!」

「お前、毎回自分にいいカードが来るようにシャッフルするじゃねえか!!」

「そんなことしませんよお」

しかし、目線は左斜めを向いたまま。

「このまんまじゃ埒<sup>らち</sup>があかないよう」

「どうすんだよ」

「だったら、どっちが何の勝負を決めるか、じゃんけんしよう」

「よし、最初は……」

「キンちゃん、桜野くん！！ 中にいるんでしょ！？ 開けてくださいー！！」ドンドン

（（こ、怖えええええ））

さつきよりも、威力が上がったドアドンに、連打スピードの早くなつたチャイム連打。

それはよりいつそう星伽さんの怒りが増しているという証拠。

ドアくんよ、耐えてくれ。

「こつなつたら……」

「時が過ぎるのを待とう」

まるで借金取りが取り立てに来たのを居留守を使ってやり過ごすかのような心境だ。

とりあえず今は、コーヒーでものんで落ち着くことに……。

しゃきん！！

がしゃ、ボタン！！

大きな金属音と後からやってきた何かが倒れる音。

それから、どたとたと何かが近づいてくる足音。

それは、いわずもがな……。

「いたあ！！ キンちゃんに桜野くん！！」

目的に向かって真つすぐ突っ込んでくる様、正に猛牛のよう。

しかし、現れたのは見目麗しい大和撫子な武装巫女。

刀を持った星伽白雪。

キンちゃん様のために仰せになられたようです。

新章突入！！しかし、出ようとしない2人（後書き）

感想は、武装巫女さんキタアアアアアアアア！！で

V S 巫女さん！？ 死闘の2分間！！ …… くらい（前書き）

10日ぶりくらいの更新

リアルがいろいろあったから仕方ないね

V S 巫女さん！？ 死闘の2分間！！ …… くらい

静けさは

風とともに

去っていく

代わりにきたのは

武装巫女さん

桜野フブキ心の短歌

「現実逃避するな、フブキ！！ 敵が目の前に来てんだぞ！！」

敵って…… あんたの幼なじみでしょうも。

「キンちゃんは悪くない！！ キンちゃんは騙されたにきまつてる！！」

「いったい何のことを言ってるんだ！！ 俺は別に詐欺にあつたりはしてないぞ！！」

「星伽さん、一旦落ち着こう。うん、そうしよう」

一体、何が星伽さんをこうさせているのか皆目見当もつきません。

今は話し合いを……

「聞いたよ！！ 神崎・H・アリアがキンちゃんをたぶらかして汚けがしているって！！」

ダメだこの人、早く何とかしないと……。

「落ち着け白雪！！俺はどこも汚されてない！！」

「そうだよ星伽さん。この部屋にはオレとキンジの二人だけしかないよ？」

今は、だけど。

「そ、そんな……でも、キンちゃんが女の子を部屋に連れ込んで……してるって」

星伽さん、恥ずかしいなら無理しなくていいですよ。後半全く聞こえませんでした。

そんなことより、だれだよ、そんな根も葉もないうわさを流したのは、オレだ。

キンちゃんが「キンちゃん言うな」めちゃくちやこちらを睨んでくるが、オレの特殊能力『スルースキル』を発動しておく。

「わかった！！桜野くんが『転装生<sup>チェンジ</sup>』で男の子に変わってるんだ！！」

は？

「桜野くんが本当は女の子でキンちゃんのことをたぶらかしているんだ！！」

星伽白雪。

つやつやした黒髪ロングの、おしとやかで慎ましい、古き良き日本の乙女。

オレよりも料理が上手で、誰にでも優しい、良妻賢母のたまごなのだ。

「キンちゃんをたぶらかす悪い女狐は私が成敗しますー!!」

ただ、好きな人のことになる、なんとというか、歯止めが利かなくなるだけで、普段はこんなこという子じゃないんですよ、奥さん。

「桜野くんを○して私も氏にますうー!!」

……ホ、ホントに言わないですヨ、普段は。

「キンちゃんそごいて!!　じゃないと、そいつ○せない!!」

フォローできない!!

もう、表の顔は大和撫子、裏の顔は般若ということ、おーけい?

「フブキくんなんか、フブキくんなんか、……ここからいなくなれえー!!!!!!」

うわああああ!!　突っ込んできたあー!!!!!!

星伽さんが刀で一閃。

それを、ほぼ条件反射で回避する。あ、頭が、ちりっ、っていった。



「や、やばいよキンジ。星伽さん、怒りで自我を失って」……って、あれ？ キンジ？」

いままで、オレの隣にいたはずの人物がいなくなっている。

周りを探すと、目的の人物は、今まさにベランダへ出ようとしていた。

「おいっ、キンジ！！ どこへ行く！！」

「緊急退避だ！！ 俺はベランダの物置に隠れる！！」

「よおーし、オレはあの冷蔵庫の中に……って、隠れられるわけねえだろ！！ ていうか、助けて！！」

「知るか、噂を流しなのはお前なんだから自業自得だろ」

「薄情物！！ 鬼！！ 悪魔！！」

「なんとでも言え」

「昼行灯！！ 女嫌い！！ ロリコン！！」

「……………」

あつ、ちよつと悲しそうな顔した。

「天誅<sup>てんちゆう</sup>うー！！」

金切声をあげた星伽さんは、カカカ（口）ツと下駄を鳴らして突進

してきた。

その勢いのまま、ぶうんっ！　と、刀をオレの頭めがけて振り下ろしてくる。

や、やる気だ！！

「くっ！！」

ここはかつこよく、真剣白羽取りいー！！　と、いききたいところだがそのような技術、あるうはさすがにありません。

ここは素直に体をねじって回避。

文面だけを見ると、冷静に見えるが実際はそうとう焦ってるかくあwse d r f t g y ふじこ 1 p。

……いままで、わかってくれ。

「今のを避けるなんて、なかなかやるね！！」

「刀持ちの素早いやつとは何回かやってるんでね。少しは慣れてるよ」

それに、ヤツの方が速かったしな。

「やあっ！！」

再び、星伽さんの攻撃。

今度は、先ほどの会話中に取り出したナイフで、星伽さんの刀と交える。

といっても、刃の短いナイフじゃあ、攻めに転じれず防戦一方になっってしまう。

だったら、オレも同じものを用意すればいい。

振り下ろしを往なし、星伽さんのわきを通って廊下へ出る。

そのままオレの部屋へ入り、例の物を手に取る。

「逃がさないよ!! はあっ!!」

部屋の前まで来た星伽さんは、即座に力力力つと、下駄を鳴らしてこちらに向かってくる。

オレは……

「簡単にやられるか!!」

刀を抜き、星伽さんの平突きと切り結ぶ。

そのまま、つばぜり合いになる。

「その刀……!?!」

この刀を見た星伽さんの表情が驚きに変わった。

この刀は前に光秀から拝借（奪った）物だ。

この刀のこと、何か知ってるのかな？

互いに刀を弾き、距離を取る。

おそらく、次の1撃で決まるだろう。

オレは、強襲科アサルトでの補習を思い出す。

何度も教師に突っ込んで返り討ちあった日々。

あれはただ無闇やたらにツッコんだわけではない。

あの教師はカウンター技が得意だった。

その技を何度も受けてオレは勉強したのだ。

そして、一つの戦い方をあみだした。

「はああああああ！！！！」

星伽さんが先に動き出す。刀身はオレに突き付けたまま。

オレは動かずに敵を見据え分析する。

おそらく、突きを繰り出してくるのだろう。

オレは一つの勝利パターンを頭の中で作り上げる。

それは台本のようなもので、オレはいまから台本通りに演じる役者

になりきる。

「うまくいくかどうか……」

星伽さんの突きを避ける。

なぜかはわからないが、心なし星伽さんの動きが遅くなった気がした。

とりあえず今はおいといて、突きを避けた後は首筋に刀を添える。

これで終了、かな？

あっさり終わったと思うだろうが、戦いなんてこんなもんだ。

「と、とりあえず落ち着こう、星伽さん」

「……はい」

いろいろあつて、落ち込むのもわからなくもないが、今は誤解を解くことにする。

また、刃を向けられたらたまったもんじゃないからね。

VS 巫女さん！？ 死闘の2分間！！ …… くらい（後書き）

まだ2巻

はやく書きたい

最終回

ただ何となく、巫女さんと戦いたかったために書いてしまった。  
公開はしている。

不毛なやりとり 2人の帰国子女（前書き）

いつもヒドイ文章ですが、今回はかなりやばいかも……

## 不毛なやりとり 2人の帰国子女

「いいか、白雪。お前の聞いたうわさ通り、アリアはこの部屋で一時期寝泊りしていた」

キンジとの話し合いの結果、誤解を解くには真実を話すことが一番いい、ということになった。

このまま黙っていると、いつまた襲われるかわからないからだ。

「じゃあやっぱり、キンちゃんは汚されて……!!」

「だから、別に汚されてなんてないって言ってるだろ。俺とアリアは武偵同士、一時的にパートナーを組んでいたにすぎないんだ」

「……そうなの？」

正座をして、キンジの話を一字一句聞き逃さないように聞いていた星伽さんが、小首を傾げオレに真偽を尋ねた。

オレはキンジの言葉を肯定するために静かにうなづく。

「それに、お前、俺のあだ名を知ってるだろ？ 言ってみろ」

「ロリッ少女趣味」

おい、オレの麦茶返せ。

「……もっと前についたあだ名があっただろう」



「え？ えっと、女嫌い？」

「だろ」

「あと、昼行灯」

「……それは今は関係ない」

「は、はい」

キンジにはあと108つのあだ名があるぞー。バリバリ。

つて、言おうとおもったんだけど、キンジの目が鋭くなったので断念。実に残念。

「というわけでお前のそのよくわからない怒りは誤解であり、無意味なんだ。だいたい俺があんな小学生みたいなチビと……」

p r r r r r r

「アリア？ もっしー、フブキだけど」

『キンジに伝えといて、帰ったら風穴』

ピッ

「……そ、そんな仲になったりするわけがないだろう」

アリアって、いつから超偵になったんだろう。

「じゃあ、キンちゃんとアリアはそういうことはしてないんだね？」

「そういうことって？」

「キ、キスとか」

ハハハ、キンジに限ってそんなことあるわけが、

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

やったのかよ!?

そういえば、飛行機のなかでキンジが、いつの間にかヒステリアモードになっていた時があったが、まさかあの時か!?

「…………た…………の…………ね…………」

ひいっ!!

星伽さんから負のオーラが半端なく出ている!!

星伽さんの瞳孔がすーとかつぴらいていく。

その顔もみるみるうちに表情を失い、のどの奥から、ふふ、ふふふ、うふふふ、といった虚ろな笑い声が聞こえだす。

すまんみんな、この小説、R指定してなかったが、この話だけは別な。

星伽さんの顔が、いや、星伽さんそのものがお子様には見せられない状況になってしまっている。

「こうなったら!!」

フブキはアイテム『遠山キンジ』を星伽白雪(R指定モード)に投げつけた!!

効果は抜群だ!!

「うわっ、おいっ、フブキ!!」

「それっ、逃げろー!!」

さっき、一人で逃げた罰だ。

後で聞いた話だが、キンジを投げた後、星伽さんは気絶したらしい。

たぶん、目の前までキンジの顔が迫ったからだろう。

とりあえず、二人とも助かったわけだ。

めでたし、めでたし。

翌日

学校へ登校。

HRまでの空き時間は、いつも通りキンジと武藤で駄弁っている。

会話の内容は大抵、武藤が好きな乗り物の話やナンパについて熱く語るのをオレとキンジが聞き流している。

そして、HRへ。

教室に入ってきた高天原先生（22歳・独身）は教壇に立ち、大抵、顔にわずかだが緊張の色を出しながらHRを始めるのだが、今日はいつも以上に緊張しているようだった。

しかし、オレは特に気にはならず、いつものように1時間目が始まるまで、仮眠を取ろうと机に突っ伏そうとしたが、高天原先生の次の言葉により、それを中断せざるをえなくなった。

「今日はまず皆さんの新しいクラスメートを紹介しますね」

新しいクラスメート？

こんな時期に転校生なんて珍しいな。ていうか、転校ってできたっけ？

「アメリカから来た、二瀬ルリさんと二瀬リリさんです」

高天原先生がどうぞ、と言って中に入ってきたのは小さくて同じ顔が二つ。

ショートの金髪、碧眼で片方は黒のニット帽を、もう片方は白のニット帽をかぶっていた。

それ以外に見分けがつかない、つまり、この二人って……、

『双子ー！！！！！！？？？？？？』

クラスがどよめく。

つつか、お前らってこういう時チームワークいいよな。まあ、オレの声も入ってるんだけどね。

「先生、ボクたちアイツの近くに座りたい」

と、黒いニット帽（名前忘れた）が言い出した。

指を指す先は……キンジの方に。

「え？」

え？

え？

上から、キンジ、オレ、クラスの順な。

そして皆さん一斉に、さん、はいっ。

㊦  
え え え え え え え  
！ ！ ？ ？ ？  
㊧

「またキンジかよー！」「手が早いやつだ」「やつぱりああいう小さい子が好みなのかしら」「キンジ！！一人、俺に分けてくれー！」「フケツ！！」

クラスからの羨望、非難、その他諸々のコメントを浴びせられたキンジ。

しかし、まったく耳に入っていないようです。

「いや、今回はほんとにしらない。いや、こん」

を、繰り返しつぶやくだけで、現実逃避を起こしている状態。

クラス内は阿鼻叫喚（？）と化している。

この騒ぎを止めてくれる奴は理子かアリアぐらいだ。

理子はこういう時、おとぼけ発言でクラスのヒートアップしたテンションを下げてくれていた。

意図があつたかは知らないが。

アリアだったら、一発、発砲してくれればそれでみんな黙り込む。

だが、二人ともいないんだよなあ……。

となると、唯一の常識人であるこのオレ、桜野フブキが何とかしなくちゃいけないわけで。

「OK、おまえら。ここはこのオレ、武偵校の好青年、桜野フブキがまとめ役を務めようじゃないか」

「うつせえ、人たらし!!」「お前は武偵校の問題児だろうが!!」「あと、トラブルメーカー」「この間貸した千円返せ!!」「落ちこぼれのくせに!!」

うん、実はオレも結構、いろいろ言われてんだよね。

男からはあんまり良い印象を受けていないらしくてね。

どーでもいいが、千円の件はオレは知らんぞ。

まあ、とりあえずはみなさん落ち着いてくれたようなので、結果オライにしときましようかね。

「お嬢さん方、アイツはやめておいた方がいいですよ。あんまり、いいうわさは聞かないのでね」

後ろの方でキンジがなにやら不満をあげているが、無視の方向で。

「誰だよお前。キモイ」

ブチっ。

「あははは、それにしてもずっと下を見続けるのは首が疲れるなあ」

「なに！！ お前ケンカ売ってんのか！！」

「いやいや、小学生相手にケンカ売るなんて、そんな大人げないこととほしませんよ」

「ぶっ殺す！！」

「お、落ち着いてよルリちゃん。あなたも、変なコト言わないでください」

ふーん、黒い方がルリ、か。



「とめるなりり！！　こういう、世間知らずな男は、あたしが鼻つ柱叩き折ってやらないと！！」

「世間知らず？　オレが？」

「ボクらのこと知らないなんて、世間知らずにも程があるよ。アメリカ、ニューヨーク武偵局、強襲科<sup>アサルト</sup>Sランク武偵、二瀬姉妹の事を知らないなんてね！！」

「すみませんでした」

『あやまるの早っ！！』

うん、Sランク相手に下手にケンカ吹っかけたら、「かませ」なんて称号付きそうだからね。

不毛なやりとり 2人の帰国子女（後書き）

よろしくおねがい、いたしやす

## 決闘 2 on 2 (前書き)

「セグウェイ」という言葉を聞くと何を思い出しますか？

おそらく、ほとんどの人が原作1巻のUZI付きセグウェイが思い  
つくでしょう。

しかし、オレは違います。

オレが思い出すのは、セグウェイに乗って……

川に転落したことだった。

## 決闘 2 on 2

「セグウェイで死んだのかよ!？」

いつも通りのキンジさん、ツッコミ<sup>さ</sup>冴えてるね。

「言葉を慎めよ、キンジ。死人にツッコミを入れるのは最低野郎だぞ」

「そうだったな、スマン……。って、お前が言い出したんだろうが!！」

と、まあ、冗談はさておき、「冗談なんて言うお前が一番最低野郎だ」、ウルサイですよ、キンジくん。

「あんまりウルサイと、僕、そこら辺にいる人に君の秘密バラしちゃうかもよ?」

「おあいにくだな。ここは周りには誰もいない空き地だから、お前の脅しは通用しない」

そう、ここは、武偵高が乗る人工浮島<sup>メガフロート</sup>のハズレに位置する、通称、『看板裏』。

『かんばんうら』な。『チラシ裏』じゃないぞ。……今は忘れてくれ。

レインボーブリッジに向けて立てかけてある巨大な看板の裏であり、体育館との間に挟<sup>はさ</sup>まれた細長い空き地だ。

ここはオレのお気に入り、別の名前で『体育館裏』と呼んでいる。  
特別な意味はないがな。

最近、ここに来るようになり、理由はもちろん、秘密特訓するためである。

秘密特訓なのであまり語らないが、要するに、秘密の特訓だ。（イミフ

さて、何故ここにキンジと二人で来たかという、HRの後、あの双子に呼び出されたのだ。

一応、謝ったのだが、許してくれなかったのだろうか。

「あつ、来たよルリちゃん」

白いのがオレたちの来訪に気づいたようだ。

「おせえぞお前ら！！ 呼び出したんだから10秒で来い！！ 踏み潰すぞ！！」

チビがなに言ってるのやら。

謝ったとはいえ、オレはあの黒いのは好きになれそうにないな。

「で？ オレたちになんか用？」

「すみません、その前に一つだけ確認したいことがあるんですが。」

遠山さん」

「俺に？」

そういうと、白い方がキンジに近づいて来て、キンジの目の前に立つ。

その距離はわずか数センチ。

目の前に女の子が来て、半歩下がりつつも二瀬リリから目を離さないキンジ。

身長差が大きいのでキンジは下を二瀬は上を向いた状態になるのは必然的。

そして、突如動いた、二瀬リリ。

「んっ」

わずかに頬を紅潮させつつ、めいっばい背伸びをし、彼女の唇をキンジの唇に強引に押し付けた。

「な、なにやってくあwせdrふじこー!」

コイツの行動は意味が分からない!!

「落ち着け、フブキ。キスの一つでそんなに騒いでいたら彼女のひとりもできないぞ」

「うるさいよ!! 元は女嫌いのくせに!!」

女の子とキスをしたのなら、キンジは必然的にヒステリアモードになるわけ。

このモードのキンジとはあまりしゃべりたくないんだが。

「ていうか、お前らはオレに用があったんじゃないのか？ 何故キンジに……キ、キスなんか……」

「単刀直入に聞きます。桜野フブキ、あなたはいったい何者なんですか？」

何者なんですかって、ただの普通の男子高校生だが。武偵のな。

「あくまで、しらばつくれますか。まあ、簡単にしゃべってくれるとは思っていませんから……強引にでも聞き出します」

「よくわからんが、やろうつてのか。でも、なんでキンジも呼んだんだ？ オレ一人だけなら楽勝だろうに」

「嫌いなんです。ザコ1匹をリリ達、2人がフルボッコにするのは」

「言ってくれるね。キンジ！！ 援護をお願い！！」

「俺もイマイチよくわからないが、了解だ。全力で援護する」

なんで気合い入ってんの、この人。

「よっしゃ！！ リリ、アイツを踏み潰せばいいんだな！！」

「うん、気を付けてねルリちゃん。特に、”ヒステリアモード”のキンジさんには」

「「!？」」

二瀬リリの言った、一つの言葉にオレたちは反応、もとい驚愕する。どうして、あいつがキンジのヒステリアモードのことをしってるんだ!？

もしかしてこいつら……

「なあフブキ。こいつらってまさか……」

「イ・ウーのやつらかも。でも、今の発言だけで判断するのは難しいかも」

「だな。まあ、なんにせよ……」

「この勝負、負けられない!-!」

全員が戦闘態勢をとる。

オレは愛用のガバメントを右手に持つ。



キンジが持つ銃は、ベレッタM92Fを違法改造した通称「ベレッタ・キンジモデル」。

白チビの持つあれは……グロッグ21か？

銃はあまり詳しくないんだよね。強襲科<sup>アサルト</sup>の人間として、どうなの？  
って、聞かれてもなにも言い返せない。

それより、黒チビは……なんか、グローブをはめたなあ。

もしかして、接近戦？

「さあ、やろうぜ。ボッコボコにしてやんよ!!」

ひいー、ツツコんでキタアーーーーー!!

で、でも、これならカウンターで……。

「フブキ!!」

キンジの声に気づく。敵は一人じゃないんだった。

ズギュン!!

白チビがこちらに銃を向けて発砲。

キンジのおかげで何とか反応できたが、白チビの撃った弾、オレの頭があった位置を通ったぞ。

あいつ、オレを殺すつもりか？

「よそ見してんじゃねえよ！！」

「！？ やべっ！！」

片方に気を取られれば、片方の攻撃が迫ってくる。

相手が二人なら、そういう状況になるのは当然なんだ。

すぐさま、キンジが白チビを撃つ。

だが、たとえば味方が何人いようと、隙があれば攻撃してくる。

オレはとんだマヌケだな。

「はあっ！！」

「ぐっ！！」

懷まで入ってきた黒チビから、オレは腹に強烈な一撃を喰らってしまふ。

痛みのせいで、そのままその場でしゃがみ込む。

……フリをして、黒チビに足払いを仕掛ける。

「ふっ、やられるかよ！！」

軽い跳躍で避けられ、黒チビはそのまま、顔よりも後ろに下げた（

というより上げた？）右の拳は強く握りしめられていた。

「やっべー!!」

跳躍後の高さを生かした振り下ろし、当たると痛そうなので、顔面を右に傾ける。

しかし一瞬、黒チビが、にやりと笑う。

ヤツの拳を避けたと思えば、目の前からもう一つの拳が飛んでくる。

これを避けるのは……ムリだ。

「ガッ!!」

黒チビの強烈な左フックは、オレの右頬を完璧にとらえ、軟弱な体ごと吹き飛ばされる。

「ぐっ!!　ぐっ!!　がはっ!!」

吹き飛ばされた時、コンクリートの床をトランポリンでもないのに2、3回跳ねる。

なんとか地上に着地（というより静止？）できたが、敵の攻撃は終わらない。

上半身を上げ黒チビの方を見ると、白チビとキンジの銃撃戦を背景に黒チビがこちらへ、再び迫ってくる。

追撃されるのは避けたいところだったが、ダメージの残る体は素早

く動かすことができず、あっさりとマウンテンをとられてしまう。

「終わりだ」

神様に祈るように両手の指を絡ませ、それを振り上げる。

ぐっ、負けるのか、オレは……！？

## 決闘 2 on 2 (後書き)

前書きの話はリアルに作者が見た夢です

今話も、緋弾のアリア・たった一人のニュートラル・を読んでいた  
だき、誠にありがとうございます。

さて、みなさん、このタイトル長すぎだともいませんか？

何を唐突にと思うかもしれませんが、僕がタイトルを入力するとき、  
長すぎて面倒なんですわwww

なので、短縮しました(祝) 88888888

これからは「緋弾のアリア・ひとニユ」略します。  
では、また。

G o t o t h a n e x

t!!

感想もお待ちしております。

決闘 決着の末（前書き）

フブキ、ピンチ

## 決闘 決着の末

くそっ、もうだめなのか!?

そう、あきらめかけた時、急に頭が冴え渡る。

『最後まであきらめないんじゃないのか』

またバ力をやらかした、決めただろ。

諦めないって。

もっと、“集中しろ”!!

すると、突如、世界がスローに見え始める。

この感覚、どこかで……。

いや、いまは考えるんだ!!

そうすれば、突破口が開かれるはずだ。

オレの手にはガバメントは無かった。

おそらく、殴られて吹っ飛ばされた時におとしたのだろう。

だったら、素手で……いや、コイツは見た目とは裏腹に、思った以上に力が強い。

じゃあどうする……。

そうだ、オレの背中にあるものがある。こいつを使えば……！！

「死ねっ！！」

「死んでたまるかよ！！」

背中に指しておいたマイクロUZIを抜き、黒チビの額に押し付ける。

「終わりだ。お前の負けだよ」

「くっ」

歪んだ表情を見せるも、振り上げた両拳は力なく落ちた。

あかりちゃんに持たされた銃が、まさか役に立つとはね。

「やったか、フブキ」

声のした方を向くと、どうやらキンジの方もケリがついたようだ。



「あつたりまえ！！ イ・ウーのやつらなんかに負けてられないよ！！」

「？ リリ達はイ・ウーなんかじゃないですよ？」

「……じゃあ、なんなの？」

「なんなの、と聞かれましても」

「そういつ、お前こそなんなんだよ！！」

負けたことが悔しかったのか、さっきまで意気消沈していた黒チビが急にワンワン吠えだした。

「なんだかんだと聞かれると、答えてあげるのが世の情けなのかもしれないが、オレは普通の男子高校生だ」

「……ニワカに信じがたいです」

「いや、信じろよ！！ どう見たって普通の学生だよ！！」

「まあ、フブキじゃ普通にはみえないのも無理はないな」

「キンジまでなに言っちゃってんの！？」

そつえば、ヒスモード解けたのね。

「ったく、なんだかよくわからんことになってるみたいだし、一旦場所を変えよう」

「リリ達をどうするつもりですか!？」

「どうもしないよ!！」

黒いのは好きになれないが、白いのも好きになれそうにない。

所変わって自宅

授業? ナンノコトデスカ?

「そうだね、そっちから改めて自己紹介と経歴、それからオレたちのことを話してもらえるかな?」

「なんでボクたちからなんだ、お前から話せよ」

「負けたくせに偉そうなことやってんじゃねえよ」

「すみません、リリから話します。二瀬リリ。父親がアメリカ人、母親が日本人のハーフです。見た通りリリ達は双子です」

白い方がリリで妹らしい。

乱暴者の姉にしっかり者の妹というわけね。

彼女たちは日本へは4月の新学期開始と同時に転校してくる予定だったそうだ。

しかし、ニューヨーク武偵局で急な任務クエストが入り、帰国が遅れたらしい。

そうか、それでクラスに2つも余分な席があったのか。

「ふーん、なるほどね」

「でも、信じるのか？」

隣に座っていたキンジが耳打ちしてくる。

そりゃそうだ、こちらが疑いを持つてる相手の言うことなんか信じられないさ。

だけど、

「大丈夫、裏は取れてるよ」

二瀬の話を聞きながら、オレはメールのやり取りをしていた。

信頼できる情報屋、というか情報科の山吹先生に確認してもらった。

つつか、みんな山吹先生のこと覚えてる？

まあ、忘れててもいいや。

「一番気になるのは、どうしてキンジのこと、いや、キンジのヒステリアモードのことを知っているのか、だよな」

「だが、イ・ウーのやつらなら知っててもおかしくはないだろ。理子だって知ってたんだからな」

「僕らはイ・ウーなんかとは関係ない!!」

急に叫ぶ黒チビ。

「まあ、疑ってたらキリがないよね。そうすると、武偵高の……いや、人類みんなイ・ウーだって疑わないといけなくなるよ」

「それは極端すぎるだろ。だが、コイツらは関係ないみたいだな。お前のもらった情報が正しければ」

「ハイハイ。イ・ウーのことは置いて、じゃあなんでキンジのヒステリアモードのことをしってるのかね」

だが、一向に話そうとはしないチビ2人。

でも、なんだろうね。話さないというより、話すかどうか迷っているといった感じだ。

「……リリ達は……」

決心がついたのか、話を始める、二瀬リリ。

しかし、オレたちはとんでもないことを聞くことになる。

「別の世界から転生してきました」

**決闘 決着の末（後書き）**

やっと、始められる……

感想、お待ちしております

止めるブレーキ壊れかけ（前書き）

勢いで書いた。後悔しかない……

## 止めるブレーキ壊れかけ

皆さんの思ってる「双子」ってどんなものですか？

いつも一緒にいる仲のいい兄弟姉妹ですか？

顔が全く一緒に好みもまったく一緒だと思いますか？

リリは他の双子を直接見たことはありません。

テレビに出ている双子の人たちをちょこっと見たぐらいです。

テレビに出てくる双子たちは、前述したとおりの人たちばかりです。

しかし、リリ達双子は顔が一緒ということぐらいで、後はまったく違います。

好きな食べ物も違えば、着る服も違う。得意な科目も違ったり、苦手な科目も違う。

そして、リリ達の関係は他の双子たちとは違う。

一言で言うならば……「最悪」が一番の表現です。



「119番ですか！？ 早く救急車を2台！！ 頭が危険な状況なんです！！ できれば、色付きの……」

「お前が運ばれる！！」

「ぐえっ！！」

携帯で119番する振りをしたら、黒チビ（通称：二瀬ルリ）にライダーキック（？）された。

「このチビいつかころす」

冗談に決まってるじゃないか。

「……本音と建前が逆になるギャグは著作権的にまずいのでは」

「イヤ、その前にギャグに著作権ってあるのか？」

「あるんじゃないの？」

白チビのツッコミにツッコミをする、天才ツッコミヤー、遠山キンジが法律を持ち出した。

「ツツコミヤーってなんだよ」

「選手のことをプレイヤーっていうでしょ。だから、ツツコミにヤーをつけて、ツツコミヤー」

こうして、キンジに新たな2つ名が……

「つけない、つかない、つかせない。……ったく、だいたい、お前のせいで俺がどれだけ迷惑かけられているのか……」

「3人ともコーヒー飲む？」

「聞けよ、人の話を……」

「聞いてるよ。たしか、宇宙人が来て宇宙大戦争が勃発するかもしれないって話でしょ」

「誰も言ってねえよ…… コーヒーの話してたんじゃないのかよ……」

「コーヒーの話もしてないよ…… まずは、ボクらの話を……」

「そうですよ。リリはミルクと砂糖たっぷりです」

「えっ!? リリ、コーヒーの話だったの!?」

「ちげえだろうが。えーっと、二瀬、話を戻そう。もう一度話してくれないか」

「リリでいいですよ。紛らわしいですし」

「ボクのことルリで……」

「コーヒーお待ちい！！」バシャアッ！！

「あち！！ あっちちち！！ なにしやがる変態野郎！！」

「あら、ごめんあそばせ。視界に入ってたからわからなかったザマス」

「さりげなく背が低い事、揶揄やゆしやがったよな！！ そして、なんで急にキヤラ変わってんだよ！！ ていうか、普通に謝れよ！！」

「ごめんね、ルリちゃん」

「いや、リリが謝るんじゃないって！！」

「許してやれよ。姉妹きみだいだろ」

「姉妹きょうだいでも今この状況には必要ない関係性だろ！！」

「……っち。ノリツツコミなしか、ゴミめ。キンジ、お手本」

「わかった。よく見とけよルリ」

「えっ、あ、ああ」

キンジは立ち上がり、構えをとり、それから……

「……って、やんねえよ！！ 何やらせようとすんだよ！！」

「今のは、ボケたの？ マジでツッコんだの？」

「いやあ。おどろいた、まさかこれほどまでとは」

オレはキンジに拍手と贅辞を送る。

すると、静かにコーヒー（あえて塩と豆乳をたっぷり入れてみた）を飲む、二瀬リリもオレに続いた。

「すばらしいですね。うちのお屋敷でも是非ご披露してくださってくださいませんか」

「家は屋敷じゃなくて寮だよ、リリ」

「質より量だよ、アニキ！！」

「ダメレ、フブキ」

「はいっ」

「それよりおながが空きました、フブキ兄さん」

「兄さん？」

「リリって、なんとなく妹キャラっぽくありませんか？ だから、あえて兄さんと呼ばせてください」

「いや、ボクの妹だろ」

「ふん。いきなり人にキスするような奴だからどうせなにか裏があるんだr1kじゅふおjg@あgふじ」

「大丈夫か、フブキ。顔真っ赤だぞ」

「何言ってんだ!! なんとわれようがどうじないのがこのオレ、桜野フブキれるりよ」

「最後……決まらなかったな」

「変態だ、変態がいる」

「いきなりキスしたのはキンジさんをヒステリアモードにするためですよ」

「キンジを？」（キンジは兄さんって呼ばれなかった、ざまあみろ）

「俺をヒステリアモードに？」（さん付けか……）

「素のキンジさんと戦っても余裕で勝っちゃいますからね。やりがいがありません。でも、ヒステリアモードには勝てませんでした」

「素のキンジって聞いたら、急に素パスタ食いたくなっただでゴザル」

「どこに関連性があった」

「素パスタ、リリも大好物ですよ。毎日食べてます」

「「二瀬家え……」」

「いやいやいやいや、毎日、色とりどりのおかずで食事してるから  
！！ 哀れみの目でボクを見るな！！」

「ああ、そうだな。スマン。お詫びと言っちゃあなんだが、家うちでく  
つてけ……くつ」（涙が……）

「おい、マジでヤメロ」

「ルリちゃん、せつかくだし食べていこうよ。タダ以上の得なんて  
ないよー！！」

「「二瀬家え……」」

「これ以上、ボクを混乱させないでくれええええええ！！ ああ、  
父さん、母さん、どうやらボクの知るリリはこちらの世界にくると  
きに、途中で落としてしまったようです……」

「そういえば、お前らって別の世界から来たって言ってなかったか」

「始めからその話をしろおおおおおおお！！！！！！！！」

## 止めるブレーキ壊れかけ（後書き）

突然、書きたくなったので書きました。  
感想、お待ちしております。

現実なんて……（前書き）

前回の話、すみませんでした！！

なんか、飲んだ勢いで書いたみたいになってしまって、暴走しすぎました。

反省しております。

もう、ギャグなんてしない……



現実なんて……

ああ

冷たい

コンクリートってこんなに冷たいんだ

でも

1度だけ道路で寝そべってみたいと思っていたんだよね

最後に

願いがかなってよかった……

「転生、か」

双子の今の状況は、二次創作でよくあるトラックに轢かれて2次元の世界へ入り込むといった感じだ。

「キンジは、信じる信じないの前に話を理解することはできた？」

「二次創作とかいうのは、お前や理子に散々聞かされたからな。大体のことはわかった」

キンジに何度も話しておいてよかったよ。説明する手間が省ける。

「理解したところで、さらに質問。この話、信じる？ 信じない？」

その質問をしたところ、キンジはしばらく思案するも、一向に口を開く気配がない。

現実世界で暮らしていた彼女たちが死んでしまったため、この次元の世界にやってきた。

そんな非現実的なことを信じるヤツなんて、いったいどこにいるんだろうか。

……ここにいます。

「オレは信じてもいい」

「「！？」」

オレの言葉に表情を明るくする双子。

うん、やっぱり女の子は笑顔が1番だね。

「ホントに信じるのかよ。どう考えてもありえないだろ」

「でも、キングジのヒステリアモードのことや、この間の理子の起こしたハイジャック事件の内容も、この子ら全て詳細に知ってたんだよ。それはどう説明するのさ」

「うっ、それは……」

実は先ほど、彼女たちが詳しく話してくれたんだが、長かったので省略させてもらった。

簡単に言っと……

彼女たちは異世界、いや、現実世界から来た。

そして、この世界は彼女たちが元いた世界で小説として作られていた。<sup>ラノベ</sup>

現実世界で死んだ彼女たちは、死後、突如現れた”ネ申”に、好きな物語の世界に転生する機会を与えられたそうだ。

そこで選んだ世界が現実世界で大人気のライトノベル、「緋弾のアリア」つまりこの世界というわけだ。

「それに、どうせウソをつくならもっとましなウソつくっしょ」

「お前の考えは相変わらずわからん。でも、まあとりあえずは信じてみるか」

「ホント!？」

「まあ、この武偵の世界ではいろんなこと抱えながらも楽しくやってるやつだっているんだ。お前らも好きにしたらいいさ」

ヒューー!!　かつこいい!!

「あ、ありがとな!!　遠山!!」

「キンジでいい」

「ありがとうございます、キンジさん」

「おう」

「ありがとう、キンちゃん」

「キンちゃん言うな」

こうして、双子騒動は一旦、幕を閉じたのだった。

「で、なんでおまえらがまだここにいるんだ」

「だって、折角2次元の世界に入れたんだ!! 主要キャラの側で楽しくやりたいじゃんか!!」

「だからって、俺らの部屋に住み着くこともねえだろうが!!」

「大丈夫ですよ、キンジさん。リリ達は2人で一つの部屋を使いますから」

「ああ、そうか。……じゃねえだろ!! 自分たちの寮に帰れって言ってるんだよ、俺は!!」

「ZZZZZZZZ」

「もう、寝てやがる!?!」

なんて会話を自室から聞いていたオレは、ある人物に電話を掛ける。

『なんですか、先輩? 今、あかりちゃん養分の補給で忙しいんですが』

「なんだよそりゃ……。実は頼みたいことがあってな」

『自殺用の毒物ですね。至急手配します』

オレの周りにはドSしかないのか。

「明日の放課後、ちょっと見てほしいものがあるんだが」

『そういうことは男の人に言ってあげたらどうですか？』

「アッー！！　な展開にしようとするな！！　なあ、頼むよ。他に頼めそうないんだ」

『ギブ&テイクという言葉をご存知ですか？　それなりの見返りを要求します』

「見返りって……ちょっと、見てほしいものがあるだけなんだが」

『放課後のあかりちゃんと過ごす貴重な時間を使っんですよ。この時間の大切さがあなたにはわからないんですか！！』

知らんがな。

「ていわれてもなあ。最近、金欠だし……あ」

ふと、机の上に目をやるとあるものを発見する。

『？　どうしましたか』

「『ラクーン台場』のペアチケットが2枚か……」

現実なんて……（後書き）

詩でも書くかね

感じた

想い

・

待とう

つらいことがあっても

てだすけしあい

またいつか

すばらしい日々を

## 2枚のペアチケット（前書き）

まあ、次回へのつなぎみたいな回です。  
短いです。



## 2枚のペアチケット

「来ましたよ、フブキ先輩」

「フブキさん、こんにちは!!」

双子が家に住み着いた日の翌日の放課後

昨日電話で志乃に見せたいものがあるから、と、呼び出しはしたが来てくれるかどうかは不安だったが、それもどうやら杞憂のようだった。

妙な尾ひれがついているが。

「よう。すまん、わざわざ来てもらって」

「そう思っただけなら呼ばないでください。時間は有限なんですから」

「はいはい。すみませんね。物はこっちにあるから」

そう言っ、部屋へ招き入れようとしたのだが、空気と化していた（もちろん意図的に）ちびっこ後輩が流れを止めた。

「ちょっと、フブキさん!! あたしのことわざと無視してるでしょ!?!」

「…… ￥アツカリンノ」

「ハイ！！　って、やっぱりわざとですか！？」

「実はこれなんだが、これを見てどう思う？」

「すごく……長いですね」

「やっぱり、無視ですか！？　あと、もうちょっと言い方変えてくださいよ！！　志乃ちゃんは特に！！」

オレがみせたのは、光秀から（あかりちゃんが）奪った刀。

只の刀ならわざわざ見てもらう必要ないんだが、この間の星伽さんとの一戦の時に、この刀に妙な違和感を感じたため、刀を使う志乃に見てもらうことにした。

正直、志乃が刀に詳しいかどうかはわからないがな。

「この刀……」

「知っているのか……志乃！？」

「巫山ふざけ戯ると切りますよ」

「ごめんなさい」

本当に切り殺されかねないので、「冗談は自重することにする。

ちなみに、アカリンはリビングの方においやった。

あまり、あの時の戦闘は思い出させたくはなかったからだ。

決して、空気キャラにしたいわけではない。

ホントウデスヨー。

「私は特別、刀に詳しいわけではないですが、これはおそらく妖刀の類です」

「妖刀？ えっ、この刀呪われちゃってたりするの？」

「別に呪いとかではないです。この刀には変わった力があるんですよ」

「変わった力？」

「超偵などの力を吸い取ります」

超偵。

星伽さんも確か超偵だった。

刀が交わってから、星伽さんは一瞬だが怪訝な表情を見せた。

それから、次に繰り出された突きも、速さが鈍く、オレでも視認できぐらいだった。

もしも、志乃の言うことが本当ならば、この刀は間違いなくいわくつきの刀。

つまり、『妖刀』

「使うと……まずかったり、しつちゃったり？」

「いえ、所持者には特別、影響はないと思います。ですが、何度も言うとおり、私はそこまで刀には詳しくはありません。専門家に見てもらうことをお勧めします」

刀に詳しいやつ、知り合いにいるかな？

「わかった。ちゃんと見てもらうまでは、あまり多用しないようにする」

だが、携帯はしておこう。

こいつがあれば、超能力者に襲われても対処できるかもしれない。

「そうしてください。では、私はこれで」

「ああ、ありがとう。おっと、忘れるところだった。これがお礼な」  
そう言って、机の上に置いてあった『ラクーン台場』のペアチケットを2枚渡す。

「2枚もいららないですよ。私はあかりちゃんと”2人で”いきますから」

なぜか、”2人で”を強調された。

「あっ！！ それって『ラクーン台場』のペアチケットですよね！  
いいなあ、フブキさん。連れてってくださいー！！」

嫌な予感しかない。

## 2枚のペアチケット（後書き）

話、進まないなあ。

## ラクーン台場（前書き）

『ラクーン台場』に来たAA組とオレ。そこで楽しんでたオレらに突如、武偵校から周知メールが届く。武偵が一人さらわれた。場所は『ラクーン台場』。原則的に2年生が動くこと、と書かれてあったが、あかりちゃんの一言でオレたちは二手に分かれて探すことになった。

## ラクーン台場

「ここにきて壮大なカットですか!？」

「うわぁっ!! 何!? 急に!!」

中学生の武偵が一人、ここ、『ラクーン台場』で誘拐されたと携帯にメールが届き、オレたち4人は2人ずつ別れて、誘拐された武偵の搜索を開始した。

搜索を開始して数分後、あかりちゃんの盛大なメタツツコミが炸裂。なかなか、見つからないからイラだってるんだな。

「どうしてですか!？ あたしたちが遊園地でキャッキャッと楽しむ姿を読者の人たちも読みたいはずでしょう!？ それから、あたしのせつかくの名台詞もカットだなんて……」

「いや、オレに言われても……。ていうか、さっきから何言ってるの?」

もしかしてあかりちゃん……酸素欠乏症に……。

「どこのテム〃〇イさんですか!! そんなことより、あれ見てください!!」

あかりちゃん、ガン〇ム見たことあるのか……。

なんて考えている前に、あかりちゃんが指さす方向を見上げると、



窓からたくさんの紙飛行機が飛んできた。

「あかりちゃん、キャッチー!!」

「ハイ!!……あつっ!!」

頭に刺さってる……。

「なになに、『703NFターザン戻りでダイブ』?」

「それって、誘拐された子からのメッセージじゃ!?」

「703……号室、NFは……ナイフとフォーク?」

「ふざけてる場合ですか!!」

「あつ!! 志乃か!? 武偵の短暗号を発見!!<sup>ショートサイファー</sup> 場所はラクー  
ングランドホテル!! すぐ集合してくれ!!」

暗号を読みながら志乃に通話して、すぐ召集をかける。<sup>コール</sup>

「フ、フブキさんが真面目にやってる……」

ラクーングランドホテルのロビーに集合したオレたち4人は、すぐに作戦会議に移行した。

「703は部屋番号、NFはNeed Friendlyの略、つまり応援要請ですね」

「うん。『ターザン』は強襲科アサルトでロープワークの暗号ねサイファー」

「成績の悪い先輩でも暗号は覚えてるんですねサイファー」

ニヤニヤしながら軽口をたたく火野。

ちくしょう、人を馬鹿にしゃがって……くやしいです!!

「うつさい」

「だけど、戻りでダイブの意味がわかりませんね」

「とりあえず、ここは窓とドアの両方から挟み撃ちにするのがセオリーですよ、フブキ先輩」

「うん。それじゃあ、オレがターザン役を……と、いいたいがここは火野に行ってもらう」

「お、先輩わかってんじゃない、アタシの実力も、先輩自身の実力も」

「……先輩が後輩を危険な目に合わせるっていうのは、人としてどうかと思うが、実力だけで考えればお前の方が断然いい。アサルトライフルもあるしな」

何度も言うが、人として、男として、この選択は気が引ける。

だが、戦略的に考えるとどうしてもこの答えにしかならなかった。

「よしっ！！ それじゃあ、行くか！！ 頼んだぞ、火野！！」

「あいよ、先輩。次に会うのは703号室で！！」

なんて、ことを言っておきながら、あかりちゃんがやってくれちゃったりする。

奇襲を成功させるために、まずは志乃に強引にドアを破ってもらう。

その後、オレとあかりちゃんが勢いよく入り、

「「武偵だ（です）！！ 武器を捨て投降s……」」

どぐしゃあ！！

あかりちゃんがスリッパでスリッパ。

それに巻き込まれ、オレもこける。

「武器を捨てるのはお前らの方だぜ」

「どうしてそこでこけるのですー！！」

人のせいにしたくないが、全部あかりちゃんが悪いと思う。

「ハハっ！！ 武器と人質が増えたぜ！！」

アホそうな男がオレたちの武器を手にして眺めていた。

どうやら、武器を手に入れるのがこいつらの目的らしい。

武器なんて、手に入れるルートなんていくらでもあるのに、わざわざ武偵にケンカ売るなんて馬鹿なやつらだぜ!!

その武偵が捕まってちゃあ、ざまあないよね……。

後は火野しだいか。

なんとかこちらに注意を引いておく必要があるな。

オレは頭の良さそうな(?)グラサンに声をかける。

「はははは。はーっはっはっははは!」

「な、なんだ急に?」

「あたまのねじが吹っ飛んだんじゃないですか?」

「それはいつもです!」

「ひどいよ、あかりちゃん!」

おもわずツッコんでしまった……。

結局、漫才をしてしまう。

「なんなんだこいつら……あたまが変なやつらしか人質にならねえな」

マヌケな方の男がそう答えた。

「お前の頭の方が変だろうがな」（ボソリ

「なんだとっ！！」

「フブキ先輩、挑発してどうするんですか！！」

「そうですよフブキさん！！　いくら本当のことでも言っていない事と悪いことがあるんですから！！」

「ちよっ、あかりさんまで！！」

「てめえら……言わせておけば……！！！」

男が立ち上がってこちらに来ようとした瞬間、窓に影が。

キタっ！！

ババババババババ！！

火野がライフルを乱射し、窓ガラスが割れる。

「な、なんだ……？」

急な出来事にアホそうな男が狼狽<sup>うろた</sup>える。

「バカが！！　そっちにはだれもいねえよ！！！」

バカはお前だ。

寧ろ、誰かいて当たっちゃったらどうするんだ。<sup>むし</sup>

……ところで、これからどうすんの？

「ガウ、ですのー！」

グラサンに捕まっていた人質、島麒麟が、グラサンの腕を噛んでその捕縛を解く。

そのあとは軽やかに、歌いながらくるくる周り、そして……。

「3、2、1、キャッハーンっ」

窓からダイブした。

「「「「「！？」」「」「」」

犯人2人も、オレたち3人も、皆がその行動に驚愕した。

だが、『戻りでダイブ』、だろ？

窓から飛び出した島麒麟を、振り子の要領で戻ってきた火野が見事にキャッチ。

そのまま、プール側へとダイブ。

なんて、発想力だ。

「クソッ!!」

しかし、グラサンがもっていた回リボルバー転拳銃で宙に浮かぶ火野と島麒麟を狙いだした!!

「ちっ!!」

「だめえ!!」

それを見て、オレとあかりちゃんが動く。

「動くなてめえら!!」

アホそうな方の男が、両腕に持っていた銃でそれぞれを狙う。

だが、止まっていられない。”集中しろ”!!

オレは背中に隠していたガバメントを引き抜きながらグラサンに突撃。

（アホそうな方の男はまかせたよ、あかりちゃん!!）

（まかせてください!!）

的なやり取りを脳内で流し込み、オレはただまっすぐ突っ走る。

しかし、グラサンのトリガーにかかる人差し指が屈伸をし始める。

間に合わないか……!!



なら、これしか……！？

グラサンにショルダータックルを喰らわせながら、オレは左手のガバメントをグラサンとほぼ同時に発砲する。

オレがやるのは……銃弾撃ち（ビリヤード）だ。

ほぼ、感だけが頼りのな。

互いにまっすぐ飛んでいく銃弾は途中で互いがぶつかり合い、火野の方向とは全く別の方向へと飛んで行った。

「つぶね」

火野たちはそのまま、プールへと突っ込み、生を確認した。

「てめえら動くな！！……って、あれ？」

アホ（ry の両手にはすでに武器がなくなっていた。

この間のように、あかりちゃんが奪っていた。

そして、志乃がアホを刀で抑え、あかりちゃんが奪った銃でグラサンを抑えてなんとか今回の事件は幕を下ろすことができた。

「あかりちゃん、バスタオルを持って迎えに行つてあげてくれないかな。囚われのお姫様と、それを救った王子様を」

「あ、ハイ、わかりました！！」

元気よく返事をしたあかりちゃんはバスルームからバスタオルを数枚持って部屋を飛び出して行った。

「よくそんなキザつたらしいことを言えますね」

「あはは、まあ、たまにはね」

ジト目で見てくる志乃に苦笑で返す。

さすがにクサすぎただろうか。

「それよりフブキ先輩。グラサンの撃った銃弾なんですけど……」

「あつ、その前にちょっと電話するところから質問はそのあとでね」

とりあえず、<sup>アムト</sup>装備科の平賀さんに連絡して、女子の防弾制服を2着頼んでおかないと。

2人のサイズ知らないけど、まあなんとかなるでしょ。

「……………何か、隠してる……………」

## ラクーン台場（後書き）

フブキ「と、言うわけで制服2着おねがいします」

平賀さん「それはいいけど、フブキくんはお金はちゃんともってる？」

フブキ「え」っ！？ お金取るの！？ しかも、オレから！？」

平賀さん「当然なのだ！！ 頑張った女の子には男の子がなにかプレゼントしてあげるものなのだ！！」

フブキ「……わかりました」（涙）

しばらく、昼飯は抜きかなあ……。

虚脱感というか虚無感というか（前書き）

脱力系な話

## 虚脱感というか虚無感というか

「あつ、先輩、どうも」

「ん？」

事件後、各所に携帯で連絡を入れたり、犯人の身柄を警察に引き渡したりと大忙し。

一応、事件解決したメンバーの中で最年長はオレだったため、オレが後処理を引き受けた。

というか、マスターズ教務科からお達しがあつた。

普段なら、文句の一つでも言いたくなるところだが、今回は本当に何もできなかったと自分でも思っている。

……言いたいことはわかってる、最後に火野を助けたじゃないか、だろ？

あれだつて、島麒麟の暗号をサイファーしつかり理解しておけば、事前に防げたことだ。

いわば、自分の失敗にけじめをつけた、って感じた。

なんて、かつこいい事が言えるようになれば、少しは様になるんだろうが、生憎、オレの口には冗談を言う能力しか付いていないため、結局、真面目なことは言えないんだ。

要するに、何が言いたいかっていうと、

「黙って仕事します」（涙）

と、<sup>マスターズ</sup>教務科に言うしかないんだ。

そんなこんなで、現場でいろいろやることを全部……ではないがあの程度終わらせて、ホテルのロビーまで来ると、火野に呼び止められる。

「先輩が用意してくれたんスか？ この制服」

火野が胸元あたりの生地をつまんで引つ張りながら、そんなことを聞いてきた。

「は？ 制服？ ……お前らがプールに突っ込んでビショビショだったから、ラクーンさんが気を利かせて武偵高に連絡したんじゃないのか？」

あくまでオレは知りませう、な態度をとりつつ、テキトーなことを言う。

言ったら、オレの口は冗談しか言わないんだって。

「ラクーンさんが……」

腑に落ちない、といった顔だな。

ラクーンさんに用意してもらうのがいやなんかねえ？

ちなみに、ラクーンさんというのはここ『ラクーン台場』やその他もろもろを経営する社長さんのことね。

すごい人なんだろうけど、気が小さい人だったなあ。

誘拐犯が立てこもってるって聞いただけで、ものすごい狼狽えてたもん。

そんなんでもよく社長がつとまるよな。

って言いたいが社長の仕事なんてどんなものか知らないし、知ろつとも思わないのでとかくいえた義理ではないが。

「ところで、その背中に背負ってるのはどういうことだ？」

「なんか知らないんすけど、なつかれてしまったみたいで……」

火野が背負っているのは、王子様の背中で気持ちよさそうに寝ている、さっきまで囚われのお姫様を演じていた島麒麟だった。

「ああ……これから大変だろうけど、ガンバレ」

「？」

オレの言葉に疑問を持つ火野。

だが、その疑問には答えてやるつもりはない。

極力、このお姫様には関わりたくないの。



「おつかれ。今日はもう帰っていいぞ。後はオレが全部やつくから。」

「はあ、わかりました。でも、コイツはどうしますか？ アタシ、コイツの家知らないですし」

オレは武偵手帳を取り出し、1ページにとある住所を書き込んで、そのページを破き、財布から取り出した数枚の夏目さんと一緒に火野に渡す。

「タクシーでその住所まで連れていけ。そこがソイツの家だ」

どうして知ってる、って顔をした火野に、「これ以上は何も聞かないでくれ」と頼むと、火野は「それじゃ、お疲れっス」と言って、帰って行った。

アイツとは関わりたくないんだよなあ。

アイツとの関係を簡単に説明すると、知り合ったのは去年で、理子を通じてだ。

理子とは、ゲーム（主にギャルゲー）仲間だったオレは、去年はよく、理子の部屋に行って一緒にゲームをしていたんだが、理子と戦姉妹を組んでいた麒麟も、理子のことを崇拜（？）していたせいか、同様に理子の部屋に来ていたため、出会う機会が多かったのだ。

アイツと、麒麟と話すのは、正直、骨が折れる。

会話終了後に、ものすごい疲労感を味わうのだ。

「今年になつてから、理子との戦姉妹契約が切れたせいか、めつきり会わなくなつたんだよな」

別に会いたかつたわけじゃないが。

「……仕事しよ」

どうしてアイツと関わりと、こつちも徒労感を味わつのだらう。

「そして、またお前が現れるわけな、光秀」

ものすごい疲労感を抱えて、帰宅していると、目の前に見慣れたくはなかつたが、見慣れた黒装束が。

「……ものすごく疲れてないか、お前？」

「なんか用か？ こつちは帰ってシャワー浴びたいんだが」

その後に4人分の飯をつくらないといけないんだがな!!

「安心しろ。お前をもう襲うつもりはない」

「あつそ」

それだけ言い、オレは歩き始めようとした。

まあ、止められるわけで……。

「いやいやいやいや、他にになにか言うことがあるだろう!!」

「ヤッター、モウオソワレナクテスムンダー」

「人をバカにしているだろ?」

失敬な、何か言えっていうから言ったのに。

理不尽だなあ。

それとも、乙女心というやつか。

……ん? 乙女?

「おまえって、もしかして……女だったりする?」

「ん? よくわかったな。顔も隠して、声も男性に近づけたつもりだったんだが」

そう言いながら、フードを脱ぐ光秀。

そこから現れた顔は、とても美人な……あれ？　どっかで見た顔だな。

「覚えてないか？　前に病院で会っただろ」

「……黒いワンピース来てた？」

「ああ」

……いろいろわかった瞬間、オレはその場にぶっ倒れた。

虚脱感というか虚無感というか（後書き）

感想、待ってます。

## 氷を使う回（前書き）

いろいろな意味で氷の話。

## 氷を使う回

「オレたちの戦いはこれからだ……」

「打ち切り!？」

ソファで寝ていたオレが、一人つぶやいた一言が、どうやら聞こえたらしく、食事中のルリにツッコまれた。

「熱があるのに無理をするから、頭がおかしくなったんですか？」

「頭がおかしいのは昔からだけどな」

「てめえら……」

言わせておけば。

しかし、体に力が入らず最後の一言が発せられなかった。

「……この部屋はおかしな連中しか住んでいないんだな」

「黒ローブを身にまとったアンタが一番おかしい、と言われるとは思わなかったのか」

「失敬な。人のファッションセンスをとにかく言う人間なんぞ最低だぞ、黒チビ娘」

「誰がチビだ!!」

「頼むから、少し黙っていてくれないか……」

「普段一番ウルサイフブキに言われる筋合いはないがな」

「そうですよ、フブキ兄さん。あ、氷枕に氷入れますね」

「もう、いつそのこと冷凍睡眠に入ったらどうだ？」

「人を何世紀眠らせる気だ!!」

まさか、オレがツツコミをするなんて……。

叫んだせいか、あたまがジンジンする……。

「はい、フブキ兄さん。氷枕と氷のうです」

「ありがとう、リリ……」

優しいなあ。

この子普段は、おはぎの中に針を仕込むようなことするのに。

ギャップ萌えでも狙っているんだろうか。

いや、萌える前にオレの命が燃やされかねないが。

「まったく、もうすぐ魔剣デモンソードが来るというのに、こんなことで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない」



「つつか、誰なんだ魔剣<sup>デュランダル</sup>って？」

「知らんのか？ まあ、私も詳しくは知らんが」

しらねえのかよ。

「ここに来る前に聞いた話だが、魔剣が星伽白雪を狙っていると聞いた」

「「「「！？」」」」

イ・ウーのやつらが、星伽さんを狙っている……！？

「白雪がだと！？なんでそれをもっと早くいわねえんだ！！」

「転生組！！ お前ら原作読んだんだろ！？なんで言わなかった！！」

氷のうをすっ飛ばし、ガバっ、っと起き上がりながら、転生組（双子）に質問する。

「いやあ、今、どの辺りの話なのかわからなくてねえ」

「アリアさんだっていますしね。原作出てきていない人もいますから、もし、話が変わってたら余計なこと言っちゃうことになりますし」

うつ、2次創作なんてオリジナル展開になる可能性が高いため、原作知識があると逆に混乱する場合が多いか。

「なんだ、その転生とか、原作とは」

「後で話す。それより、魔剣のこと詳しく聞かせてくれないか」

「言っただろ、私も詳しくは知らん、と。知っているのは、魔剣が星伽白雪を狙っていることと、名の通り、剣使い、後氷使いでもある、ということくらいだ」

超偵と同じ分類に入るやつか。

やりにくそうだ。

「氷使いつて、どういうの？ 氷投げてくるとか？」

「ルリちゃん、原作よんだよね？」

「氷投げてくるとか、痛そうな相手だね」

物理的にと、絵図的に。

「とにかく、白雪の所にいくぞ。いつ、魔剣つてやつが来るのかわからねえからな」

「キンちゃん、やけに乗り気だねえ」

「うるせえ、キンちゃん言っな」

「キンちゃんは、白雪のことが好きなのか？」

「お前までキンちゃん言うな、光秀。別に好きとかじゃねえよ」

「光秀という名は好きじゃない。私には結ユエという、プリティでチャーミングな名前があるからそっちで呼んでくれ」

「プリティ」(笑)

「チャーミング」(笑)

「黙れ、黒白。斬るぞ」

「ハイハイ、ハイハイ。刀持っていないやつが斬るなんて言っても説得力無いって。お前らもあんま煽ってやんな」ニヤニヤ

「ニヤニヤしながら言うな!! それより、私の刀を返せ!!」

「お前がなんでオレを襲わなくなったのか、イ・ウーの情報をくれたのか教えてくれたら返してやるよ」

「ムムム」

「「「なにがムムムだ」」」

「?」

キンジは今のネタに、わけがわからない顔をしている。

ネットとか、やってない人にはわからんか。

「私は元々、理子の部下みたいな立場だった」

「理子の部下みたいな？」

「イ・ウーに入っただけの私は、教授の命で理子に協力するよう言われていた。その理子が先日、イ・ウーを退学させられたんだ」

「退学つてのは、つまり、やめさせられたってことか？」

「そうだ。私は理子を慕っていた。理子が退学させられたから、私も一緒にやめたのだ」

「肝心の理子はどこいったんだよ」

「さあ？ 理子は私に桜野フブキのところに行けって言っただけ言っ  
て、どこかへ行ってしまった」

「……もしかして、司法取引に……」

「司法取引？」

「はい。この間の、理子さんの起こしたハイジャック事件。イ・ウーの情報を渡す代わりに罪を帳消しに行ったんじゃない」

なるほど。

リリちゃんがいうから、余計説得力がある。

「可能性は高い、か。それより、今は星伽さんと魔剣のことだ。イ・ウーのことはあまり世間には出したくないから、オレたちだけで処理するしかない」

「つつても、教師陣はしってるんじゃないのか？ イ・ウーのこと」

「それはそうだろうけど、結局はオレたちに任されると思うよ？  
そういう所じゃん、武偵高って」

「そうか」

「それより、早く私の刀を返してくれないか？」

「ダメです、フブキさん」

「なぜだー!!」

「まだ、ユエさんは信用できません。確認がとれるまではこの部屋  
で拘束を……」

「いや、刀は返すよ。待ってろ」

そういつて、リビングから部屋に刀を取りに戻る。

「どうしてですか!？」

「ほらよ。……理子がオレの所にこいつをこさせたってことは、オ  
レのことを少しは信頼してくれてるんだと思う。ユエはその理子を  
信頼して、オレの所に来てくれたんだ。だったら、オレもこいつの  
信頼に応えてやらないといけないからな」

「桜野フブキ……」

キンジは呆れ顔、リリは理解できないと言った顔、ルリは……飯食ってた。

こういうことに私用を持ち込むことはダメなんだろうってわかっている。

でも、オレはオレを信じている。

これがきつと正しいことだと。

## 氷を使う回（後書き）

これ書いたら、更新凍結しようと思ったけど、書いてたら楽しくなってきたからもうちょっと続けよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3593v/>

---

緋弾のアリア-たった1人のニュートラル-

2011年11月24日13時56分発行